博士学位請求論文

中国における大学生の就職意識に関する教育社会学的研究

高　静

広島大学大学院教育学研究科

教育人間科学専攻

D116399

2014 年 1 月 25 日

目次

序章　研究の目的 1

第１節　問題の所在 1
第２節　先行研究の検討 2
　１　大卒の就職に関する先行研究 2
　２　就職意識に関する先行研究 4
　３　大卒者の就職と大学教育との関連に関する先行研究 7
第３節　本研究の課題 8
＜注＞ 11

第１章　大学生の就職と就職意識の問題 12

第１節　大卒者労働市場 12
第２節　大学生の就職事情 13
　１　職業の「統一分配制度」の段階 13
　２　「自由就職制度」の段階 13
第３節　大学生の就職意識の問題 17
　１　就職意識の問題の提出 17
　２　就職意識の問題の実態 18
　３　政府の対応 20
　４　就職意識の問題に関する研究の課題と検討 22
＜注＞ 23

第２章　地方における大学生の就職 25

第１節　地方における大学生の就職意識 25
　１　地方大学の学生の就職意識の問題―先行研究からの検討― 25
　２　地方出身の大学生の就職意識の問題―「蟻族」問題からの検討― 26
第２節　調査地山東省の概要 28
　１　山東省の地域性と中国における地位 28
　２　山東省の高等教育と大学生就職 32

第３章　研究の枠組みと方法 36

第１節　調査の概要 36
第２節　本研究における「家庭背景」 38
第３節　大学生の就職意識の概観 41
　１　職業の選択基準 41

2　進路に対する希望 43
3　就職に対する考え方 44
4　まとめと考察 47
＜注＞ 49

第４章　就職意識の構造と規定要因 50

第１節　就職意識の構造 50
1　希望する就職と大学との関連 50
2　就職先を決める際に重視する項目に対する大学の影響 53
3　就職に対する考え方および取り組みに対する大学の影響 55
第２節　「語り」からみる就職意識の規定要因 58
1　キャンパスライフとの関連 58
2　家庭からの意識の継承 59
3　家庭状況からの影響 61
第３節　家庭背景の影響 63
1　就職先を決める際に重視する項目に対する家庭背景の影響 63
2　就職先に対する志望における家庭背景の影響 66
3　キャリアに対する考え方における家庭背景の影響 67
4　キャリア志向における家庭背景の影響 68
第４節　まとめと考察 71
＜注＞ 73

第５章　就職意識が大学生活に与える影響 74

第１節　大学生活の概観 74
1　大学と専攻の志望理由 74
2　学習生活 76
3　正課外の大学生活 77
第２節　学習生活への影響 79
1　大学・専攻から見る学習生活 79
2　学習行動への影響 81
第３節　大学生活の規定要因 85
1　大学・専攻志望理由における家庭背景の影響 85
2　大学生の学習生活の規定要因 87
3　正課外の大学生活の規定要因 90
第４節　まとめと考察 92

第６章　地方大学における職業生涯教育 95

第１節　職業生涯教育の導入 96
１　急速な拡大 96
２　統制される職業生涯教育と就職意識 97
第２節　大学による職業生涯教育の実態 98
１　データの概要 98
２　データの分析 99
第３節　職業生涯教育に対する評価と課題 106
１　職業生涯教育の導入と実施に対する評価 106
２　職業生涯教育の実施に対する就職指導係の評価 110
３　職業生涯教育の実施に対する大学生の評価 112
第４節　まとめと考察 116
＜注＞ 118

終章　地方大学における就職意識のゆくえ 119

第１節　結果の要約 119
第２節　考察と課題 123

引用参考文献 126

調査票　「大学生の就職意識に関する調査」 133

序章　研究の目的

第１節　問題の所在

本研究の目的は中国の地方都市における大学生の就職意識の諸相を明らかにし、就職意識がいかに形成され、またいかに大学生活に影響を与えているのかを検討することである。

現在、中国では大学生の就職意識が社会の注目を集め、大きな研究課題として取り上げられている。その多くは大学生の就職意識の問題性を批判し、意識の「転換」を呼びかけるものである。

中国で大学生の就職意識が問題とされているのは、その就職問題との関連からであった。近年の中国における大学生の就職状況の厳しさは、「卒業イコール失業」といったキャンパス内で交わされるジョークに鮮明に表われている。中国政府（教育部）のデータによると、1994 年から 2004 年までの約 10 年間に行われた教育の大衆化の推進により、全国の大学卒業生（本研究では「大卒者」と略称する）が 4 倍に増加するという成果をあげているが、その一方で、就職率は 23.1％も低下したことが示されている [1]。そのような厳しい就職状況は 2012 年にも続いており、毎年 100 万人の大卒失業者が記録されている。

大学生の就職難問題をもたらした要因は、高等教育の急速な大衆化や、産業構造の未成熟などと多岐にわたるが、その中でも大学生自身の問題の影響が大きいと指摘されている。多くの研究で大学生の就職意識の問題がその就職の範囲を大きく制限し、就職地獄を作り上げた 1 つの原因とされている [2]。

大学生の就職意識の問題として、おもにその「高望み」で「現実離れ」な就職ビジョンが指摘されている。大卒者の就職難問題が深刻化する中、「待遇の良い」都市部または国有セクターにこだわり、内陸や農村地域、中小民営企業に就職したがらない大学生が依然として数多く存在していることが指摘されている（張・劉　2006，登坂　2007，趙　2010 など）。そのような「エリート的」就職意識は「高望み」や「現実離れ」と批判され、就職難を生み出す要因とされてきた（張・劉　2006，趙　2010 など）。

以上の研究結果により、政府やマスコミは大学生の就職意識を社会問題の一つとして頻繁にとりあげるようになった。また、それを大学生の大学における「無気力」「無動力」な行動に繋がる原因として語り（朱・黄　2006 など）、大学生に対するバッシングを構成する重要な一因となった。それを背景に、大学における職業生涯教育（日本でいうキャリア教育）が導入され、大学生の就職意識を「修正」する必要があると主張された（楼・趙　2002，冯・張・葛　2010 など）。

しかし、中国の就職意識研究の主流をなすこれらの先行研究は大学生の就職意識の「不適切さ」を一方的に非難しているに過ぎない。加えて、その「不適切さ」

が実際に就職結果に対してマイナスの影響を及ぼしているという実証的な資料を挙げているわけでもない。つまり、社会構造や経済問題という側面を有する大学生の就職難（李　2011 など）を、大学生自身の問題として一方的に語り、構築しているのである。就職意識を問題とするのであれば、むしろなぜそうした就職意識が形成されるのか、あるいは就職意識が大学生の学習行動や学習意識、あるいは実際の就職行動といかに関連しているのかが検討されなければならない。

以上を踏まえて、本研究は、中国の地方都市における大学生の就職意識の諸相を明らかにし、就職意識がいかに形成され、またいかに大学生活に影響を与えているのかを検討することを目的とする。大学生像を検証することによって、大学における就職指導および大学生研究に新たな示唆を与えたい。

なお、従来の先行研究は、就職に対する希望に焦点を当て、大学生の就職意識を限定的にとらえ、その正否を評価してきた。それに対して、本研究では就職意識を就職に対する希望や考え方、また自らを取り巻く就職状況に対する認識などと、広義にとらえることで、多面的に検証したい。

第２節　先行研究の検討

１　大卒の就職に関する先行研究

就職意識の分析を行う前に、中国における大卒者の就職問題を扱った先行研究を概観し、その課題を明確にしておこう。

これまでの大卒者の就職に関する研究には、マクロな視点で社会体制などの就職を取り巻く環境に着目したものがある。その代表的な研究が李(2011)であろう。李は中国の高等教育大衆化を背景とした大卒者の就職活動に対する分析を通して、中国における大卒者の就職難は次の３つの原因によることを指摘した。すなわち、高等教育の急速な拡大、高等教育のアウトプットと労働市場の需給とのギャップ、および労働市場の分断化である。

そのうち、高等教育と労働市場の需給のギャップについて、おもには中国の大学における専門教育の硬直化（蘇　2000，王　2004 など）、および大学教育システムによる専門性の偏重、また社会体験などを通じた十分な教養教育の欠如が指摘されている（李　a2008，劉・劉　2009）。麦克思研究院(2009)は、アンケート調査の結果から、大学による就職支援の不備も大学生の就職難を深刻化させた要因だと指摘している。

しかし、これらの論文の多くは十分な実証的データを挙げて検討しておらず、理念的な議論や、単純集計に終始している。また、李（2011）は高等教育システムの構造と大卒者労働市場の構造から大卒者の就職難問題を引き起こした原因を実証的に検討したが、それが大学生の就職にいかに影響を与えているのかについ

ての検証までには至っていない。そのため、大学が抱えるこれらの諸問題が大学生の就職に与える影響を実証的に説明したとは言えない。したがって、そこで指摘されている諸問題について、大学生の就職意識、および大学生活との関連を通して検証する必要があろう。

こうしたマクロな視点による分析が蓄積されてきた一方で、ミクロな視点による分析、すなわち大学生に着目した就職問題の検討も行われている。

馬（1998）は中国の大卒者の就職過程を検討し、大学生にとって専攻や戸籍、地域格差が就職に重要であることを指摘した。馬は質問紙調査を通して、大学生が入学時の専攻選択などにおいてすでに就職を考慮していること、また戸籍と専攻が就職に影響を与えていると感じていることを明らかにした。そのような結果を踏まえて、馬は中国の現状に合わせた大卒者の就職問題の検討の重要性を指摘した。

大卒者の就職に対する「家庭背景」の影響が見られる一方、就職の結果は大学ランクや成績などという大学生の「業績要因」に影響されていることは岳・文・丁（2004）などの研究により指摘されている。岳らは北京大学が実施した大卒者就職調査をもとに分析を行った。その結果、大学生の就職成否および初任給に対する父親の職業と出身地域という家庭背景による有意な影響が見られておらず、それに対して、大学ランクや成績による影響が大きいことが明らかになった。しかし、大学生の家庭背景として父親の職業と出身地域のみを扱うことに限界があると考えられる。馬（1995）に指摘された戸籍など、家庭背景の影響の検討は中国の現状を考慮したうえで行われなければならない。

また、業績要因が大学生の就職結果に与える影響は、李（2011）による上海の大卒者を対象とした研究でも指摘されている。李の分析結果では、大卒者の就職の結果には階層間格差や出身地域からの影響、とくに職業という政治資本の影響が確認された。同時に、奨学金の獲得などの業績要因がより大きな影響を与えていることも示された。李の研究は、中国における大学生の就職市場を捉えるのに大きな意味があり、特に階層間、地域間の格差が大卒者の就職に与える影響に関する分析は、非常に先駆的であると言えよう。しかし、就職意識に関する調査は中国屈指の大都市である上海の大学に限定されており、地域間格差の激しい中国の事情を説明するには限界がある。

就職難の要因として、大学生の就職意識の問題が大きく取り上げられているにもかかわらず、その就職の結果に与える影響を実証的データによって検討したものはそれほど多くない。だが、その一つとして陳・胡（2007）の研究がある。陳らの分析の結果は、大学生の就職意識の問題に対する従来の指摘を支持するものであった。つまり、職業の社会的地位や安定性などを重視することは、内定の獲得に負の影響を与えることが主張されている。しかし、この分析は個人の属性な

どを無視し、就職結果の規定要因の検証に就職意識だけを取り扱っていることに限界があろう。そのため、大卒者の就職難は大学生の就職意識に原因があるとは必ずしも言えない。

以上の先行研究の検討を踏まえて、中国における大学生の就職を取り扱った研究に残された課題を整理しておこう。まず、大学生の就職に対する大学教育の機能を検討しなければならない。先行研究では、大卒者の就職難の要因として、大学教育システムの硬直化や、労働市場の需要とのギャップが指摘されている。その一方で､大学教育が大学生の就職に与える影響は十分に明らかにされていない。大学教育が大学生の就職においてどのような役割を果たしているのかを検討する必要がある。

次に、大学生の就職における家庭背景と業績要因との関連を捉えなおす必要がある。先行研究では、大学生の就職を検討する際の重要なファクターとして、家庭背景が取り上げられてきたものの、業績要因が就職の結果に与える影響が強調されてきた。つまり、家庭背景の影響が確認された上で、大学生の能力、あるいは大学における努力がその就職の結果につながっていると考えられている。しかし、大学生の主体性を強調する先行研究は、業績要因と家庭背景を対立的なものとみなし、両者の関連を考慮していない点に限界がある。大学生の就職における業績要因と家庭背景との相互作用を検討するために、大学生の視点からその就職を捉える必要がある。それは大学生の就職に果たす大学教育の役割の検討にとっても意義があろう。

以上の２つの課題について、本研究は大学生の就職意識に焦点をあて、大学生の就職、および就職と大学との関連を大学生の視点から捉えなおす。

２　就職意識に関する先行研究

次に、大きな問題とされてきた大学生の就職意識に関する先行研究を検討しておこう。

先にも指摘したように、中国における大学生の就職意識は、大卒者の就職難をもたらす要因の１つとして政府や世論によって頻繁に取り上げられてきた。そのため、就職意識に関する研究は数多く行われてきた。その多くは大学生の就職意識を「高望み」や「現実離れ」だと批判し、問題視している。また、大学生の就職意識を社会構造と関連づけて論じる研究はわずかであり、その実態と構造について、実証的な資料による検討が十分になされているとは言えない（王　2005，李　2011 など）。

大学生の就職意識の規定要因を実証的に分析した数少ない先行研究として、王（2005）と李（2011）があげられよう。王（2005）は中国のエリート大学を対象に、大学生の学業継続志向や職業選択、職業的地位達成志向などを進路志向とし

てとらえ、その規定要因について分析を行った。その結果、大学ランクや学年、家庭背景により学業継続志向が左右されていることが明らかにされた。親の職業が専門・管理職である、また親の教育年数が長い大学生は高い学業継続志向を示している。その一方、専門・管理職志向に対しては専攻などの影響が見られたが、家庭背景の影響は見られなかった。このように、王の研究結果により、家庭背景は大学生の学業継続志向に影響を与えているが、その就職に関する希望には影響が見られなかったことが明らかにされた。王の研究は中国の大学生の進路志向の規定要因、とくに家庭背景の影響を考察したことで先駆的であり、かつ重要であろう。しかし、学業継続志向として国内進学志向と膨大な資金を要する海外留学志向を混同して分析したことで、家庭背景の影響が必ずしも正確にとらえられていないことに限界があろう。また、トップ 100 位以内のエリート大学を対象としたのもこの調査の限界だといえよう。

一方で、李（2011）は、上海の大学生を事例にその進路選択の規定要因について、とくに進路選択における階層差に焦点を当てて検討を行った。その結果、出身地域や親の階層、また奨学金の取得やアルバイト経験の有無などという業績要因は、大学生の進学志向、および職業意識に影響を与えていることが明らかにされた。そのうち、業績要因の効果と比べ、親の階層の影響は限定的なものにすぎなかった。高い英語能力や奨学金の獲得などが大学生の「地位・収入志向」に正の影響を与えている。また、アルバイト経験は「安楽志向」「都市生活志向」に負の影響を与えている。さらに、大学ランクの高い学生は「地位・収入志向」や「安楽志向」また「都市生活志向」が高い。つまり、大学生の大学ランク、および大学での業績はその職業意識に大きな影響を与えている。それに対して、親の階層の影響としては、父親の職業が「地位・収入志向」に負の影響を及ぼしていることのみが確認された。

李（2011）の研究は、王（2005）の大学生の進路志向に研究にみられた国内進学志向と留学志向を一本化した問題をクリアし、また、大学ランクを考慮したうえで大学生活と就職意識との関連を取り扱った点に、大きな意義がある。さらに、上海に限定した研究結果という限界はあるものの、大都市における地方出身者が「コネ」などに制限され、大学院進学を通して「より多くの就職資本を獲得しようという思惑」（p.267）を持つという仮説を提示した点も重要である。

これらの先行研究は、大学生の進路志向や就職選択という就職意識の一部を取り上げ、その規定要因、とくに家庭背景の影響について検討した。また、家庭背景の影響が確認された一方、就職意識の規定要因として大学での成績や能力の影響が強調された。

先行研究の結果に基づき、大学生の就職意識についての研究に残された課題を整理しておこう。

まず、王（2005）と李（2011）の研究はランキングで100位以内のエリート大学や上海という全国屈指の大都市を研究対象としていることに限界があろう。実際には、大都市の地方出身の大学生と地方の大学生の就職意識が大きく異なっていることが、いくつかの調査から示唆されている。たとえば、李（2011）は、上海における地方出身者の「大都市志向」は強く、学歴を大都市進出の手段として利用していることを指摘している。それに対して、劉（2011）は地方大学の学生の就職意識について、地元志向が高いことを指摘している。したがって、大学生の就職意識を取り上げる際には、地方の大学生にも着目する必要がある。そのことによって、これまで大都市の実態から語られ、構築されてきた学生像を修正し、多様な大学・学生像に配慮した大学教育の機能や学生支援に新たな示唆が得られよう。

次に、大学生の就職意識に対する家庭背景の影響を検討する際には、中国の現状を考慮したうえで家庭背景を捉えることが重要である。大学生の進路意識や職業意識の規定要因として、大学生の家庭背景の検討が多くなされてきた。それは、家庭背景が大学生の就職に与える影響は、その就職意識に反映されているからである。したがって、大学生の就職意識を検討する際に、家庭背景の影響は重要な視点を提示すると考えられる。しかし、従来の先行研究において、大学生の就職に対するする家庭背景の影響は限定的なものでしかなかった。大学生の就職に関する先行研究（岳・文・丁　2004，李　2011）でも指摘されているように、これらの研究は大学生の家庭背景に対する捉え方に限界がある。それについて、馬（1998）は中国特有の戸籍制度による影響を強調している。また、李（2011）は仮説として、大都市の戸籍を持たない地方出身者の就職が「コネ」に制限されていると提示している。戸籍や「コネ」などという中国独特な社会背景を考慮したうえで、家庭背景の影響を検討する必要がある。

日本においても同様に、近年は大学生あるいは若者の就職意識が問題としてとりあげられている。その一つは中国と同様に職業移行研究の文脈で就職意識を取り扱うものである（日本労働研究機構　2003）。これらの研究は若者の社会への移行に焦点を当て、若者の就職意識を考察するものである。しかし、近年、若者の就職研究の関心は意識研究から若者就職を取り巻く社会構造に移った（小杉2002，日本労働研究機構　2003，本田　2005など）。

また、同様の関心から大学生のキャリア教育にも関心が向けられ、そこでは就職意識の重要さが指摘されている（谷内　2005，日本キャリア教育学会　2008など）。しかし、中国の就職意識研究と同様に、こうした社会的問題を大学生や若者の問題へと還元しようとしているところに問題があろう。こうした研究は多くの場合、就職という側面から「正しい就職意識」を大学生や若者に形成させようとすることになる。したがって、大学生がそうした就職意識を持つ背景や、その実

際の影響についてはあまり関心が持たれてこなかった。

就職意識の規定要因を無視したまま､そのサポートまたは修正を強調する点で、日本と中国は共通の問題を抱えているといえよう。したがって、大学生の就職意識の構造や規定要因、およびその大学生活との関連を検討することは、中国のみではなく、日本の就職指導を考え直す契機にもなろう。

３　大卒者の就職と大学教育との関連に関する先行研究

上述した先行研究の結果から、大学生の大学での業績がその就職の結果、また就職意識に大きな影響を与えていることが指摘されてきた。その一方で、中国における大学教育の硬直化などシステム上の問題により生じた、大学教育と労働市場の需給とのギャップが指摘されている。本節では、大卒者の就職と大学教育との関連がどのようにとらえられてきたのかについて、先行研究の検討によって明らかにする。

大卒者の就職と大学教育のギャップが研究者に取り上げられたのは、大卒者の就職難に伴って「学習無用論」が提出されたことを背景としている。1994 年から 2004 年までの 10 年間に行われた大衆化教育の推進は、中国全国の大卒者を 4 倍に増加させた。その一方で、大卒者の就職率は 23.1%も低下したことが指摘されている。深刻化しつつある大卒者の就職難問題は、それまで支配的であった“大学に入学さえすれば卒業後の職業が保証される”という幻想を破ることになった。それを反映し､「大学で勉強しても就職できない」という「学習無用論」が世論として広がり、大学への進学志望率の低下をもたらしたとされる（胡・黄　2010 など)。それは中国の学歴社会の根幹を揺るがすほどのものではなかったが､大学での学習の就職への効用は疑われるようになった。さらに、大衆化により大学のレジャーランド化が進むことで、大学生の質の低下が批判されるとともに、大学教育と職業との接続の問題が一層重視されるようにもなった。このことは、その反面で大学生の中で大学と大学での学習を就職に直接結びつける功利的な考え方を助長することになった。すなわち、中国の大学生は就職のために一層義務的に勉強に取り組むようになったと考えられる。

それでは、実際に中国の大学生はどのように大学での学習をとらえ、それはかれらの就職、とりわけ就職意識とどのような関係を持っているのだろうか。こうした疑問に答えることは本研究の課題の 1 つである。

このような関心に基づく研究はこれまで日本で数多くなされてきた（例えば西本　2008，山田　2010)。しかし中国においては、いまだ十分に実証的な研究が行われていないのが実態である。中国では、大学生の就職意識との関連が指摘されておりながらも、大学教育と大学生の就職に関する研究は、専門教育の硬直化など、大学システムによる大卒者の就職難の深刻化というマクロな視点に留まって

いるものが多い（蘇　2000，王　2004 など）。

ミクロな視点で大学生活と就職を取り扱った数少ない先行研究の中に、李（2008 a）がある。李は大学生の社会活動の欠如とサークル運営の非正規性について指摘し、大学生が就職の際の履歴書を書くために社会活動、とりわけサークル活動に取り組むことを量的調査によって明らかにした。つまり、大学生活に対する中国の大学生の取り組みは、就職との関連から捉えることができる。この研究は大学生の大学生活への取り組みと就職との関連性を考えるには大きな意味があると言えよう。サークル活動だけでなく、大学生活の主軸をなす学習生活などと就職意識の関連も検討されなければならない。

しかし、上述したような大学生活への取り組みに対する就職の影響は、従来指摘されてきた就職意識の問題を大学における大学生の「無気力」問題へと拡張させる口実となった。就職意識の問題の影響として、大学生活への取り組みの「無気力」が指摘されている（朱・黄　2006）。それは就職指導として職業生涯教育が導入された大きな要因となっている。就職指導を通して「高望み」で「不適切」な就職意識（張・劉　2006，趙　2010 など）を修正し、しっかりしたキャリア・ビジョンを持って進路選択または学習に取り組むことが求められている（冯・張・葛　2010 など）。しかし、前述したように、実証的データによる大学生の就職意識の検証が十分に行われていない。さらに、大学生の学習に対する就職意識の影響も十分に実証されたわけではない。大学生の就職意識と大学での学習をはじめとするキャンパスライフとの関連を検討したうえで、大学による就職指導である職業生涯教育の現状と課題を考察する必要がある。

以上の先行研究の検討からわかるように、実証的な検討がなされないまま、大学生の就職意識は一方的に捉えられ、就職指導が行われてきた。したがって、中国の地方都市における大学生の就職意識の実態と構造を明らかにし、それと大学生活との関連を検討するには、さらに大学による職業生涯教育の現状と課題を考察することが求められよう。それによって、中国の大学生像を再検討し、大学における就職指導を考察することも本研究の重要な課題となろう。

第３節　本研究の課題

以上を踏まえて、本研究では中国の地方都市における大学生を対象とし、かれらの就職意識を明らかにするとともに、その規定要因、および大学生活との関連を検討する。本研究の課題としては次の３点があげられよう。

第１に、中国の地方における大学生の就職意識の実態、および構造について検証する。大学生の職業や進路の希望、および就職事情に対する認識などに焦点を当て、質問紙調査を通してその実態と構造を明らかにする。

第２に、中国の地方における大学生の就職意識と大学生活との関連ついて検討

する。すなわち、上と同様の質問紙調査に基づいて、大学生活の規定要因を明らかにし、就職意識の大学生活への影響について検討する。

第３に、中国でのキャリア教育とも言える「職業生涯教育」の実態を明らかにし､大学生の就職意識との関連を質問紙調査とインタビュー調査によって検討し、その課題を提示する。

以下、各章の概要について示しておこう。

第１章では、中国の大学生の就職事情を歴史的視点から整理し、現在の就職意識の問題が提出された経緯およびその現状と課題を考察する。具体的には、かつての「統一分配制度」から「自由就職制度」への推移をみることで、大学生の就職について考察する。

職業の「統一分配制度」の段階（1949 年～1980 年代）では、大卒者は国全体の計画に基づいて統一配置されていた。その中、大卒者は全員、幹部として国有機関への配置が保障されていた（文化大革命時期を除く)。「大学生イコール国家幹部」という考え方は、当時の背景によって生まれたものだと考えられる。また、社会的上昇移動だけでなく､「地域間の自由流動を厳格に制限する戸籍制度が存在する」（李　2011）中、若者が大学進学を通して地域間の移動、とりわけ大都市への移動を図っていた。一方、大学の専攻設置が極めて細分化したものであるため（李　2011)、大学生活は専門的教育を通して、直接職業と結びついていた。そのような背景において、大学生の就職意識の問題はほとんど取り上げられることがなかった。

計画経済時代から市場経済時代へと転換する 80 年代を経て、従来の「統一分配制度」が「自由就職制度」へと変わり始める。「自由就職制度」が「競争的就職制度」だと呼ばれるように、大学生は就職とともに「幹部」の身分を与えられるわけではなくなり、市場競争の中に投げ込まれるようになった。しかし、大学による就職指導が「初期段階」にとどまり､「高等教育システムが旧計画体制から完全に脱却していない一方で、大卒者の就職市場メカニズムに任せる」（馬　1998, p.136）状態であった。

こうして「幹部」の予備軍でなくなった大卒者が、しかし、依然として大都市、国有セクターでの就職を志望して、地方や中小民営企業での就職をしたがらないことは、就職意識の問題として指摘されるようになった（張・劉　2006 など)。それは大卒者の就職難をもたらす一要因として認識されている。また、就職意識は大学生の学習などへの積極性にも影響するとされている。「職業生涯教育」（Career Education）はその対処として提唱されるようになった（冯・張・葛　2010 など)。以上のように、第１章では本研究を取り巻く大学生の就職環境、就職意識の問題の現状を明らかにする。

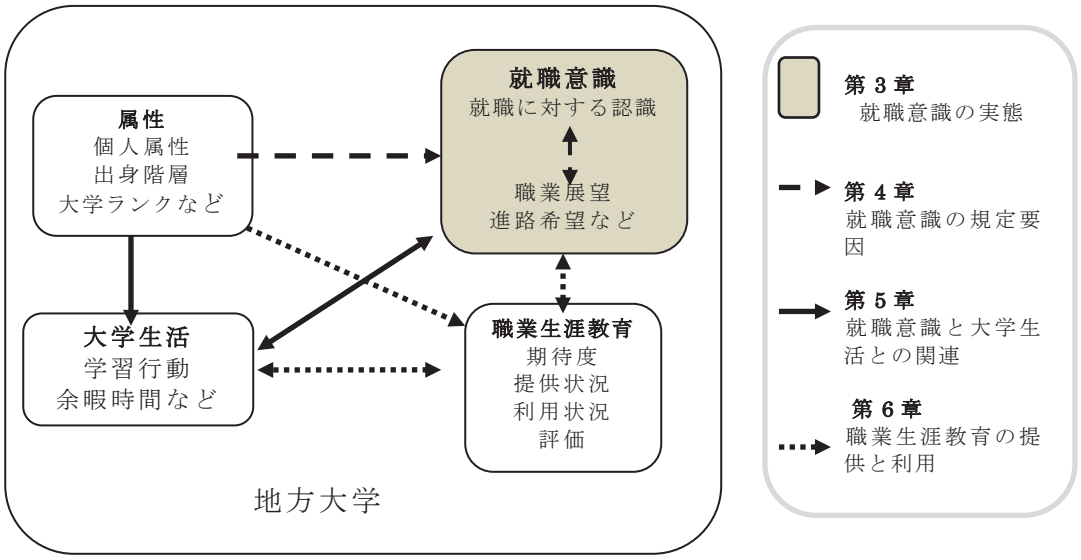
第２章では地方都市における大学生の就職意識を研究する意義と課題を提示し

た上で、本研究の調査地・山東省の大学生を取り巻く就職環境を、山東省の産業構造や高等教育の特徴を踏まえて検討する。

大学生の就職意識の問題が社会問題として大きく取り上げられる一方で、地方の大学生を対象とする調査研究はごくわずかにすぎない。にもかかわらず、大学生の就職意識が問題視される中で、地方の大学生、とくに地方出身の大学生の就職意識が批判の矛先とされている。地方出身、とりわけ農村戸籍を持つ大学生が社会的上昇移動を大学進学に期待し、それに見合う就職、つまり都会での就職を切望することは、いくつかの研究で指摘されている（廉　2009, 李　2011 など）。しかし、それらの研究には、大都市の大学に進学した地方出身の大学生を取り上げるものが多い。一方で、地方大学の大学生は大都市志向よりも、地元志向が強く、そのことが問題だと劉（2011）は指摘している。地方の問題を取り扱う場合、その地域移動の経験を配慮する必要がある。

次に、本研究で取り上げる調査地の山東省における大学生の就職事情について概観する。山東省は全国 2 位の人口を持ち、労働力を全国各地に送り出す「地方」である。また、多元的な産業構造を有しながらも、高学歴者の受け皿は十分にあるわけではない。そのうえ、振り分けられた大学進学の機会が少なく、大学生は厳しい進学競争と就職競争に直面している。

図　序－１　本研究の分析枠組み



以上の第１章、第２章を受け、第３章以降では、先に示した３つの研究課題に対して分析を行う。本研究の分析枠組みは図序－１に示すように、4 段階となる。

第３章では、本研究の調査概要を提示し、大学生の就職意識について概観する。それによって、これまで政府や世論、または先行研究で指摘されてきた大学生の「就職意識の問題」を再考する視点を提示する。

第４章では、地方大学生の就職意識の規定要因に関して考察を行う。従来の大学生就職意識をめぐる研究の主流は、かれらの「大手志向」など就職意識の問題性を批判することにとどまり、それが形成されるメカニズムに対する検証がされないままであった。本章では大学生の就職意識がいかに形成されているのか、その規定要因を明らかにし、就職意識の構造を検討する。

つづく第５章では、上述した大学生の就職意識が大学生活とどのような関連を持っているかについて分析を行う。とくに、大学生の進路決定が学習行動や学習意欲にどのように影響を与えているのかを検討する。それによって、大学生の学習に対する「就職意識の問題」の影響を考察する。

大学生の就職意識には大学のフォーマルな組織、とくに大学による就職指導が影響を与えていると考えられる（谷内　2006）。また、職業生涯教育は就職意識だけではなく、大学生活への取り組みに対する指導も担うため（高・孫　2006，孫 2008 など）、大学生の就職意識とその大学生活の両者をつなぎ合わせるものとも言える。

そこで、第６章では職業生涯教育の実態と大学生の就職意識や、大学生活との関連を検討し、大学における就職支援の課題を提示する。

終章では、以上の議論を総括し、中国の地方における大学生の就職意識をめぐる問題を考察する。加えて、これまで大都市の実態から語られ、構築されてきた学生像を修正し、多様な大学・学生像に配慮した大学教育の機能や学生支援に新たな示唆を与えたい。

＜注＞

1. 「历年高校毕业生就业率统计与中国人口金字塔图」2009 年 12 月 21 日 http://ha.studentboss.com/html/news/2009-12-21/44894.htm（2010 年 9 月アクセス）
2. 2 月 26 日、中国人民大学学長紀宝成がインタビューを受けた時の話による。中国新聞網を参照。（2013 年 9 月 16 日アクセス）
3. 国務院が 2000 年に発表された「国務院が 2000 年普通大学卒業生就職に関する通知」による

第１章　大学生の就職と就職意識の問題

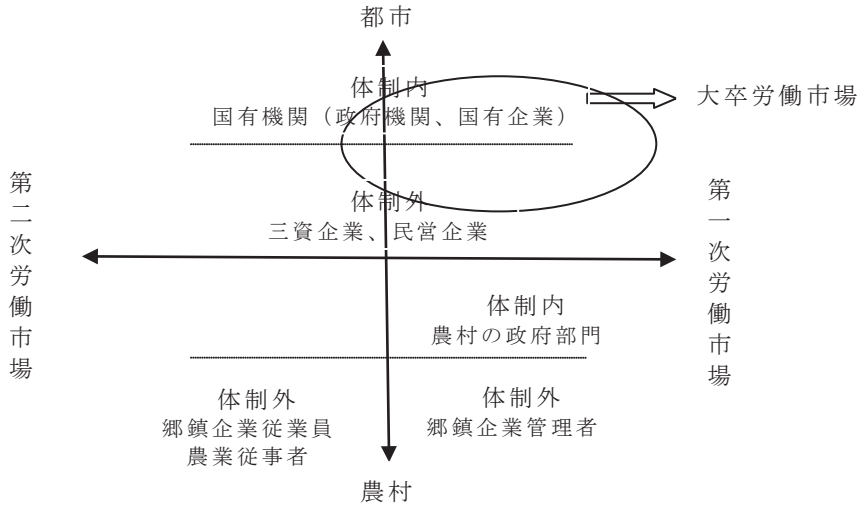
第１節　大卒者労働市場

本章では、中国の大学生の就職事情を歴史的視点から整理し、現在の就職意識の問題が提出される経緯を考察したい。大学生の就職事情を検討する前に、まず、中国の大卒者を取り巻く労働市場の構造について説明しよう。

中国における労働市場の分断化は多く指摘され、その様相はさまざまな形で説明されている。第一次労働市場・第二次労働市場（Piore　1975）、フォーマルセクター・インフォーマルセクター（厳　2000）、内部労働市場・外部労働市場（李 1997）のほかに、戸籍制度による都市部と農村部の分断（丸川　2002）、「体制内」と「体制外」という企業の所有制度による分断（頼　1996）など制度的原因による分断が指摘されている（李　2011）。中国における労働市場の構造について、李（2011）は図１－１のように示している。

第一次労働市場では、労働者は待遇の良い仕事を得られる一方、高度の学歴と資格が要求される。図１－１からわかるように、都市部における第一次労働市場は大卒労働市場の根幹をなしている。

図１－１　中国の労働市場の構造



注：李（2011，p.69）より転載。

また、中国の労働市場の分断をもたらす大きな要因として、「体制内」と「体制外」に区別したシステムがある。「体制内」労働市場は政府主導の労働市場、つまり国有セクターにおける正規雇用を中心とする労働市場である。「体制内」に所属することで、国による手厚い福利厚生のほか、職権つまり政治的権力を得られる（李　2011）。したがって、よい待遇だけでなく、高い社会地位と権力を獲得できる機会として、「体制内」労働市場に参入することは人気が高い。

加えて、分断化した市場間の移動には、高いコストが伴う（馬　1998, 李　2011）。このような市場構造を背景として大学生が初職に高い期待を持つのだと考えられる。つまり、市場間の移動が阻害されるなか、労働者はできる限り有利な、または自由度の高い労働市場への参入を図る。大学生の就職意識を考察する際に、こうした社会構造との関連が重要な視点となろう。

以上の検討からわかるように、中国社会において同じ職種でも所属する労働市場によって得られる待遇や権力が大きく異なることがわかる。このような労働市場の分断化が大学生の就職格差を作り出し、その就職意識を左右していると考えられる。

第２節　大学生の就職事情

１　職業の「統一分配制度」の段階

本節では、大学生の就職事情を「統一分配制度」と「自由就職制度」の２つの段階を軸に示しておきたい。

中華人民共和国が成立した 1949 年から 1984 年の間、中国における社会・経済活動はすべて政府によって統括される「計画経済時代」であった。それを背景として、大卒者は、「統一分配制度」によって個人や企業の意思と関係なく計画的に各職場へ配置されていた。

その間、大卒者は全員、幹部として国有機関への配置が保障されていた（文化大革命時期を除く）。「大学生イコール国家幹部」という考え方は、当時の背景によって生まれたものだと考えられる。また、社会的上昇移動だけでなく、「地域間の自由流動を厳格に制限する戸籍制度が存在する」（李　2011）中、若者が大学進学を通して地域間の移動、とりわけ大都市への移動を図っていた。一方、大学の専攻設置が極めて細分化していたため（李　2011）、大学生活は専門的教育を通して、直接職業と結びついていた。そのような背景があったため、大学生の就職意識の問題は当時ほとんど取り上げられることがなかった。また、大卒者の就職に対する大学の関与はおもに政府の仲介役として、大学生の分配手続きを行うことであった。それゆえ、大学による就職指導などはほとんど見られなかった。そのような状況は、完全に「自由就職制度」への転換を遂げた 1990 年代まで続いた。

２　「自由就職制度」の段階

計画経済時代から市場経済時代へと転換する 80 年代を経て、従来の「統一分配制度」は「自由就職制度」へと変わりはじめた。「自由就職制度」が「競争的就職制度」だと呼ばれるように、大学生は就職とともに与えられる「幹部」の身分が廃止となり、市場競争の中に投げ込まれた。それを受け、大学による就職指導が

要請されるようになった。本研究が扱う「職業生涯教育」（Career Education）が取り入れられたのは、その時期であった。

「自由就職制度」に切り替わったにもかかわらず、細分化した専門教育は依然として大学教育の中軸でありつづけた。そのため、大学生の就職は、大学での専攻と強く結びつけられていたと指摘される（池本　2007）。しかし、一方で、大学生は専攻以外に資格の取得や社会活動などに取り組むようになり、大学教育と就職との関連は市場経済システムが浸透するにつれて弱体化する傾向にあった。このように、大学による教育または就職指導は専門性重視の「初期段階」にとどまり、「（高等教育システムが）旧計画体制から完全に脱却していない一方で、大卒者の就職市場メカニズムに任せ」たと指摘される（馬　1998，p.136）。

表１－１は、中国における大学生の就職スケジュールと大学内の各部門のかかわりを示したものである。中国の大学生は９月入学のため、ここで示されたのは大学４年生の１年間のスケジュールである。ここで、おもに大学生の就職における大学のかかわりを示す。

表１－１　中国における大学生の就職スケジュールと各部門のかかわり

<table>
<tr><th>プロセス</th><th></th><th>時期</th><th>教育部門・計画部門・人事部門</th><th>大学</th><th>大卒者</th><th>求人企業</th><th>人材交流センター</th></tr>
<tr><td>①就職指導と大卒者の総合評価
②就職情報の収集と提供</td><td rowspan="3">卒業前年度</td><td>9月～10月</td><td></td><td>・ガイダンス
・進路希望調査
・企業求人情報の収集
・大卒者就職推薦表の作成</td><td>・就職情報の収集
・履歴書の作成と送付
・就職ガイダンスの参加</td><td>・求人情報を人材市場、求人誌、大学または就職ネットワークに掲載</td><td>・求人情報の掲載と斡旋</td></tr>
<tr><td rowspan="2">③企業説明会の開催と参加</td><td colspan="7">11月20日～　解禁日　　各大学・各地方が企業説明会の開催</td></tr>
<tr><td>11月～12月</td><td>・次年度就職重点保証名簿の作成と通達
・次年度全国大卒者状況の統計・とりまとめ</td><td>・企業説明会の主催
・卒業生就職協議書の発行と認証の開始</td><td rowspan="2">・就職活動の開始
・仮内定を獲得した上で，内定先でインターンシップ
・インターンシップを踏まえて入職決定</td><td rowspan="2">・採用試験の実施
・合格者を実習生として受け入れる
・インターンシップを通して合意達成</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>④就職計画の策定</td><td rowspan="4">卒業年度</td><td>1月～5月</td><td>・「当年度全国普通高等教育機関卒業生就職工作の実施に関する通知」の公布</td><td>・当年度の大卒者就職計画を教育に提出</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">⑤卒業生の資格審査・派遣調整と受け入れ</td><td>6月～8月</td><td></td><td rowspan="3">・卒業式
・就職派遣の実施（派遣証の発行、戸籍・档案の転出）
・当年度大卒者派遣変更計画を教育部に提出</td><td rowspan="3">・赴任手続きの開始（戸籍・档案の転入）</td><td rowspan="3">・大卒者の受け入れ
・公有制企業に内定した大卒者の戸籍・档案の転入</td><td rowspan="3">・非公有制企業に内定した大卒者の戸籍・档案の転入</td></tr>
<tr><td>9月</td><td></td></tr>
<tr><td>10月</td><td></td></tr>
</table>

注：李（2011，p.114）を参考。

表からわかるように、大学生の就職に対するキャリアサポートより、大学による就職支援の主体をなしているのは、大卒者の卒業と就職に伴う異動手続きなど

という統括的な作業である。４年次の初頭から大学が就職ガイダンスや進路希望調査、求人情報の収集、また、11 月の解禁日を境にキャンパス内の企業説明会の開催などに取り組む。また、戸籍制度など中国の行政管理システムの中で、大学生の進路先を把握し、戸籍の転出など手続きを行うことも大学の就職支援の一環となる。つまり、就職における中国の大学の役割は、大学生の就職を総括することである。

では、大学による就職支援は大卒者就職においてどのように機能しているのかについて、表１－２に示す。表１－２は中国における大学生が初職を獲得する際に用いた就職手段を、「211 大学」と「非 211 大学」別に示している。ここでいう「211 大学」とは 1995 年に発足した「211 プロジェクト」に指名され、資金面などにおいて重点的に援助する対象となった大学のことである。いわゆるランクの高い重点大学である。そこから、大卒者の就職に対して、大学が開催した企業説明会は大きな役割を果たしていることがわかる。

表１－２　大学生が初職を獲得する際に用いた手段

	211 大学	非 211 大学
大学が開催した企業説明会	39%	27%
テレビや雑誌による就職情報	8%	10%
就職サイトによる情報	13%	14%
知り合いからの就職情報	12%	19%
雇用側に直接アクセス	15%	17%
政府が開催した企業説明会	7%	10%
その他	6%	6%

注：麦克思研究院（2008）を参考に作成した。

表１－２からわかるように、大学生が初職を獲得するための重要な手段として、大学が開催した企業説明会が挙げられている。ウェブサイトを通した就職より、大学が仲介役として大学生の就職に大きな影響力を与えていると言えよう。

また、就職の仲介に対する大学の強い影響力は「非 211 大学」と「211 大学」の双方に見られるが、「非 211 大学」より、重点大学である「211 大学」のほうが就職の仲介にさらに強い影響を与えている。大学が開催した企業説明会を通して初職を獲得した大学生の割合は、「非 211 大学」は 27%に対して、「211 大学」は 39%であった。大学生の就職の仲介における「211 大学」の高い影響力は、そのブランド効果によるものだと考えられる。大学生の就職における大学ランクの強い影響がみられよう。また、国から手厚く援助されるため、これらの「211 大学」は知名度が高いほか、就職支援や教育設備も完備されている。とりわけ「211 大学」における就職支援は、大卒者の就職に大きな役割を果たすことも推測されよう。

先述したように、自由就職制度の浸透により、大学生の脱エリート化が進んだ。

高等教育の市場化によって、大卒者を国家幹部として優遇し、統一分配する就職システムが終焉を迎えた。

しかし、そのような大学生の脱エリート化に関わらず、大学進学は依然として社会における上昇移動の最も有効な手段として認識されている。大学進学に対する国民の高いアスピレーションに応じて、高等教育の募集定員の拡大が行われた。高等教育の大衆化は市場経済に突然放り込まれた中国の大卒者の就職を一層厳しいものにした。そのような大学生の就職状況の厳しさは、「卒業イコール失業」といったキャンパス内で交わされるジョークに鮮明に表われている。

中国における教育データ分析専門会社の中で最も専門性、客観性を持つと言われる麦克思研究院は、「2008 年、中国の大卒者の卒業半年後の就職率は 85.5%であり、2007 年よりさらに低下した」と公表している。この数字は、2008 年 4 月の時点で日本の大卒者の就職率である 96.9%に比べるとかなり低い。人口に換算すると、2008 年の大卒者のうち、卒業した半年後にいまだに就職できないのは 73.56 万人に至る。大卒者の就職にまつわる深刻な状況は、若者や親に不安を与える材料となっている。それだけでなく、就職できない大卒者のうち、22.4%は「啃老族（親喰い)」と称するいわゆるニートとなったことが明らかにされた。その数は大卒者総数の 3%を占める、約 15 万 8 千人に至った。2001 年～2012 年における全国の大学の卒業人数と就職率の変化は、表１－３のとおりである。

表１－３　2001年～2012年における全国大学卒業人数と就職率

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
卒業人数　（人）	114	145	212	280	338	413	495	532	611			680
失業人数　（人）	34	37	52	69	79	91	145	173	196			
一次就職率　（%）	80 超	80	75	73	72.6	77	70	68	68			
半年後就職率（%）							88.0	85.5	89.6	89.6	90.2	90.9

注：2007 以降、大学生が卒業して半年後の就職率を大卒者の就職状況の判断基準とする麦克思研究院社の調査結果が採用されるようになった。
「历年高校毕业生就业率统计与中国人口金字塔图」および麦克思研究院（2008～2013）を参考に作成した。

表１－３から、2001 年から 2009 年の間、大卒者の就職率は下がる一方であったことが明らかである。また、新卒採用にこだわらない中国の労働市場を考慮するうえで、大卒者の就職状況を把握するために、麦克思研究院は卒業時点の就職率つまり「一次就職率」ではなく、卒業半年後の就職率を基準とすべきだと主張した。新卒採用の日本と違い、中国では途中採用も珍しくないため、卒業後に就職活動を続ける大卒者は少なくない。しかし、2009 年から 2012 年の間に、大卒者の卒業半年後の就職率が上昇傾向にあるが、大学の募集定員が拡大し続けたため、失業者の数はそれほど下がらなかった。たとえば、2012 年に大卒者の卒業半年後の就職率は 90.9%だと高い割合を示しているが、その数は 68 万人であった。大卒者の就職難の深刻さがうかがえよう。

一方で、過熱した大学進学アスピレーションは大学入学後にも冷却することな

く、大学にふさわしいエリート的就職へと繋がる就職アスピレーションへと転換し、加熱され続けた（池本　2007）。とくに多くの農村出身の大学生が、厳格な戸籍制度に強いられた不利な就職環境から抜け出すために、大学進学に自らの社会的地位の上昇を期待する傾向が強かった（李　2011）。そのような過熱した就職アスピレーションが就職難をもたらす一因だと考えられ、大学生の就職意識の問題の提起につながった。

第３節　大学生の就職意識の問題

大学生の就職意識の問題に関する議論は非常に多い。それについて、徐・来島（2007）は「大卒者の就職難の解決には大学生の就業意識の変化が重要である、との見解がだんだんと主流になってきつつある」（p.80）と述べている。大学生の就職意識は社会問題の一つとして政府、あるいはマスコミによって大きくとりあげられている。

さらに、就職意識の問題は大学生の大学における「無気力」「無動力」な行動に繋がる原因として語られ、大学生に対するバッシングを構成する重要な要因となった。それを背景に、大学における職業生涯教育（日本でいうキャリア教育）が導入され、大学生の就職意識を「修正」するものとして位置づけられるようになった（冯・張・葛　2010 など）。

上述したように、大学生の就職意識は大卒者の就職難問題、また大学生像を解読する際の１つのキーワードとされ、さらに大学生の就職指導に強い影響を与えている。しかし、就職意識の問題にに関する解釈はさまざまであるにもかかわらず、その実態はほとんど検討されてこなかった。では、就職意識の問題はどのように語られ、また、政府はそれについてどのように対応してきたのか。本節では、大学生の就職意識に関わる先行研究および政策の検討により、その現状と課題を明らかにする。

１　就職意識の問題の提出

大学生の就職意識の問題が提出される背景として、高等教育の過剰論に対する中国政府および研究者の反論がある。

大卒者の就職難問題の深刻化に対して、それは高等教育の急速な拡大に原因があるという指摘の声があがった。それに対して、中国の研究者は「中国における高等教育の進学率は先進国と比べてまだ低い。中国社会の需給に応えるには、高学歴者はむしろ不足している」と指摘している（張・劉　2005，p.76）。つまり、中国の高学歴者は過剰ではなく、むしろ「不足」していると主張されてきた（張・劉　2005，朱・黄　2006 など）。

さらに、高学歴者の「不足」問題は、農村や地方都市で発生していると語られ

（朱・黄　2006 など)、高学歴労働者の配分の不均衡が問題とされるようになった。大都市では高学歴者が過剰なのに対して、農村や地方都市、または中小民営企業が「(高学歴者を）募集しても応募者が少ない」という人材不足の問題を抱えていると指摘された。このような考え方は多くの研究者から支持され、大卒者の就職難は高等教育の拡大によるものではなく、人材配分の不均衡による問題だと広く認識されるようになった。

大学生の就職意識の問題はこのような人材配分の不均衡問題を前提に提起されたのである。人的資源の配分不均衡問題をもたらす大きな要因として労働市場の分断化などが挙げられながら、「現段階で最も急務」（朱・黄　2006，p.12）として大学生の就職意識の問題が指摘されるようになった。つまり、農村や地方都市などでの就職を避け、大都市や高収入などを重視する大学生の就職意識が人的資源の配分不均衡を招き、さらに就職難問題をもたらしたと語られるようになった（張・劉　2006 など)。

上述したように、大学生の就職意識の問題への対応は大卒者の就職難問題を緩和する急務として政府や世論また研究者に大きく取り上げられ、大学生の就職意識研究は大学生の就職研究の主流となった（徐・来島　2007)。では、大学生の就職意識の問題はどのように語られているのだろうか。次節では、就職意識の問題の実態を明らかにする。

２　就職意識の問題の実態

大学生の就職意識について指摘された問題およびそれに対する政府または研究者による修正提案を、表１－４に示す。

表１－４　大学生の就職意識「問題」の内容と修正提案

	問題	詳細	修正提案
就職ビジョン	就職ビジョンが曖昧である	進路が決まらない、キャリアビジョンが欠如している	自己認識を深め、ブルーカラーからキャリアアップしていくように
	就職ビジョンが現実 or 社会・国の需給とギャップがある（エリート意識･「高望み」問題）	給料へのこだわり	給料重視から将来性重視へ
		大都市へのこだわり	大都市から中小都市へ 発達地域から需給の大きい地域へ
		福利厚生へのこだわり	
		安定性へのこだわり →終身雇用志向	仕事を選ぶより就職することを重視せよ（とりあえず就職し、後で転職する）
		専攻へのこだわり	専攻重視から専攻関連分野重視へ
		将来性へのこだわり （瞿・于・蔡　2004）	
アスピレーション（危機感のなさ）	就職活動に対して準備不足	消極的な学習態度	キャリア意識を高め、 競争意識、実力意識、リスク意識の養成
		自己アピール意識の欠如	
		自信がない→すぐ諦める	
	親や先生に依頼する	自主性の不足	就職より起業を
		コネに依頼する	

注：楊・郑（2003)、瞿・于・蔡（2004)，朱・黄（2006）などを参考にして作成した。

上述したように、大学生の就職意識の問題が指摘された背景に、高学歴労働者の配分不均衡が挙げられている。そのため、大学生の就職意識と労働市場の需給とのギャップは就職意識の問題のおもな内容として取り上げられている（楊・郑 2003）。

就職意識の問題を語る際に、最も指摘されてきたのは就職に対する大学生の高い期待、つまり「高望み」の問題である。それはおもに大都市や国有セクターでの就職、また高収入などへのこだわりである（楊・郑　2003, 朱・黄　2006 など）。そのほかに、職場の「将来性」（楊・郑　2003）や福利厚生、また終身雇用（朱・黄　2006）などを求めることも「高望み」だと問題視されている。

大学生の「高望み」の就職意識を生じさせたのは、高等教育のエリート段階からマス段階への移行に大学生が適応できていないためだと考えられている。朱・黄（2006）は、大学生が「エリートから一般の労働者になった」にも関わらず、「エリート意識」を捨てられないでいることを批判した。そのため、大学生の「高望み」問題は同時に「自己の過剰評価」として解釈され、曖昧なキャリアビジョンや自己認識の不足などに拡大していった。さらに、曖昧なキャリアビジョンが大学生の消極的な学習態度をもたらしたとされ、消極的な学習態度は大卒者の就職難をさらに不利にしたと考えられている（朱・黄　2006, 冯・張・葛　2010 など）。このように、中国の大卒者の就職難は大学生の責任に帰され、大学生の就職意識の修正が求められるようになった。

「高望み」問題のほかにも、大学生の就職意識の問題は多様に語られている。朱・黄（2006）は、大学生の就職意識の問題を 4 点にまとめた。それは、①大学や親に依存する消極的な就職態度、②終身雇用や大都市での就職などにこだわるという高い就職期待、③専攻の関連領域しか就職先として考えないという狭い就職ビジョン、④日ごろの学習をはじめとする就職準備に対する心構えのなさである。また、これらの問題に対して、朱・黄（2006）は社会認識および自己認識を深めることによる就職意識の修正を提案した。

また、冯・張・葛（2010）は大学生の就職意識の問題について以下のような内容を提示している。それは①曖昧な就職ビジョンと自己認識の不足、②競争意識の欠如および情報収集に対する消極的な態度、③高くて、現実離れした就職期待、④挫折に弱いという 4 点であった。さらに、大学生の「高くて、現実離れ」した就職期待について、一般的に語られてきた「大都市志向」などのほかに、冯などは職場の居心地の良さや知名度へのこだわりも問題だと考えている。

以上からわかるように、就職意識の問題の解釈はさまざまであるが、いずれも就職意識の問題として大学生の高い就職期待を取り上げている。それは就職ビジョンの曖昧さから就職に対する消極的な態度、さらに大学での学習における意欲の低下などに拡大していった。つまり、就職意識問題の提起は大学生の就職問題

だけでなく、大学生像に対する認識をも変えていったのである。

しかし、以上に挙げた「エリート意識」に対する研究者の解釈には、さまざまなものが見られる。たとえば、高収入と職場の将来性へのこだわりを同時に批判する研究者もいれば（瞿・于・蔡　2004)、収入の重視から将来性の重視への意識の転換を提唱し、仕事の将来性を重視することを評価する研究者もいる（楊・郑 2003)。また、就職に対して大学生の危機感のなさが指摘される一方、就職難による大学生の心理的ストレスの発生は心理学で多く実証されている。何よりも、大学生の就職意識の問題が大きく取り上げられるにもかかわらず、それは論議の上での非難に留まり、データを挙げて実証的に検討した研究は十分ではないことが指摘されている（李　2011)。大学生の就職意識の問題を語るのには、まだ残された課題が多い。

３　政府の対応

就職意識の問題に対する指摘に応じて、中国政府はさまざまな対応策を講じた。本節では、従来指摘されてきた大学生の就職意識の問題に対する、政府の対応を検討する。

2004 年、国務院は「大学生の思想政治教育をさらに強化し、改善するための意見(中共中央国务院关于进一步加强和改进大学生思想政治教育的意见)」において、「大学生の正しい就職意識の形成に携わる」ことを要請した。2007 年、中国教育部は「大学生の就職指導と就職指導要領（大学生职业发展与就业指导课程教学要求)」を公表し、「正しい就職意識」として「個人キャリアビジョンと国の需要、社会の発展とを一致させ」ることを就職指導の目的とした。2009 年大学生の就職会議において教育部部長の周済は大学生の「正しい就職意識」の養成、とりわけ大学生が農村に就職することの重要性を強調した。2011 年教育部政策法規司の司長孫霄兵は記者会見においても大学生の就職意識の問題の解決の重要性を強調した。そこで孫は「(大学生は）大都市、いいポストだけを志望するのではなく、どのポストにも適応できるように」、「国の需給、社会の需給に応える」ように意識を修正する必要があると語った[2]。

上述の政策から、中国政府は大卒者就職難が始まった 2004 年から大学生の「正しい就職意識」、とくに国の需要と一致した就職意識の醸成を求めていることがわかる。また、このような就職意識の醸成のための具体策として、大学による就職意識の指導、および大卒者に対する農村などへの政策的誘導がある。

上述したように、大学生の就職意識の問題として、大都市での就職に対するこだわりが大きく取り上げられてきた。大学生のそのような高い大都市志向を修正することは、政府が大学生の就職意識の問題を取り扱う焦点となった。大学生の大都市志向に対して、政府は大卒者を地方の労働市場に誘導するようにさまざま

な政策を立てた。それはおもに、地方への移動に対する政策上の優遇と奨励、および大学の就職指導に対する要請がある。

大学生の大都市や待遇の良い就職を志望する意識“問題”に対して、政府は農村や地方都市、また中小企業に就職するように「西部奉仕計画」と「三支一扶」という奨励・誘導策を講じた。これらの誘導策は、国の需要に応える奉仕精神を高く評価している。また、公務員の選抜における優先採用など、さまざまな優遇を保障する形で、今まで大学生の就職したがらない地域、ポストへと、大卒者を政策的に誘導しようとした。しかし、これらの誘導策は任期付きで大卒者を地方に派遣するため、1~3年の任期を終えた大卒者のほとんどは派遣地に定着できず、もう一度就職をめぐる競争に立ち向かうことを志望している。つまり、これらの政策はあくまでも就職難問題の緩和策でしかなかった。

加えて、就職意識の問題の修正を目的とする職業生涯教育の導入が、政府によって促された。

2006年、中国教育部は「中国大学生職業生涯設計コンクール」の開催を促した。このコンクールは、政府の「大学卒業生の“基層（農村や貧困地区など）”への就職を誘導、奨励するための意見（关于引导和鼓励高校毕业生面向基层就业的意见）」（2005）に応えるために計画されたものであった。全国の国公立大学がコンクールへの参加を要請された。それを契機に、コンクールの参加に対応する指導、つまり「職業生涯教育」（日本でいうキャリア教育）の導入が促された。さらに、大学生の「自己の過剰評価」や曖昧な就職ビジョンに対して、中国教育部は大学の職業生涯教育による自己認識、社会認識を深めるサポートを要請し[3]、それを地方へ就職するための前提とした。このように大学生の就職意識の修正を前提として「職業生涯教育」は大学の就職指導に導入されたのである。

農村や地方への就職のほかに、転職や起業志向なども「正しい就職意識」として、中国政府によって提唱されるようになった。初職に対する大学生の高い期待の前提として終身雇用へのこだわりが指摘されているため、中国政府は「とりあえず就職し、後で転職する（先就业，后择业）」という転職意識を推奨した[4]。また、大学生の就職またはキャリア形成における主体性を育成するために、起業意識の喚起（楊・郑　2003）なども就職意識の修正案に組まれ、マスコミによって盛んに取り上げている。

以上からわかるように、中国政府は大学生の就職意識の問題に対して、さまざまな対策を立ち上げてきた。しかし、前節で述べたように、大学生の就職意識の問題はいまだに実証されていない部分が多い。それに対する政府などによる取り組みも一時的なものが多い。むしろ、これらの短視眼的な政策により新たな問題が引き起こされる可能性も考えられる。次節では、上述した就職意識の問題をめぐる研究または政策に残された課題を検討する。

４　就職意識の問題に関する研究の課題と検討

就職意識の問題に関する研究の課題について、以下の３点が指摘できる。

第１に、実証的な調査の欠如が指摘できる。前述したように、盛んに取り上げられてきたにもかかわらず、大学生の就職意識の問題を客観的に実証したものが少ない。また、数少ないデータによる検討の中でも、「そのほとんどが就職競争のもっとも激しい北京や上海のような大都市圏の学生を対象としていること」（徐・来島　2007，p.80）が指摘されている。たとえば、瞿・于・蔡（2004）が 2004 年、北京の大学に在籍する学生を対象とした調査の結果から、67%の大学生は北京での就職を志望し、41%は上海、32%は沿岸部での就職を志望していることがわかった。また、「小都市や地方の私有企業で就職したいか」という質問に対して、62%の大学生は否定的な態度を示した。それと同様な調査は李（2011）などにも見られるが、いずれも北京や上海などの大都市における大学生を対象とした調査であった。大都市と地方都市との間の経済格差が大きいことや、戸籍による地域の分断も考慮しなければならない。そのため、数少ない大都市だけを調査地域に取り上げることには、限界がある。地方における大学生の就職意識と大都市の大学生のそれと大きく異なることが考えられる。大学生の就職意識を検討する際に、出身地や大学所在地または家庭背景など、大学生の多様性を考慮しなければならない。

また、大学生の就職意識に関する調査の多くは、大学生の「大都市志向」「高収入」を重視する志向を単純集計により分析することに留まっている。つまり、社会構造や経済問題という側面を有する大学生の就職難を、大学生自身の問題として一方的に語り、構築している可能性が大きい。就職意識を問題とするのであれば、むしろなぜそうした就職意識が形成されるのか、あるいは就職意識が大学生の学習行動や学習意識、あるいは実際の就職行動といかに関連しているのかが検討されなければならない。

第２に、労働市場に対する検討の限界が指摘できる。大学生の就職意識の問題が提起された背景に、人的資源の配分不均衡の問題が指摘されてきた。しかし、それは就職意識に対する指摘と同様、実証的な検討が行われてこなかった。つまり、中国の大卒者労働市場について十分に検討されていないまま、大学生の就職意識の問題が指摘されている。

徐・来島（2007）は地方の山東省をフィールドとした質問紙調査によって中小民営企業が「新規大卒者採用より随時に労働市場からの中途採用」を多く行っていることを明らかにした。従来の指摘では、中小民営企業は新卒大学生の雇用を志望していることを強調してきた。また、それにもかかわらず、大手、または国有セクターでの就職にこだわり、中小民営企業に就職したがらないという大学生の就職意識の問題は就職ルートを狭めるだけでなく、高学歴労働者に対する中小

企業や地方からの需要に応えていないことが指摘されてきた。徐・来島の結果は、このような高学歴労働者、とりわけ新規大卒者に対する小企業や地方の需給問題を否定したものではないが、従来の指摘の妥当性に疑問を投げつけた。

さらに、前述したように、中国における大卒者の労働市場はさまざまな形で分断され、その間の移動に膨大なコストが伴う（馬　1998）。大学生の就職に対する労働市場の分断化の影響を無視したまま、大学生の就職意識を非難するのは一方的だといえよう。地方の大学生の就職意識を通して、労働市場の構造を検討することは、就職難問題を考察する際の重要な視点を提示してくれよう。

最後に、就職アスピレーションの不足による学習アスピレーションの低下、さらに大学生の専門能力の不足が指摘されているが、その指摘も実証の段階に至っていない。大学生の就職意識を検証するために、そのキャンパスライフや学習行動との関連を考慮しなければならない。

先行研究の検討からわかるように、中国の就職意識研究の主流をなすこれらの先行研究は大学生の就職意識の「不適切さ」を非難しているに過ぎない。さらに、大学生の就職意識の問題、またはその背景となる労働市場の実態が十分に検討されないまま、中国政府はさまざまな対応策を講じた。このような問題意識を前提とした政策は大卒者の就職難問題の解決に繋がらないだけでなく、新たな問題を生み出す恐れがある。

たとえば、「とりあえず就職し、後で転職する」という転職志向を促す政策がある。徐・来島（2007）の研究において、中国の国有企業または中小民営企業はともに中途採用を重視するようになったという結果を得た。その理由の１つとして大学生の転職志向が挙げられている。つまり、新卒者の高い転職志向が危惧され、新卒採用、さらに社内教育が衰退しつつあると考えられる。大卒者の転職に対する政府の提唱は一時的なものであり、大卒労働市場に支障を来たしかねない。また、就職意識の問題が曖昧なままに、その対策として導入された職業生涯教育の効用も疑われよう。

就職意識の構造を明らかにすることは、大学生の就職意識の問題を検証し、大卒者の就職を取り巻く問題、またそれに対応する就職指導の再考察に意味があると考えられる。

＜注＞

１．国務院が 2000 年に発表された「国務院が 2000 年普通大学卒業生就職に関する通知」による。

２．「孙霄兵：坚持改革创新 做好教育政策法规工作」による。（中国教育新闻网-中国教育报　2014 年 1 月 16 日アクセス
http://www.jyb.cn/china/gnxw/201212/t20121207_520465.html）

３．中国国務院 2011 年教育改革プロジェクト・記者会見（「教育部副部长杜玉波介绍“十一五”时期教育改革发展情况及“十二五”规划中教育领域的有关工作」国务院新闻发布会）（2013 年 9 月 4 日アクセス）
http://www.moe.gov.cn/sofprogecslive/webcontroller.do;jsessionid=9DEF7BB91D53E85A0DE3BB15E821CA28?titleSeq=2391&gecsmessage=1
４．「委员：先就业后择业・大学生要打破"铁饭碗"就业观」十一届全国政协第六次会议 中国政协新闻网（2013 年 9 月 4 日アクセス）
http://cppcc.people.com.cn/GB/34961/156758/156770/9509120.html

第２章　地方における大学生の就職

本章では、地方における大学生の就職意識の問題について考察するうえで、本研究の調査地である山東省の概要を検討する。

第１節 地方における大学生の就職意識

前章で述べたように、中国では、大学生の就職意識の問題は就職難の原因として大きく非難されてきた。また、就職意識の問題に対する指摘のうち、大都市志向への非難が目立つ。その対象となるのは、地方出身の大学生である。つまり、大都市に地方からの大学生が多く集まっていることが問題だと考えられている。しかし、一方で、就職意識に対する非難に実証的検討が欠けており、データを用いた数少ない研究の中でも、大都市を対象としたものが多い（徐・来島　2007）。そのため、大学生の就職意識の問題を検討するためには、地方に焦点を当てることが必要である。

本節では、地方大学の大学生を対象とした就職意識研究、および地方出身の大学生が主体である「蟻族」問題の検討から、地方における大学生が持つ就職意識の問題の実態と課題を検討する。

１　地方大学の学生の就職意識の問題―先行研究からの検討―

大学生の就職意識の問題に対する非難の中でも、地方大学の大学生がとりわけ問題視されてきた。さらに、大都市の大学と比べて、地方にランクの低い大学が多く、就職環境も大都市ほど整っていないため、地方の学生をめぐる就職問題は大都市よりも深刻だと認識されている（趙　2007）。

地方の大学生の就職意識の問題として、就職に対する高い期待およびキャリア意識や自立性の欠如などが指摘され、大学生一般に対する従来の指摘と同様な傾向が見られる。地方大学の大学生について、黄・夏（2005）は「就職意識に問題があり、就職ビジョンが曖昧、就職期待が高い」（p.121）と述べ、さらにそのキャリア意識の欠如および自己の過剰評価を批判している。地方大学の学生の「大都市志向」などの「エリート意識」に対する指摘は趙（2007）の研究などにも見られた。また、趙（2007）は「地方」出身であることに対するコンプレックスなどについても述べており、袁（2007）は地方大学の学生の親への依頼が強いことを指摘している。地方の大学生に対するこれらの指摘は、大学生一般の就職意識の問題に対する認識と一致している。

また、大学生一般と同様な問題が指摘される一方、地方大学の大学生に対する指摘には、自己の認識不足の問題がとりわけ大きく取り上げられている。「大都市の戸籍がない」うえに、その多くはランクの低い大学に所属する（袁　2007）た

めに、就職に対する地方大学の大学生の「高い期待」がさらに問題視されたのである。

地方大学の大学生の「自己認識不足」の問題については、おもに次の２点が指摘されている。まず、地方大学の学生は社会に求められる役割を認識できていないとされている。社会が地方大学の学生に地方への奉仕を求めているのに対して、地方大学の学生の高い大都市志向はそのような社会の需要に反することだと考えられている（楊　2004）。さらに、李（2008 b）は、大卒労働市場には「ブランド大学の劣等生を採用しても、地方大学の優等生を採用しない」という大学ランクを重視する傾向があるため、地方大学の卒業生の高い大都市志向は労働市場のこのような特徴を無視したものだと考えている。つまり、地方大学、とくにランクの低い大学の卒業生は就職における自らの不利を認識し、大都市などのポストをめぐる就職競争から身を引くことが薦められている。

次に、一方で、地方独自の問題も指摘されてきた。地方の経済的遅れと文化的「閉鎖性」により、地方大学の学生の就職意識はほかの大学生よりさらに「保守的」だと指摘されている。劉（2011）は、地方大学の学生は大都市の学生より「終身雇用」を重視し、また「社会地位」や「メンツ」に対する重視も大都市より目立つと指摘している。さらに、劉は、地方大学の学生の就職意識の問題は「大都市志向」ではなく、地方志向にあると考えている。地元出身者が多いため、地方大学の学生は地元志向が高く、就職の際に県外を出たがらないことが問題だと、劉は指摘している。このように、地方大学の学生の就職意識は従来指摘されてきたものと異なる可能性が、一部の研究によって示唆されている。

以上からわかるように、地方大学の大学生は従来語られてきた「エリート意識」などの就職意識の問題が指摘されながら、「地方」ゆえに抱える問題はさらに重大なものだととらえられている。「大都市志向」と同時に、地方大学の学生の「地元志向」も指摘され、従来指摘されてきた就職意識と異なる問題が存在していることが示唆されている。前述したように、大学生の就職意識の問題に関する検討、とくに実証的データを用いた検討は主に北京や上海などの大都市における大学生を対象としている。地方における大学生の就職意識を検討することで、多様な大学生像を提示することができると考えられる。

次は、「蟻族」問題で提示された、地方における大学生の就職意識を対象とする重要性、および考察する際の視点を検討する。

２　地方出身の大学生の就職意識の問題―「蟻族」問題からの検討―

前述したように、大学生の就職意識の問題に関する先行研究には、実証的な検討が欠けている。一方で、中国の「高学歴ワーキングプア」である「蟻族」問題の提起は、大都市志向をはじめとする大学生の就職意識の問題に批判の材料を与

えた。その「蟻族」の主体となったのが、地方出身の大卒者であった。

「蟻族」とは、北京・上海をはじめとする大都市の豊かさを求めて、都市部の周辺に住み着き、生活状態及び精神状態が切迫されている中で都市での市民権を得ようとする大卒者のことである。大都市に憧れる大卒者が就職の苦境に陥るという「蟻族」の問題は、まさに大学生の就職意識の問題への非難に材料を提供した。そのため、「蟻族」問題をもたらす原因の１つとして大学生の就職意識の問題が取り上げられてきた（廉　2009 など）。

「蟻族」問題の検討は、大学生の就職意識の問題、また大卒者の就職問題の実態研究にいくつの視点を提示してくれた。その１つに、大学生の就職意識における地域差を指摘できる。

「蟻族」の研究に取り上げられた大都市志向の問題の主体は、地方出身の大学生であった。廉が調査対象とした北京における「蟻族」のうち、９割以上は地方出身者であった。また、その中でも、膨大な人口と遅れた経済成長が特徴の河北省、山東省の出身者は、それぞれ「蟻族」の 10%超を占めている。地方出身の大学生が北京での就職を志望し、その周辺に集まったことは大学生の就職意識の問題を顕在化させたのである。

さらに、「蟻族」である地方出身者の４割以上は、北京での大学に進学することによって上京した、大都市での生活経験を持つ地方出身者であった（廉　2009）。大都市での生活、学習経験は大学生の進路決定に影響を与えていると考えられる。大学生の就職意識を検討する際に、その出身地域のほか、大学生の経歴、とくに大学進学による地域移動の経験の影響も考慮する必要がある。

上述した「蟻族」の性格から、大学生の出身背景また進学経験によって、その就職意識が異なると推測できる。北京などの大都市を対象とした調査から見られた大学生の大都市志向は、大都市での就学経験によるものかもしれない。つまり、今まで大学生に一般化されてきた就職意識の問題は出身地域だけでなく、地域移動によって異なる可能性が考えられる。大都市での就学経験を持たない大学生、つまり、地方出身で地方大学に進学した大学生を調査の対象とすることで、従来一枚岩のように捉えられてきた大学生像に新たな可能性を提示すると考えられる。

２つ目として、「蟻族」の問題では、中国の労働市場における戸籍や「コネ」などによる大卒者の就職への影響が言及されている。廉は、一部の「蟻族」は「コネ」がないために地元に戻らざるをえないことを明らかにし、大卒者の就職に対する出身背景、とりわけ「コネ」の強い影響を示した。また、大卒者の就職に対する「コネ」の強い影響は、前述した李（2011，pp. 178-179）の仮説をも言及されている。

さらに、廉の研究では、「蟻族」の６割以上は都市戸籍を持っており、そのうちの７割は地方での就職に自らが有利だと考えている。つまり、蟻族は北京での就

職を志向するために困窮な境地に陥っているが、その多くは自らが地方では有利な就職環境に恵まれていると考えている。

以上のように、大学生の就職意識を考える際には、大学生の社会移動や出身背景などが大きなファクターだと考えられよう。

第２節　調査地山東省の概要

以上の検討をふまえ、本研究は中国の「地方」である山東省を調査対象とすることにした。

１　山東省の地域性と中国における地位

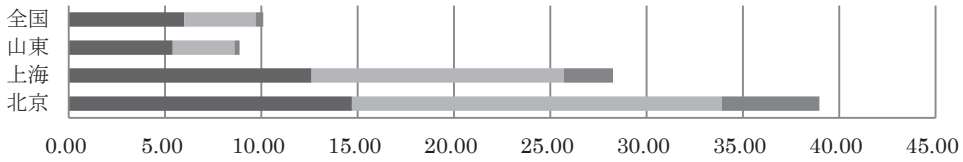
山東省は「地方」としての性格を持ちながら、その内部における地域格差が大きく、多様な産業構造を有することが考えられる。

山東省の「地方」としての性格は、その人口構成における農村出身者の高い割合と、正規労働者における高学歴者の割合の低さなどにうかがえる。

まず、北京や上海における農村戸籍の人口は 2~3 割であるのに対して、山東省における農村戸籍の人口は 5 割であった（中国統計年鑑　2012）。中国では、所属する労働市場によって戸籍が農村から都市へ、地方から中央へと変動するシステムになっている（頼　1998）。そのため、ある地域の都市戸籍の人口割合はある程度その地域の労働市場のレベルを示しており、都市化の指標として考えることができる。山東省の人口構成における農村出身者の割合が高いことは、都市化の遅れを意味しているのである。

次に、山東省の正規労働者における高学歴者の割合が低い。表２－１は、各地域の正規労働者における高学歴者の割合を示している。そこから、山東省の正規労働者における高学歴者の割合が極めて低いことがわかる。

表２－１　各地域の正規労働者における高学歴者の割合（%）



	北京	上海	山東	全国
■専科大学	14.70	12.60	5.40	6.00
■本科大学	19.20	13.10	3.20	3.70
■大学院	5.08	2.55	0.26	0.39

注：『中国人口と就業統計年鑑』（2011）より作成。

全国の正規労働者における高学歴者（大学院、本科大学、専科大学の卒業者）

の合計が 10.09％であるのに対して、山東省における高学歴者の正規労働者は8.86％であり、全国平均値を下回っている。それに対して、北京における高学歴の正規労働者は合わせて 38.98%で、上海の場合は 28.25％であった。

山東省は農村戸籍の住民が多いうえに、労働市場における高学歴者の割合も低い。それは「地方」の特徴と一致した傾向だと考えられる。

山東省での労働市場における高学歴者の割合が低い原因は、その産業構造にある。表２－２は、全国における産業構造と山東省との比較を示している。

表２－２　産業構造における全国と山東省の比較（％）

	第一次産業	第二次産業	工業	建築業	第三次産業	交通運輸・流通・郵便	卸売・小売	宿泊・飲食	金融	不動産	その他のサービス業
全国	9.1	50.6	44.5	6.1	40.3	4.8	9.3	2.1	5.0	4.3	14.9
山东	8.8	52.9	46.9	6.0	38.3	5.1	11.9	1.9	3.6	4.1	11.6

注：『中国統計年鑑』（2012）『山東統計年鑑』（2012）より作成。

表２－２からわかるように、高学歴者の雇用先だと考えられる第三次産業の山東省における比重は低い。山東省の第三次産業の比重は 38.30％であり、全国水準の 40.30％を下回っている。それに対して、山東省の第二次産業は全体の 52.90％を占めており、全国平均の 50.60％を上回っている。また、高学歴者に対する山東省の労働市場の受容の限界は、図２－１にもみられる。

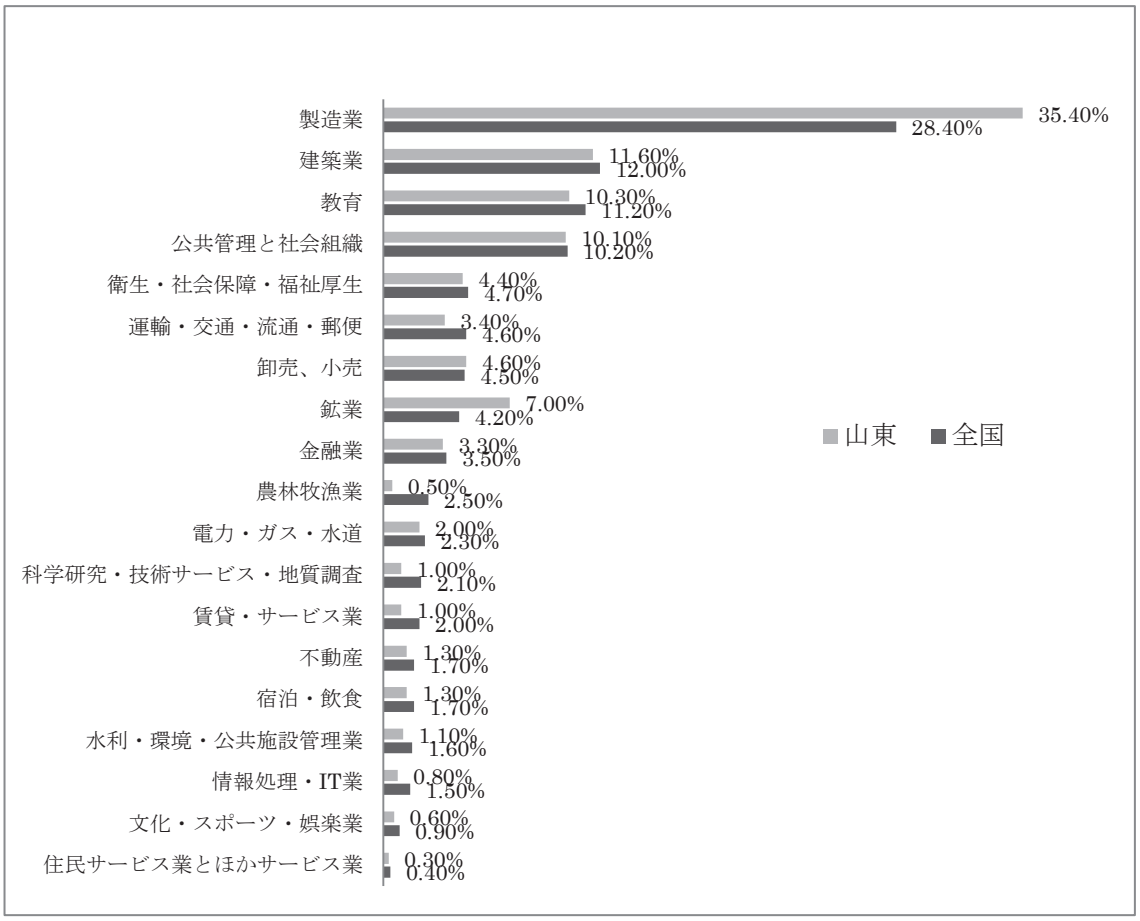
図２－１は都市部の各職種の正規就業者数における全国平均と山東省との比較を示している。第三次産業で高学歴者の雇用先だと考えられる金融・不動産などの業種における山東省の雇用率は、全国平均を下回っていることが示されている。

「教育」産業の正規労働者の全国における割合は 11.2％であるのに対して、山東省は 10.3％で、全国平均を下回った値を示している。また、「科学研究・技術サービス・地質調査」という技術職を提供する業種において、全国の正規就業者割合が 2.1％であるのに対して、山東省は 1.0％であった。そのほかに、不動産や金融、情報処理・IT 業など、文化・教育・福祉に関わる業種が、山東省における正規就業者の割合はいずれも全国水準を下回っている。これらの産業は高学歴者就職の主な受け皿（李　2011，p.129）として、高学歴者の労働市場を左右する重要な指標だと認識されているから、山東省における高学歴者の就職機会はそれほど豊富ではないと考えられる。

一方で、山東省の都市部において製造業や鉱業に携わる正規就職者の割合は、高い値を示している。製造業において、全国における正規就職者の割合が 28.40%であるのに対して、山東省は 35.4％であり、全国水準を大きく上回っている。また、鉱業において、全国における正規就職者の割合が 4.2%であるのに対して、山東省は 7.0％であった。これらの業種は体力労働者に豊富な就職機会を提供し、

山東省における膨大な農村戸籍の労働者の受け皿となっている。

図２－１　都市部の各職種における正規就業者数の全国と山東省の比較



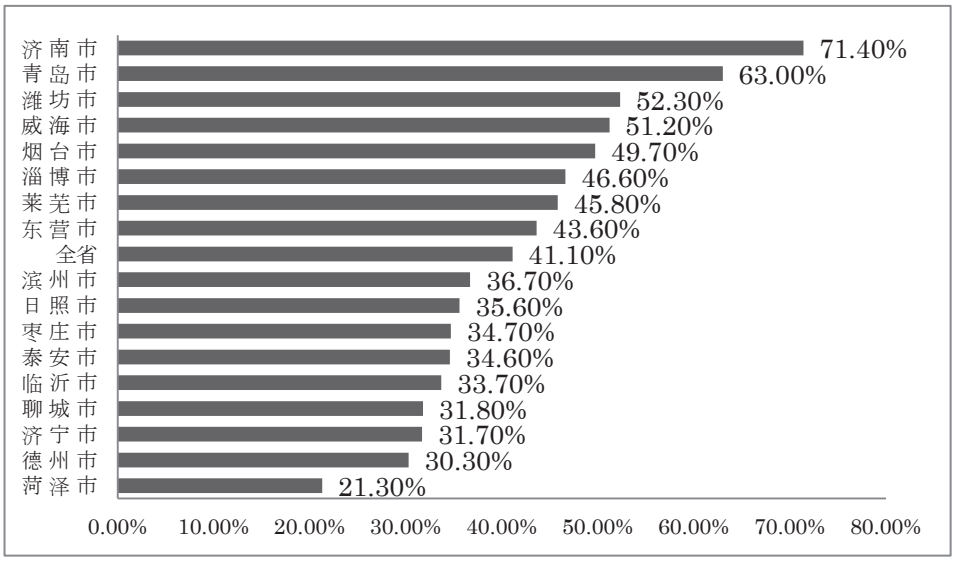
注：『中国統計年鑑』（2012）『山東統計年鑑』（2012）より作成。

以上の検討から、農村戸籍の住民が半数を占め、高学歴労働者が少なく、第二次産業の繁盛と第三次産業の未成熟である山東省は、「地方」としての性格を持っていると考えられる。大都市に高学歴者を吸収するポストが多いことに対して、地方である山東省は高学歴労働者に豊富な就職機会を提供しているとは言い難い。

一方で、山東省は「地方」としての性格を持ちながら、その内部における地域格差が大きく、多様な地域構造となっている。山東省の地域格差は図２－２によって示されている。

図２－２は山東省内の各市における都市戸籍を持つ人口の割合を示している。この表から山東省各市の人口構成における格差が大きいことがわかる。

図２－２　山東省内の各市における都市戸籍住民の割合



注：『山東統計年鑑』（2012）より作成。

山東省の省政府所在地である済南市では、都市戸籍の住民が 71.4％であるのに対して、荷泽市は 21.3％で、大きな差がみられる。前述したように、都市戸籍者の割合は地域の都市化を示している。山東省各市の人口構成における大きな差は、山東省内部における地域格差が大きいことを示している。

さらに、広い面積に膨大な人口、および多様な地域・産業構造を持つことで、山東省は「地方」でありながらも、中国全体の経済や労働市場において重要な位置を占めている。

表２－３　項目別にみた山東省が全国における地位

項目	全国	山東	山東／全国×100％	人口に対する倍数（左記各指標/人口が全国に占める比率）
人口　（万人）	134,735	9,637	7.2	1.0
GDP　（億元）	471,563	45,361	9.1	1.3
そのうち　第一次産業（億元）	47,712	3,973	8.3	1.2
第二次産業（億元）	220,591	24,017	10.9	1.5
第三次産業（億元）	203,260	17,370	8.5	1.2
財政収入　（億元）	52,433	3,455	6.6	0.9
高等教育機関　（校）	2409	139	10	1.4
普通本科大学　（校）	879	52	5.9	0.8
高等教育在籍数　（万人）	2,308	162	7.0	1.0
高等教育卒業者数　（万人）	11，837	832.8	7.0	1.0
都市部失業者数　（万人）	754.4	59.5	7.9	1.1

注：『中国統計年鑑』（2012）『山東統計年鑑』（2012）『中国人口と就業統計年鑑』（2011）より作成。

表２－３は山東省の全国における地位を示している。そこから、人口構成比率（戸籍の構成割合）や産業構造、高等教育の状況などにおいて、山東省は全国水

準とほぼ一致していることがわかる（中国統計年鑑 2008，p.113）。

また、山東省の人口数と全国人口との倍率を１として、その経済状況、高等教育状況および労働市場、人口構成の全国における比率と比較すると、各項目の人口に対する倍率は１前後であり、全国の平均水準とほぼ一致しているようにみえる。フィールドとしての山東省は、中国を代表できる一般性があるといえよう。

しかし、経済産業構造などが全国平均とほぼ一致した傾向を示しているのに対して、山東省における「普通本科大学」だけ、人口倍率を下回っていた。ここでいう「普通本科大学」とは、日本でいう短期大学や専門学校である「普通専科大学」と区別されるもので、その多くは４年制の総合大学、単科大学である。中国では、「普通本科大学」と「普通専科大学」を合わせて「普通大学」と呼ぶ。なお、「普通専科大学」は「高等専科学校」や「職業技術学院」などの形として認識されており、一般にいう「大学」はおもに「普通本科大学」のことである。

表２－３から、山東省の高等教育機関は全国水準に達しているが、「普通本科大学」の場合は全国水準より低い割合を示していることがわかった。つまり、山東省では、短期大学や専門大学が多く設置されているが、「普通本科大学」の設置数は、膨大な人口に対応できていない「普通本科大学」の不足が、山東省における大学への進学機会を制限することになっていることは、後述する山東省の高等教育の事情から明らかになる。

なお、山東省内部における地域格差に配慮し、本研究は、サンプル収集を行う地域を慎重に選択した。その結果、山東省の省庁所在地である済南、経済が比較的に豊かな沿岸都市である青島市および農村に囲まれた済寧市、という３つの地方都市でデータ収集を行うことにした。図２－２からわかるように、この３つの地方都市における都市戸籍者の割合はそれぞれ、済南市が 71.4%、青島市が 63.0%、済寧市が 31.7%である。

２　山東省の高等教育と大学生就職

本節では山東省の高等教育事情を検討し、山東省における大学生を取り巻く環境を明らかにする。

まず、山東省に振り分けられた進学機会は、ほかの地域より少ないと考えられる。中国では、大学進学は全国統一試験によって左右されるが、その合格ラインは統一したものではなく、各省の定員枠によって戦略的に設定されている。その募集定員は、各省の統一試験の受験人口と大学の当省に対する募集枠の設定によって規定される。また、各省の大学は省内の住民（省の戸籍を持つ者）を優先的に入学させることになっている。つまり、膨大な人口に対して大学数の少ない山東省内の進学機会は、大きく制限されているといえよう。山東省の進学志望者が大学に進学するには、極めて厳しい進学競争に勝ち抜かないといけない。このよ

うな山東省出身の進学志望者が置かれた進学競争の厳しさは、１点刻みの全国統一試験が各省に設定された合格ラインの違いからわかる。

表２－４は 2011 年、中国各省に設定された全国統一試験の合格ラインを降順で示している。この表から、山東省における大学合格ラインはほかの大多数の地域より高く設定されていることがわかる。

表２－４　2011 年全国センター試験の合格ラインにおける各省比較

（「一本」の文系の合格ラインを降順で示す・点）

	一本		二本		三本	
地域	文系	理系	文系	理系	文系	理系
湖南(750)	583	572	528	492	443	365
广东(750)	580	568	536/489	504/460	439/350	483/330
★山东(750)	570	567	512	503	--	--
重庆(750)	564	533	504	479	450	466
河北(750)	562	581	524	535	441	390
河南(750)	562	582	515	531	460	455
安徽(750)	547	534	510	477	487	439
湖北(750)	547	571	507	517	430	410
山西(750)	543	570	496	520	--	--
陕西(750)	543	540	495	488	395	368
黑龙江(750)	540	551	462	465	--	--
吉林(750)	537	548	437	443	364	377
福建(750)	535	573	473	460	--	--
辽宁(750)	535	520	475	452	420	390
四川(750)	533	519	473	448	441	416
江西(750)	532	531	484	474	418	373
云南(750)	532	531	484	474	418	373
北京(750)	524	484	481	435	443	396
天津(750)	519	515	460	429	--	--
广西(750)	519	506	456	424	396	334
贵州(750)	516	448	446	376	--	--
甘肃(750)	504	501	458	448	--	--
新疆(750)	504	473	433	407	370	360
宁夏(750)	500	486	463	444	365	345
西藏(750)	495	465	445	380	390	335
内蒙古(750)	486	482	430	409	373	340
青海(750)	430	380	380	331	342	310

注：「一本」「二本」「三本」は「本科」類の大学または専攻のランクを示すものである。
「一本」大学は本科大学の中で最もランクの高い大学であり、その合格ラインも「二本」「三本」より高い。
なお、上海、江蘇、浙江、海南省は大学入試制度改革の試行地として、各自で大学入試の問題紙を作成、試験を行っているため、全国統一試験からはずされている。
（高考网 http://www.gaokao.com/z2011/2011qgfsx/　2013 年 9 月 13 日アクセス）

「一本」（中国教育部が認定した重点大学や重点学科）の文系の合格ラインとして、人口の少ない青海省は 430 点、教育機関を最も多く有する北京市は 524 点であるのに対して、山東省は 570 点であった。また、理系では全国で一番合格ラインの低い青海省の 380 点と北京市の 484 点に対して、山東省は 567 点であった。人口の少ない、または教育機関の豊富な他地域の住民と同様に進学するには、山東省の戸籍を持つ者はさらに努力しなければならないのである。

以上のように、山東省の住民が大学に進学するには、さらなる努力やコストが必要となる。そのような激しい進学競争を勝ち抜けた山東省の大学生は、ほかの地域の学生よりも大学への進学アスピレーションが高かったことが考えられる。登坂(2007)は中国の進学志望者の高い進学アスピレーションが過熱し続けると、高い就職アスピレーションに転化し、就職に対する高い期待に繋がると考えている。山東省の大学生の場合、進学アスピレーションによる就職アスピレーションや就職期待への影響はさらに顕著だと考えられよう。また、高い進学アスピレーションは「学校化」や大学入学後の「中だるみ」問題など、大学における学習生活に影響を与えている可能性も考えられる。

山東省では、大学への進学が難しいだけでなく、山東省の大卒者の就職環境も比較的厳しい。表２－５は、2009 年～2011 年における山東省の大卒者の就職状況を示している。表からわかるように、山東省における大卒者の就職は、全国一般よりも厳しい状況にある。

表２－５　2009 年～2011 年における山東省の大卒者の就職状況（%）

年度	卒業者数（万人）	就職率（%）	省内就職率	国有機関	国有企業	私有企業	進学や政策就職	フリーターなど	起業		全国就職率
2009 年	41.89	85.82	87.59	10.30	6.86	33.74	18.70	30.37	0.03		89.60
2010 年	43.17	85.00	83.75	2.46	7.29	40.29	15.55	34.29	0.03		89.60
2011 年	46.70	86.65	83.66	2.46	7.66	50.34	13.80	25.70	0.04		90.20

注：「全省非師範類高等教育卒業生就職状況に関する通報」『山東省人力資源と社会保障庁文件』を参考。

2009 年から 2011 年までの 3 年間における全国大卒者の就職率は 89.6%, 89.9%, 90.2%であるのに対して、山東省の大卒者の就職率は 85.8%，85.0%，86.7%であり、全国水準を下回っている。

また、山東省における大卒者の就職動向がこの 3 年間で大きく変化したこともわかる。まず、2009 年から 2011 年までの間、省内で就職した山東省の大卒者の割合はそれぞれ 87.6%，83.8%，83.7%であり、省内就職率が低下傾向にある。それは、山東省内の労働市場が大卒者の受け皿として十分に機能していないためだと考えられる。

一方で、私有企業で就職する大卒者の割合の上昇がうかがえる。2009 年から 2011 年までの私有企業に就職した山東省の大卒者の割合は、それぞれ 33.7%，40.3%，50.3%であり、大幅に増加していることがわかる。それに対して、国有機関への就職は 10.3%から 2.5%に低下した。その原因は、近年、市場経済制度の浸透に伴い、私有企業が増加したことと、国有機関の人件費削減だと考えられる。「大卒＝幹部」の時代が終わった今日、高学歴者は国有セクターから私有セクターへと目を向けるようになったのである。

以上のように、山東省では、大学進学をめぐる競争が厳しいうえに、大卒者は全国一般よりも厳しい就職状況に置かれていることが明らかになった。「地方」で

ある山東省で調査研究を行うことで、就職難における大学生の就職意識を検討するのに重要な視点と事例を提示することができるであろう。

第３章　研究の枠組みと方法

第１節　調査の概要

本章では、本研究に用いられる質的および量的調査の概要を説明し、地方における大学生の就職意識の実態を概観する。それをうけて、就職意識の規定要因および大学生活との関連を考察するための視点を提示する。

本調査は、各大学の教員に協力を依頼し、2011 年 8 月から 9 月にかけて、授業時間にアンケート用紙を配布、回収する形で行われた。調査対象は中国の山東省に所在する 3 つの大学の 3，4 年生、計 1,000 名である。

表３－１　2011 年調査対象校の就職状況

大学	卒業人数	就職人数	正規就職率（%）	非正規就職率（%）	契約途中率（%）	就職率（%）
X 大学	7005	5632	77.84	2.56	0.06	80.40
数学専攻	25	9	36.00	0.00	0.00	36.00
会計専攻	118	98	83.05	0.00	0.00	83.05
Y 大学	6824	6337	74.38	18.48	0.10	92.86
文学専攻	127	111	65.35	22.05	0.00	87.40
Z 大学	6578	6144	44.89	48.51	0.00	93.40
数学専攻	266	255	50.75	45.11	0.00	95.86
文学専攻	293	277	42.66	51.88	0.00	94.54

注：「全省非師範類高等教育卒業生就職状況に関する通報」『山東省人力資源と社会保障庁文件』を参考。

アンケートの回収率は 77.1%であった。対象とした３大学の全国における大学ランクはそれぞれ、X 大学が 16 位、Y 大学が 142 位、Z 大学が 210 位[1]であり、国立、省立と市立という階層的構造になっている。また、大学所在地は、それぞれ省庁所在地の済南市、沿岸都市の青島市と農村部に囲まれる済寧市に分布している。

2011 年における３大学の大卒者の就職状況を表３－１に示した。３大学の卒業者の就職状況は大学ランクによって異なる様相を呈している。全体の就職率はそれぞれ、X 大学は 80.4%、Y 大学は 92.9%、Z 大学は 93.4%であり、ランクの低い大学ほど就職率が高いようにみえる。しかし、正規就職率は、X 大学は 77.8%、Y 大学は 74.4%、Z 大学は 44.9%であった。ランクの最も低い Z 大学の正規就職率は最も低い結果となっている。それに対して、非正規就職率では、X 大学は 2.6%、Y 大学は 18.5%、Z 大学は 48.5%であり、正規就職率の低い Z 大学は非正規就職の割合が高い。つまり、ランクの低い大学の全体就職率が高いのは、高い非正規就職が原因である。ランクの低い大学の学生は、ランクの高い大学の学生より厳しい就職状況にあり、その半数近くは非正規に就職していたことがわかる。また、同じ専攻に所属しても、大卒者の就職は大学ランクにより強く影響されていることが読み取れる。

調査対象の構成を表３－２に示した。３大学のサンプル全体に占める割合は X

大学が 26.6%、Y 大学が 26.7%、Z 大学が 46.7%であり、Z 大学の比重が大きい。また、性別は、42.4%が男性、57.6%が女性であり、専攻は、47.7%が文系系、52.3%が理系系、学年は 45.8%が 3 年生、54.2%が 4 年生である。

表３－２　サンプルの構成

大学	学部	学年	サンプル数	有効回収率	女性の割合	農村出身者の割合
X 大学	数学部	3 年生	96	64.0%	15.2%	47.9%
		4 年生	109	72.7%	5.1%	64.2%
Y 大学	文学部	3 年生	89	59.3%	75.8%	78.7%
		4 年生	117	78.0%	83.4%	72.6%
Z 大学	文学部	3 年生	88	88.0%	77.3%	70.1%
		4 年生	95	95.0%	73.7%	77.9%
	数学部	3 年生	80	80.0%	57.0%	81.3%
		4 年生	97	97.0%	69.8%	78.4%
合計			771	77.1%	57.6%	71.1%

また、地方大学の特徴は、その大学生に農村出身者の割合が高いことにある。表３－２からわかるように、農村出身者はサンプル全体の 71.1%を占めており、全国大学生における農村出身者の割合（50%）を大きく上回っている[4]。さらに、山東省の農村人口の割合が 53.3%である。山東省における農村戸籍の大学生の割合は、その農村人口の比率をも大きく上回っている。それは「一人っ子政策」が農村地域に浸透していないからだと考えられる。農村家庭に対する一人っ子政策の制約が比較的に緩いため、大学適齢者に農村戸籍の者が多いと考えられる。また、もう一つの原因として、地方における都市出身者が海外への留学または北京や上海などの大都市の大学を志望することが考えられる。それは、大都市にあるエリート大学における農村出身の大学生の割合低下（麦克思研究院　2012）から推測される。実際、山東省の大学における県外出身者において、都市戸籍を持つ者が大半を占めている。農村出身者と比べ、都市出身者は県外に進学することを志向する傾向にあると考えられる。

さらに、表３－２からは、大学ランクと家庭背景の関連がうかがえる。X、Y、Z の３大学における農村出身者の割合はそれぞれ 56.7%、75.2%と 76.9%であり、X 大学における農村出身の大学生はほかの２大学よりはるかに少ない。つまり、大学ランクが高いほど、農村出身者の割合が低い。前述したように、近年の中国では、エリート大学における農村出身の大学生の割合の低下（麦克思研究院　2012）が取り上げられている。そのような大学ランクに対する家庭背景の影響は、調査地である山東省にもみられた。

質問紙調査の調査項目として、就職意識と大学生活、および就職指導と、大きく３つの領域を設定した。そのうち、就職意識については、就職成功に必要な要素と自己評価，職業の選択基準や就職地希望などという職業希望，進路希望，また、就職への態度などについて調査した。大学生活については、大学および専攻の志望動機、学習行動および生活全般について質問した。また、職業生涯教育に

ついては、大学による提供状況、それに対する学生の期待度、利用状況および効用に対する評価に関して聞いている。

また、質問紙調査の補足として、2013 年の 2 月から 3 月の間に、各大学でインタビュー調査を行った。調査内容は、おもに大学生の就職事情と大学による職業生涯教育の実態である。インタビュー調査の対象となったのは、３大学の就職指導係６名と、各大学の３，４年生計７名である。調査対象の 13 名にそれぞれ１時間以上のインタビューを行った。また、事前に家庭背景や進路状況などをある程度把握しておいた。そのプロフィールは表３－３と表３－４で示している。

表３－３　就職指導に関わる教員のプロフィール

	性別	所属・職位	キャリア
A 先生	男性	X 大学キャリアセンター長	10 年
B 先生	男性	Y 大学数学部・支援科科長	8 年
C 先生	男性	Y 大学キャリアセンター長	10 年
D 先生	女性	Z 大学文学部・学年チーフ	5 年
E 先生	男性	Z 大学文学部・学年チーフ	2 年
F 先生	男性	Z 大学キャリアセンター長	8 年

注：「キャリア」として示した年数は、大学生の就職指導に携わる年数である。

表３－４　大学生のプロフィール

	性別	所属・学年	出身地域
G さん	女性	X 大学文学部 3 年生	農村出身
H さん	女性	X 大学経済学部 3 年生	都市出身
I さん	男性	Y 大学法学部 3 年生	都市出身
J さん	女性	Z 大学文学部 4 年	農村出身
K さん	女性	Z 大学文学部 4 年生	農村出身
L さん	女性	Z 大学文学部 4 年生	都市出身
M さん	男性	Z 大学文学部 3 年生	農村出身

なお、職業生涯教育の実態は筆者による 2010 年の調査結果を参考にしている。2010 年調査の詳細について、第 6 章にて説明する。

第２節　本研究における「家庭背景」

「蟻族」問題に対する検討および聞き取り調査に対する分析の結果から、大学生の就職意識に対する家庭背景の影響が示唆されてきた。しかし、王（2005）と李（2011）などの先行研究の結果では、大学生の階層による影響は確認されたが、それは限定的なものであった。本節では、これらの先行研究に残された課題を考察したうえで、大学生の就職意識に対する家庭背景の影響を再検討する。

王（2005）と李（2011）などの研究は、中国における大学生の就職意識と家庭背景との関連をある程度提示し、その関連は部分的であるという結果を得た。しかしながら、いずれの研究も家庭背景の指標としておもに親の学歴、所得と職業

のみを取り入れているため、中国の状況を十分に配慮しているとは言えない。というのも、「コネ」などに代表される中国社会における「縁故」を家庭背景として考慮していないからである。

中国における「縁故」について、園田は「中国の場合、個人のもつ政治的な動員力もさることながら、特定の人物との人間関係が、階層的な位置づけにとって決定的な要因となっている」（園田 2001，p.18）と述べ、その影響力が大きいことを示している。また、堀口・大竹（2010）は 9 割以上の大学生は就職でコネを使うのが当然だと考えていることを明らかにした。大学生が就職における「縁故」の機能を肯定的に捉えていることがわかる。就職意識に対する「縁故」の影響を実証する研究はいまだに見られないが、コネの使用は就職の重要な手段として大学生に強く意識されていることから、「縁故」の有無は就職意識に対して影響を及ぼしていると考えられる。

また、コネの元である個人の社会的権力が挙げられる。中国の場合、ある組織や地域、または領域において権力を持つ者のことを権力者と呼び、場合によって、権力者は正式な就職ルートを無視して、その縁故者にポストを与えたりすることができる。そのため、家族に権力者がいることで、その人は「有力な家庭背景」を持っていると評価される。

上述したように、コネ、または社会的権力を持つことで社会規則の制限をある意味で凌駕することができる。それは、中国独特な文化や慣行に由来するもので、親の学歴、所得または職業という一般的な指標では捉えきれないものだと考えられる。

本研究では「（就職に有利な）コネを持っている」（4 段階）と「有力な家庭背景を持っている」（5 段階）という 2 つの変数を用いて「縁故」を測定する。それは中国の「縁故」の特徴を考えた上での設定である。つまり、園田（2001）の論述に基づき、中国における「縁故」を「特定の人物との人間関係」と「個人のもつ政治的動員力」（園田 2001，p.18）という 2 つの形態から捉えたのである。

そのうち、「（就職に有利な）コネを持っている」は親の階層や社会地位が必ずしも高いとは限らず、「特定の人物との人間関係」、いわゆる「コネ」を持つことによって成立する。一方で、「有力な家庭背景を持っている」は家族や親族が何らかの社会的力を持っていることを意味している。それは「コネ」を自由に駆使することの条件として、さらに高い社会地位や社会信頼性を持っていることによって成り立つ。つまり、「有力な家庭背景を持っている」ことは「コネを持っている」だけでなく、高い社会的地位が約束された家庭の出身者であることを意味する。

本節では、説明上で「縁故」と区別するために、親の学歴や所得、職業および戸籍などという社会階層として一般的に用いられてきた資本を「社会階層」と呼ぶ。

表３－５は社会階層の各指標における「縁故」の平均値の差を示したものである。父親の学歴における「コネを持っている」の平均値分布が 1%水準で有意となり、その以外は 0.1%水準での有意となった。この表から、「縁故」は社会階層と強い関連を持っていることがわかる。

表３－５　社会階層における「縁故」の平均値分布

	戸籍		父親の学歴		父親の職業		父親の月収	
	都市	農村	高卒以上	中卒以下	専門・管理職	専門・管理職ではない	1000元超	1000元以下
有力な家庭背景を持っている	2.96	2.04**	2.54	2.00**	2.86	1.89**	2.43	1.86**
コネを持っている	2.69	2.29**	2.49	2.30*	2.64	2.24**	2.47	2.15**
「縁故」合成変数	6.23	4.61**	5.47	4.56**	6.01	4.39**	5.32	4.17**

ただし、先行研究で、「縁故」の重要性が強調されてきたことから、それを独立した変数として扱う必要性がうかがえる。

上述した調査対象の構成から、大学ランクに対する家庭背景の影響が強いことが示唆された。以下では、３大学における大学生の階層分布を詳しく検討する。

表３－６は、３大学の学生の階層分布を示している。大学ランクの高い大学生の社会階層が高いことが明らかである。

表３－６　３大学の学生の階層分布

	父親の学歴+			父親の職業**			父親の月収		
	高卒以上	中卒以下	合計	専門・管理職	その他	合計	1001元以上	1000元以下	合計
X大学	66.0%	34.0%	100.0%	56.7%	43.3%	100.0%	81.0%	19.0%	100.0%
Y大学	53.4%	46.6%	100.0%	40.9%	59.1%	100.0%	81.6%	18.4%	100.0%
Z大学	55.9%	44.1%	100.0%	36.5%	63.5%	100.0%	76.1%	23.9%	100.0%
	母親の学歴**			母親の職業**			母親の月収*		
	高卒以上	中卒以下	合計	専門・管理職	その他	合計	1001元以上	1000元以下	合計
X大学	53.0%	47.0%	100.0%	44.3%	55.7%	100.0%	66.3%	33.7%	100.0%
Y大学	36.6%	63.4%	100.0%	29.6%	70.4%	100.0%	53.4%	46.6%	100.0%
Z大学	30.1%	69.9%	100.0%	23.7%	76.3%	100.0%	53.1%	46.9%	100.0%

注：ｐ＜0.01 は*，ｐ＜0.001 は**として示す。以下同様[2]。

まず、大学ランクに対する親の学歴の影響が見られた。なかでも、母親の学歴による影響が目立った。母親が高卒以上の学歴を持つ大学生の割合をみると、X 大学は 53.0%、Y 大学は 36.6%、Z 大学は 30.1%であり、ランクの高い大学生は豊かな「文化資本」を持っているということができる。

また、「経済資本」においても、母親の月収による影響が確認された。母親の月収が 1001 元以上の大学生の割合をみると、X 大学は 66.3%、Y 大学は 53.4%、Z 大学は 53.1%であった。ランクの高い大学の学生は豊かな経済資本を持っていることがわかる。しかし、母親の月収による影響が確認されたのに対して、父親の月収には有意な差が見られなかった。母親の階層による影響が強いことは、李（2011）の研究でも指摘されている。

一方で、大学生の社会階層の中でも、大学ランクに対する親の職業の影響はと

りわけ顕著であった。つまり、大学生の学歴に対する親の社会地位、社会影響力という「政治資本」の影響が非常に強いと考えられる。父親の職業が専門・管理職の大学生の割合をみると、X 大学は 56.7%、Y 大学は 40.9%、Z 大学は 36.5%であった。大学ランクの高い学生に、社会的地位の高い家庭の出身者が多い。

大学生の学歴に対する政治資本の強い影響は、表３－７にもうかがえる。

表３－７　「縁故」の所持に関する３大学比較

		とても あてはまる	あて はまる	あまり あてはまらない	あてはまらない	合計
コネを 持っている (**)	X 大学	16.9%	43.5%	32.8%	6.8%	100.0%（177）
	Y 大学	14.2%	25.3%	45.3%	15.3%	100.0%（190）
	Z 大学	7.4%	25.9%	51.5%	15.1%	100.0%（324）
		とても あてはまる	あてはまる	どちら でもない	あまり あてはまらない	あて はまらない	合計
有力な 「家庭背景」 を持っている (**)	X 大学	13.7%	28.9%	19.8%	21.3%	16.2%	100.0%（197）
	Y 大学	2.0%	7.8%	18.0%	29.3%	42.9%	100.0%（205）
	Z 大学	0.9%	9.5%	18.3%	41.5%	29.8%	100.0%（349）

表３－７は、３大学における「縁故」の分布を示している。大学ランクに対する「縁故」の強い影響がわかろう。「コネを持っている」において、「あてはまる」（「とてもあてはまる」+「あてはまる」）と答えた X 大学の学生は 60.4%であるのに対して、Y 大学が 39.5%、Z 大学が 33.3%であった。また、「有力な家庭背景を持っている」において、「あてはまる」（「とてもあてはまる」+「あてはまる」）と答えた X 大学の学生は 42.6%であるのに対して、Y 大学が 9.8%、Z 大学が 10.4%であった。ランクの最も高い X 大学において、「縁故」を持っていると考える学生の割合はずば抜けて高い値を示している。

以上の大学ランクと家庭背景との関連からわかるように、中国における大学の進学機会、とくにランクの高い大学への進学機会は、個人の家庭背景に強く規定されている。とりわけ、親の職業や「縁故」に代表される政治資本の影響が顕著である。大学生文化を検討する際に、家庭背景、とりわけ「縁故」などからの影響を考慮することが重要となろう。

第３節　大学生の就職意識の概観

就職意識の規定要因を分析する前に、まず就職意識の全体像を明らかにする。ここで、就職意識として、主に就職先を決める際に何を重視するか、卒業後どこに就職したいか、およびキャリアについていかに考えているのかなどを取り上げる。

１　職業の選択基準

表３－８は就職先を決める際に何を重視するかを「とても重視する」を５、「全く重視しない」を１として算出した平均値の高い順に並べたものである。これより、大学生が福利厚生や職場環境を重視していることがわかった。

表３－８　就職先を決める際に何を重視するか（%）

	とても重視している	少し重視している	どちらでもない	あまり重視していない	全く重視していない	合計
保険制度が整っている	53.2	37.3	6.8	2.5	0.3	100.0(765)
職場の人間関係がいい	47.4	45.3	5.2	1.3	0.7	100.0(763)
職場は将来性がある	51.1	39.1	6.8	2.5	0.5	100.0(767)
（昇進）機会が平等に与えられる	44.9	44.2	9.4	1.3	0.3	100.0(711)
能力や個性が生かせる	35.6	53.0	9.2	2.1	0.1	100.0(711)
趣味が生かせる	34.0	54.3	8.9	2.8	0.0	100.0(711)
休日が充実している	38.6	46.9	9.3	5.0	0.3	100.0(765)
経営的に安定している	41.0	41.8	12.3	4.5	0.4	100.0(763)
住宅手当がある	39.1	45.6	10.7	4.1	0.5	100.0(763)
収入が高い	36.3	50.0	10.5	3.0	0.3	100.0(764)
社会人として能力を身につけられる	35.7	50.6	11.0	2.7	0.0	100.0(711)
現代的経営理念が備えている	37.7	43.5	14.2	4.2	0.4	100.0(766)
技術を身につけられる	33.1	48.6	14.4	3.5	0.4	100.0(708)
昇進機会が多い	29.7	51.9	14.3	3.8	0.3	100.0(707)
国外出張が多い	26.1	51.1	16.7	5.4	0.7	100.0(706)
専門領域が生かせる	21.7	50.2	20.6	6.9	0.6	100.0(708)
多様な職種が体験できる	24.6	46.2	20.9	7.5	0.8	100.0(708)
戸籍の転入を保障する	28.9	38.0	21.3	9.3	2.4	100.0(760)
職場に知人がいる	22.9	45.9	21.4	8.5	1.3	100.0(763)
他人の役に立てる	20.8	48.5	22.5	7.2	1.0	100.0(710)
社会的地位が高い	20.4	44.1	25.8	8.5	1.3	100.0(710)
知名度が高い	21.2	41.4	25.4	11.0	1.0	100.0(765)
規模が大きい	20.9	40.0	27.8	10.6	0.7	100.0(765)
国家に奉仕できる	18.8	41.9	28.1	8.8	2.4	100.0(707)
職場が実家に近い	16.8	45.4	19.0	16.8	2.1	100.0(764)
仕事内容が楽である	14.2	46.3	19.9	17.6	2.0	100.0(765)
転勤がない	17.7	37.8	21.9	21.0	1.4	100.0(761)
職場が大都市にある	13.7	37.9	27.7	18.7	2.0	100.0(765)
社内競争が激しくない	11.7	38.6	30.2	17.9	1.6	100.0(761)
国内出張が多い	13.0	26.6	38.8	19.0	2.5	100.0(706)

「保険制度が整っている」において、重視する（「とても重視している」と「重視している」の合計、以下同様）と答えた大学生は 90.5%であった。また、「休日が充実している」を重視すると答えた大学生は 85.5%であった。

また、「職場の人間関係がいい」を重視する大学生は 92.7%であり、職場環境に対する大学生の重視もうかがえる。「（昇進）機会が平等に与えられる」を重視する大学生は 89.1%で、職場における機会の平等を重視している大学生も多い。

福利厚生や職場環境の重視に対して、「規模が大きい」を重視する大学生は 60.9%、「職場が大都市にある」を重視する大学生は 51.6%だと、高い割合を示しながらも、全体的に見ると低い順位にある。地方の大学生にも「大手志向」「大都市志向」が見られたが、それは福利厚生や職場環境などほかの項目と比べてそれほど重視されていない。つまり、大手または大都市に対する大学生の「こだわり」が指摘されてきたが、地方の大学生を対象とする本調査の結果はそれと異なる可能性を提示している。

以上の分析結果から、地方の大学生は就職先を決める際、職場の規模や大都市にあることより、福利厚生や職場環境を重視していることがわかった。それは就

職意識の問題として指摘されてきた大学生の高い「大手志向」「大都市志向」と異なる傾向を示しており、大学生の就職意識について再検討する必要があろう。

２　進路に対する希望

表３－９は大学生が卒業後、どこに就職したいかを示している。地方の大学生の進路希望は国有セクターと大学院への進学に偏っていることがわかる。

中国の大学生の進路希望としては、主に国有セクター、私有セクターと大学院進学、また起業や国外での就職などがある。中国の労働市場で述べたように、国有セクターは中国の分断化した労働市場の中で「体制内」市場に該当しており、安定性と高い収入のほか福利厚生が保障されるだけでなく、比較的高い社会的地位や権力を獲得できる。そのような国有セクターは、主に政府機関、政府機関の下請けである事業単位[3]と国有企業、研究機関がある。そのうち、事業単位は大卒者の受け皿として大きく機能していると考えられる。私有セクターには主に外資企業と国内の私営企業がある。そのうち、市場経済以降に発足した中国の私有企業と比べ、現代的な経営理念のうえに待遇がよく、規模も大きい外資企業は若者から高い人気を集めている。また、大学院への進学を志望する大学生も多い。それは学歴社会を反映したものである。そのほか、大卒者の就職難、また大学生の就職意識の問題の対応策として提唱された起業や、グローバル化の進展に応じた国外での就職も大卒者の選択肢として考えられる。このことを踏まえながら表３－９を概観しておこう。

表３－９　卒業後、どのようなところに就職したいか（%）

	政府機関	事業単位	国有企業	外資企業	研究機関	私営企業	起業	国外就職	国内進学	こだわらない	分からない
はい	42.5	65.9	50.6	31.8	15.4	15.8	18.0	6.1	39.9	6.3	3.1
いいえ	57.5	34.1	49.4	68.2	84.6	84.2	82.0	93.9	60.1	93.7	96.9
合計	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)	100.0 (771)

表３－９から、国有セクターへの就職志望が非常に高いことがわかった。国有セクターのうち、「事業単位」を志望する大学生は 65.9%で、「国有企業」は 50.6%、「政府機関」は 42.5%と、いずれも志望者の割合が高くなっている。大学生が政府機関より事業単位を志望するのは、公務員をめぐる競争の厳しさに対して、事業単位は、国有セクターを志望する大学生に比較的に多いポストを提供しているからだと考えられる。

国有セクターへの高い志望に対して、「私営企業」を志望する大学生はわずか 15.8%であった。就職難が深刻化するなか、多くの大学生は「体制内」市場への参入を希望している。

また、進学を志望する大学生は 39.9%であった。大学生の高い進学希望は大卒者の就職難に原因があると考えられる。そのほか、起業を志望する大学生は 18.0%

であり、大学生の進路志望に対する政府およびメディアの影響は大きいことがうかがえよう。また、国内の私有企業への無関心に対して、外資企業の志望者は31.8%であった。外資企業は国有セクターへの就職または大学院進学に続き志望者の多い進路先となっている。

表３－１０は就職地に対する大学生の希望を示している。「沿岸部」に対する志望が高い一方、地方の大学生には高い地元志向がみられた。

表３－１０　卒業後、どこで就職したいか（%）

	実家	沿岸部	内陸部	西部	農村	海外	こだわらない
はい	57.2	66.1	24.6	5.9	2.4	9.6	10.8
いいえ	42.8	33.9	75.4	94.1	97.6	90.4	89.2
合計	100.0（771）	100.0（771）	100.0（771）	100.0（771）	100.0（771）	100.0（771）	100.0（771）

沿岸部に就職したいと考える大学生は66.1%であるのに対して、内陸部を志望するのは24.6%であった。半数以上の大学生は沿岸部での就職を志望していることがわかる。沿岸部が経済の発達した地域として考えられるため、就職環境に対する大学生の重視がうかがえる。

一方で、地方の大学生の57.2%は「実家」での就職を志望していることがわかる。先行研究の検討では、大都市に対する大学生のこだわりはその就職意識の問題として大きく取り上げられてきた一方、地方の大学生の高い地元志向も指摘されている(劉　2011)。表３－１０の結果から見られた地方の大学生の高い「実家」志向は、大都市へのこだわりという従来の批判と異なる可能性を示し、劉(2011)の指摘を肯定するものであった。

３　就職に対する考え方

表３－１１は就職に対する大学生の考え方を示ししている。この表から、中国の地方の大学生が初職や適職に期待を持つ一方、就職難による妥協がうかがえる。

表３－１１　大学生の就職に対する考え方（%）

	とても あてはまる	少し あてはまる	どちら でもない	あまりあて はまらない	全くあては まらない	合計
とりあえず就職して、後で転職する	19.7	47.7	19.4	11.5	1.7	100.0(706)
大学院に進学することは就職に有利だ	13.9	39.8	29.2	15.0	2.1	100.0(706)
給料さえ高ければよい	8.4	25.2	26.0	34.5	6.0	100.0(705)
「メンツ」を重視する	8.4	50.1	27.1	12.1	2.3	100.0(702)
高卒で就職すればよかった	4.8	13.8	18.2	34.0	29.2	100.0(703)
仕事さえ見つければよい	5.2	21.2	29.5	33.9	10.2	100.0(708)
初職を重視する	33.4	51.9	11.9	2.8	0.0	100.0(755)
適職ではないとすぐに転職する	13.2	39.6	30.9	15.0	1.3	100.0(752)
就職において専攻をいかさなくてもよい	17.7	50.1	19.3	11.6	1.3	100.0(751)

大学生は初職に対する重視がみられる。「初職を重視する」に対して、85.3%の大学生は「とてもあてはまる」「あてはまる」を選んでいる。中国の労働市場の分

断化により、市場の移行に障害が多いと考えられる。そのため、大学生は初職でできるだけ移動の自由度の高い、上部の市場で就職することを志望している。それは上述した「大手志向」「大都市志向」が必ずしも高くない大学生が国有セクターを志望する大きな理由だと考えられる。

しかし、初職を重視する一方で、地方の大学生は一時的な就職を考えている。「とりあえず就職し、後で転職する」と考える大学生は「とてもあてはまる」と「少しあてはまる」をあわせると 67.4%があった。大学生は「一時的な就職」によって就職難を乗り越えようとしている。それは前述したように、大学生の就職意識の問題の修正に提示された「正しい就職意識」の１つとして「とりあえず就職し、後で転職する（先就业，后择业）」の転職意識がある。ここで示された大学生の高い転職志向の原因として、就職難のほかに、政府による提唱も考えられる。

以上のような理想と現実の間に揺らぐ大学生の就職に対する考え方は、ほかにも見られる。「仕事さえ見つければよい」に「あてはまらない」と答えた大学生は 44.1%であり、仕事に対する重視を示す一方、「どちらでもない」と答えに迷った大学生は 29.5%であった。それに対して、「あてはまる」大学生は 26.4%もいた。初職を重視し、将来の仕事に期待を寄せながらも、就職難の中で妥協するように促された大学生の躊躇がうかがえよう。そこで、大学生の高い就職期待を非難する就職意識の問題の提出は、就職の理想と現実の間に揺らぐ大学生に混乱を招きかねないと考えられる。実際、「とりあえず就職し、後で転職する」が政府に提唱されるまま、大学生に受け入れられたことから、就職意識の「修正」はすでに大学生に影響を与えているとうかがえる。

さらに、「専攻を生かす」ことを重視しないという考え方は、政府の推奨を反映して、高い値を示している。すなわち、大学生の 67.8%は就職で専攻を生かさなくてもいいと考えている。その一方で、表３－８からわかるように、71.9%の大学生は「専門領域を生かせる」ことを重視している。このような矛盾は、大学生の就職意識の問題として「専攻へのこだわり」が指摘されてきたことに原因がある。ここで見られた専攻にこだわらない大学生の姿は、政府または世論の影響を受けた結果だと考えられる。

しかし、中国の大学教育は専門教育を主とするため、専攻を生かさないことは大学における学習を就職に生かさないことに等しい。それは、大学での学習から大学生が疎遠になることに繋がると考えられる。表３－１１に示されたように、「高卒で就職すればよかった」と考える学生が 18.6%であった。つまり、2 割近くの大学生が大学教育の意義を全面否定していることになる。また、大学での学習の就職に対する意義は、表３－１２からも否定されていることがわかる。

表３－１２　内定に対する各項目の重要度（%）

	とても重要	まあまあ重要	あまり重要ではない	全然重要ではない	合計
資格	35.9	53.2	10.1	0.8	100.0(750)
学歴	44.5	45.9	8.9	0.7	100.0(751)
大学ランク	33.5	46.7	17.8	2.0	100.0(749)
大学での成績	19.9	43.3	33.0	3.9	100.0(749)
社会経験	54.6	39.0	6.0	0.4	100.0(753)
人格	57.8	36.4	5.2	0.5	100.0(752)
「コネ」	58.3	36.0	5.3	0.4	100.0(751)
コミュニケーション力	63.1	34.6	2.0	0.3	100.0(748)
やる気	56.3	38.3	5.1	0.3	100.0(751)
責任感	62.7	32.5	4.6	0.1	100.0(753)
思考力	56.5	38.9	4.3	0.4	100.0(751)
戸籍	15.0	31.7	45.8	7.5	100.0(747)
専攻	26.1	53.9	18.0	2.0	100.0(751)
実践能力	52.7	40.1	6.5	0.7	100.0(750)
特技	22.9	48.3	25.7	3.2	100.0(748)
性別	15.4	37.0	38.7	8.9	100.0(745)
党員	18.0	39.1	34.5	8.5	100.0(745)
学級委員	13.4	51.1	30.9	4.6	100.0(696)
振る舞い	17.5	66.1	15.2	1.1	100.0(696)
知識量	42.7	50.2	5.8	1.3	100.0(691)

表３－１２は内定に対する個人資本の各項目に対する大学生の重視を示している。この表からわかるように、就職において、コミュニケーション力や思考力、責任感などの個人の能力や人格は重要だと考えられている。それに対して、大学での成績などは内定にそれほど重要ではないと考えられている。

内定に重要な項目として、最も肯定されたのは「コミュニケーション力」で、97.7%の大学生は重要（「とても重要」+「まあまあ重要」）だと考えている。そのほかに重視される項目として、「思考力」が 95.4%、「責任感」が 95.2%、また「人格」が 94.2%、「知識量」が 92.9%と、どちらも内定獲得に重要だと大学生に共通して認識されている。つまり、中国の地方における大学生は個人の能力や人格が就職において重要だと考えている。しかし、中国の高等教育は専門教育を中心としており、上述した個人の能力や人格に関わる教養教育は極めて薄弱である。これは、表３－１１にみられた大学教育の意義に対する大学生の否定的な態度をもたらす１つの原因となっていることが推測できる。

また、内定獲得に繋がる要素として、90.4%の大学生は学歴が重要だと認識している一方、大学での成績を重要だと考える学生は 63.2%であり、ほかの項目と比べて低い値を示している。大学生にとっては、大学での成績などより学歴のほうが就職には重要だということがわかる。大学生の成績軽視は、大学生活に影響を与えているかもしれない。

表３－１３は就職の意味に対する大学生の認識を示している。この結果から、大学生の就職観は現実的だとうかがえる。

表３－１３　就職の意味に対する認識（%）

	はい	いいえ	合計
経済的に自立するため	88.0	12.0	100.0(732)
人生を充実にさせるため	74.2	25.8	100.0(732)
人間として成長するため	71.0	29.0	100.0(732)
地位や名声を得るため	25.3	74.7	100.0(732)
社会に貢献するため	32.2	67.8	100.0(732)
親に恩返しするため	78.0	22.0	100.0(732)
お金持ちになるため	17.5	82.5	100.0(732)
家族の名誉のため	27.6	72.4	100.0(732)
よくわからない	2.5	97.5	100.0(732)

88.0%の大学生は「経済的に自立するため」に就職すると考え、高い自立志向を示している。また、「親に恩返しするため」に就職する大学生は全体の 78.0%を占め、親への恩返しは大学生の就職に重要な意味を持っているとうかがえる。中国では、「望子成龍」という言葉があるように、親がわが子の出世を志望し、その実現を教育に託す伝統的な教育観がある。そのため、子どもが親の期待に応えるための出世コースに乗ることが多いと考えられる。とくに、中国の大学の授業料は農村などにおける貧困家庭にとって大きな負担になるため、そのような家庭出身の大学生は、親から大きな期待を寄せられ、親に「恩返し」するためにその期待に応えられるような就職を志望する。「親への恩返し」を重視する就職観と「メンツを重視する」[4]ことは、出身家庭からの意識の継承が大学生の就職意識に影響している可能性を提示している。

また、「人生を充実させるため」(74.2%)や「人間として成長するため」(71.0%)など、個人の発達を重視する大学生も多く見られる。就職に対する大学生のアスピレーションの問題が指摘されてきた。しかし、上述の結果から、地方の大学生は堅実に就職を捉えていることがわかる。それは従来の指摘と異なる可能性を示していると言えよう。

以上の分析から、地方における大学生の就職意識の実態には、指摘されてきた就職意識の問題とギャップがあることが示唆された。そのため、大学生の就職意識を検討する際に、一面的にとらえるのではなく、その構造や規定要因を検討することが求められる。

４　まとめと考察

以上の分析より、以下の知見が得られた。

第一に、地方における大学生は大都市や大手への就職より、職場の福利厚生と将来性、職場環境を重視している。

第二に、地方の大学生は国有セクターに対する志望が高い。また、沿岸部での就職を志望すると同時に、地元志向も高い。

第三に、地方の大学生には高い転職志向が見られ、「仕事さえあればよい」という軽率な就職意識を示す一方、初職を重視し、「メンツ」が重要だとも考えている。また、多くの学生は就職における大学教育の効用を否定し、個人の能力や人格が内定獲得につながると考えている。

第四に、経済の自立など堅実な就職価値観を示している。

以上の知見を受けて、以下のような示唆が得られた。

まず、大学生の就職意識に対する従来の指摘に、本章の分析結果は異なる可能性を提示した。

地方出身の大学生が大都市に残ることを志望するという李（2011，p.186）の結果と異なり、本研究では地方の大学生は職場が大都市にあることをそれほど重視していないという結果を得た。それは、地方における大学生の就職意識は、李が調査を行った上海における地方出身の大学生と異なる傾向を示す可能性を提示している。大学生の就職意識を取り扱う場合、大都市と地方という地域による社会的文脈の違いを踏まえて考えなければならない。

また、沿岸部での就職する同時に、高い地元志向が示され、大学生の就職意識の多元性が考えられる。

さらに、地方の大学生は「経済的自立」や「親に恩返し」、また「人間として成長」するために就職すると考え、堅実な就職価値観と高い就職アスピレーションを示している。それは、大学生の就職アスピレーションや、自立性の欠如に対する従来の非難を否定した結果である。

以上の３点から、「高望み」など就職意識の問題を一方的に非難することの限界がうかがえよう。

次に、「就職意識の問題」に対する非難は大学生の就職意識の混乱を招きかねないと考えられる。地方の大学生は初職を重視する一方、「仕事さえあればよい」、「とりあえず就職し、後で転職する」と一時的な就職に甘んじることを考えている。つまり、地方の大学生は就職を重視しながらも、就職難に対して妥協せざるを得ない状況にある。そのような理想と現実との間に揺らぐ大学生の就職意識を非難し、「修正」を要請することは、困惑を抱える大学生の就職意識に更なる混乱をもたらしかねないと考えられる。また、大学生が「とりあえず就職し、後で転職する」と考えるのは、政府が提唱する「正しい就職意識」がすでに大学生に影響を与え、浸透しているからかもしれない。

最後に、地方の大学生が大学教育、とりわけ大学教育の就職における効用を否定的にとらえていることが明らかになった。2 割近い大学生は「高卒で就職すればよかった」と考えている。また、地方の大学生は個人の能力および人格が就職に重要だと考える一方、大学の成績などは内定にそれほど重要ではないと考えて

いる。就職における大学教育の効用に対する大学生の否定的態度は、その大学での学習に影響を及ぼすと考えられる。

＜注＞

１．2011 年、中国校友会が「科学研究」「人材育成」「総合評価」を基準とするに作成したランキングに依拠する。（2012 年 6 月 20 日アクセス）
http://www.gaokao.com/e/20110118/4d34ffccbcf15.shtml

２．本研究では、統計的基準を厳しく判断するため、カイ二乗検定や平均値の差の検定の場合、5%水準ではなく、1%と 0.1%水準を用いる。

３．事業単位とは国家が社会公益目的のため、国家機関により運営あるいはその他組織が国有資産を利用し運営するもので、教育、科学技術、文化、衛生などの活動に従事する社会サービス組織である。たとえば、学校、銀行、通信・交通機関などが挙げられる。

４．表３－１０では、「メンツを重視する」に「あてはまる」と答えた大学生は 58.5％であった。就職難が深刻するなか、地方の大学生は就職において「メンツ」を重視することがわかる。第４章の分析において、親の「メンツ」を考慮して職業選択する大学生の姿がうかがえる。

第４章　就職意識の構造と規定要因

本章では、地方における大学生の就職意識の構造および規定要因を検討する。

前述したように、実証的な資料をあげて検討していないにもかかわらず、大学生の就職意識の問題性は一方的に非難され、就職難を生み出す要因とされてきた（張・劉　2006，趙　2010 など）。さらに、こうした非難にもとづいて大学生の就職意識は政府、あるいはマスコミによって社会問題の１つとしてとりあげられ、中国の大学生バッシングとも言える現象を引き起こした。

このように大卒者の就職意識に対する批判が続く一方、その内部に潜まれる労働市場の構造に着目する社会学研究者もいる（馬　1998，李　2011 など）。では、大学生への一方的な非難と市場理論にもとづく分析の下で、実際の中国の大学生の就職意識はどのような構造を呈し、どのように社会の現状を反映しているだろうか。本当に大卒者の就職意識は、批判の対象とされるべきなのだろうか。大学生の就職意識の構造と規定要因を実証的に把握することによって、大学生像を捉えなおし、職業生涯教育という大学による就職指導の課題を考えることが求められる。

そこで本章では、①大学との関連から大学生の就職意識の構造を明らかにし、その分析の課題を提示する（第１節）、②就職意識の規定要因を大学生の語りから分析し（第２節）、③就職意識の最もの規定要因だと考えられる出身背景の影響を検討する（第３節）。

第１節　就職意識の構造

本節では、中国の地方における大学生の就職意識の構造を、とくに大学または専攻との関連に焦点を当てて検討する。

１　希望する就職と大学との関連

本節では、各大学・専攻の学生はどのような就職を志望しているかについて見ておこう。ここでおもに大学生が志望する就職地および就職先について分析する。

まず、表４－１に、大学生が志望する就職地と大学・専攻の関連を示した。大学生の就職地に対する希望が大学ランクや専攻、また大学所在地から影響を受けていると考えられる。

「実家」での就職を志望する大学生の割合として、X 大学は 39.3％、Y 大学は 56.3％、Z 大学の理系、文系はそれぞれ 60.7％と 72.0％である。大学ランクが低いほど、「実家」での就職を志望していることがわかる。それは大学ランクが低いことが大学生の就職に不利なためだと考えられ、ランクの低い大学に農村戸籍の学生が多いことも原因の１つだと考えられる。

表４－１　「どこで就職したいと思うか」と大学との関連（%）

		X 大学（理）	Y 大学（文）	Z 大学（理）	Z 大学（文）	合計
実家**	志望する	39.3	56.3	60.7	72.0	57.2(406)
	志望しない	60.7	43.7	39.3	28.0	42.8(304)
沿岸部*	志望する	58.3	75.9	61.3	66.9	66.1(469)
	志望しない	41.7	24.1	38.7	33.1	33.9(241)
内陸部*	志望する	31.0	19.6	31.0	18.3	24.6(175)
	志望しない	69.0	80.4	69.0	81.7	75.4(535)

注：ｐ＜0.01 は*，ｐ＜0.001 は**として示す。以下同様。

また、沿岸部にある Y 大学の学生は沿岸部での就職を志望している。Y 大学の学生の 75.9%が「沿岸部」での就職を志望するのに対して、X 大学および Z 大学の理系、文系はそれぞれ 58.3%、61.3%と 66.9%であった。それは、Y 大学は沿岸部にあるのに対して、X 大学と Z 大学は内陸部にあることが原因だと考えられる。沿岸部にある大学の学生は沿岸部を志望することから、大学生の就職地希望に対する大学の所在地の影響がうかがえる。地方の大学の学生と大都市にある大学の学生が持つ就職意識の違いも提示されよう。

一方で、専攻による影響も見られた。理科生のほうが、内陸部での就職を志望している。Y 大学と Z 大学の文科生で「内陸部」に志望する大学生は 19.6%と 18.3%であるのに対して、X 大学と Z 大学の理科生はともに 31.0%であった。多元的な経済構造を持つ沿岸部と比べて、内陸部の産業構造は単一で、とくに事務職員などに代表される第三産業が少ない。それは文系の学生が内陸部での就職を避けることが理由だと考えられる。それに対して、内陸部に散在する工場は理系の学生に就職先を提供している。大学生の志望する就職地はその専攻から影響を受けていると考えられる。

では、各大学・専攻の大学生は具体的にどのような就職先を志望しているのか。表４－２は大学生が志望する進路先を大学・専攻別に示している。

表４－２　「どういう進路先を志望するのか」と大学との関連

		X 大学（理）	Y 大学（文	Z 大学（理）	Z 大学（文）	合計
政府**	はい	25.1%	51.3%	34.3%	57.1%	42.5%(302)
	いいえ	74.9%	48.7%	65.7%	42.9%	57.5%(408)
事業単位**	はい	41.3%	66.8%	68.0%	86.3%	65.9%(468)
	いいえ	58.7%	33.2%	32.0%	13.7%	34.1% (242)
国有企業**	はい	64.1%	50.8%	43.8%	44.0%	50.6%(359)
	いいえ	35.9%	49.2%	56.2%	56.0%	49.4%(351)
外資企業*	はい	28.7%	41.7%	33.1%	22.3%	31.8%(226)
	いいえ	71.3%	58.3%	66.9%	77.7%	68.2%(484)
私営企業**	はい	20.4%	23.6%	9.5%	8.6%	15.8%(112)
	いいえ	79.6%	76.4%	90.5%	91.4%	84.2%(598)
進学**	はい	25.7%	42.2%	53.8%	51.4%	43.4%(308)
	いいえ	74.3%	57.8%	46.2%	48.6%	56.6%(402)

X 大学と Z 大学の理科生で、「政府」を志望する大学はそれぞれ 25.1%と 34.3%であるのに対して、Y 大学と Z 大学の文科生は 51.3%と 57.1 %であり、文科生

のほうが政府機関での就職、いわゆる公務員を志望している。

また、政府機関の下請け組織である「事業単位」への志望では、X 大学、Y 大学と Z 大学の理科生は 41.3%、66.8 %と 68.0 である。これに対して、Z 大学の文科生は 86.3%であった。「事業単位」を志望する Z 大学の文科生がほかの大学生と比較してずば抜けて高い値を示したのは、Z 大学の文系に教育系の科目が多く、その学生の教員志望が高いことに原因があると考えられる。

大学ランク順に強まる「事業単位」への志望に対して、国有企業に対する志望は大学ランク順に下がっていく傾向であった。X 大学、Y 大学と Z 大学の理系、文系で、「国有企業」を志望する大学生はそれぞれ 64.1%、50.8%と 43.8%、44.0%であり、ランクの高い大学の学生は国有企業での就職を志望している。国有企業は政府機関や事業単位と同じ国有セクターである一方、公務員試験の成績に左右される公務員試験と違い、大学ランクを重視する一般企業と同様な選抜システムを持っている。つまり、大学ランクが高いほど、国有企業での就職に有利である。それを受けて、ランクの高い大学の学生は国有企業への就職を志望する一方、ランクの低い大学の学生はリスクの高い国有企業へのエントリーを避ける傾向にある。大学生の就職志望は就職先の選抜システムを反映していることが考えられる。

また、大学院進学については、大学ランクが低いほど大学院への進学を志望していることがわかる。X 大学、Y 大学と Z 大学の理系、文系で、「進学」を志望する大学生はそれぞれ 25.7%、42.2%、53.8%と 51.4%であった。それは、大学ランクの低い大学生にとって、大学院進学は敗者復活の手段であるためだと考えられる。大学ランクが低いほど、大学生は進学を志望することは、進学するか就職するかという進路志向にも見られる。

表４－３は表４－２に示した進路先への希望を、「就職するか進学するか」でまとめた「進路志向」における大学･専攻の比較である。そこで、大学生の「就職するか進学するか」という進路の判断に、大学ランクは大きな影響を与えていることがわかる。

表４－３　大学・文理系おける進路志向の分布（%）

	就職のみ志望する	進学のみ志望する	就職と進学の両方を志望する	合計
X 大学（理系）	72.6	2.5	24.8	100.0(157)**
Y 大学（文系）	54.6	4.3	41.1	100.0(185)
Z 大学（理系）	41.3	5.2	53.5	100.0(155)
Z 大学（文系）	47.1	3.5	49.4	100.0(170)

ランクの低い Z 大学の学生で、「就職と進学の両方を志望する」のは文理系それぞれ 49.4%と 53.5%であるのに対して、比較的にランクの高い Y 大学は 41.1%であり、ランクの最も高い X 大学は 24.8%であった。大学ランクの低い大学生は進学を志望する同時に就職を志望していることがわかる。

また、「就職のみを志望する」において、ランクの最も高い X 大学は 72.6%で

あるのに対して、比較的にランクの低いＹ大学は 54.6％であり、ランクの最も低いＺ大学の文理系はそれぞれ 47.1％と 41.3％であった。大学ランクの低い大学生に就職のみを志望する者が少ない。それは、大学ランクの低い大学生が就職に不利な立場にいるため、就職のみを志望することにリスクを感じているためだと考えられる。ランクが低いために生じた就職リスクを抑えるために、ランクの低いＺ大学の学生は、進学と就職を同時に志望していると考えられる。

２　就職先を決める際に重視する項目に対する大学の影響

就職先を決める際に重視する項目に対して、大学または専攻はどのように影響しているかについて分析する。表４－４は「就職先を決める際に何を重視するか」を５段階で聞き、それを「とても重視している」を５、「全く重視していない」を１として算出した平均値を、大学別に示した。その結果、「就職先を決める際に何を重視するか」と大学との関連は部分的、限定的であることがわかる。

表４－４　「就職先を決める際に何を重視するか」と大学との関連

	文系			理系		
	Ｚ大学	Ｙ大学		Ｚ大学	Ｘ大学	
転勤がない	3.43	3.33		3.34	3.84	**
仕事内容が楽である	3.51	3.45		3.43	3.72	*
休日が充実している	4.24	4.20		4.11	4.19	
実家に近い	3.59	3.51		3.54	3.68	
職場の人間関係がいい	4.49	4.43		4.41	4.20	*
経営的に安定している	4.36	4.11	*	4.31	4.00	*
社内競争が激しくない	3.39	3.33		3.44	3.48	
住宅手当がある	4.14	4.31		4.27	4.03	*
保険制度が整っている	4.59	4.47		4.44	4.15	**
戸籍転入の保障がある	3.80	3.84		3.82	3.81	
職場に知人いる	3.88	3.79		3.73	3.82	
職場が大都市にある	3.19	3.45		3.36	3.68	*
収入が高い	4.22	4.24		4.19	4.11	
職場は将来性がある	4.33	4.50		4.40	4.28	
現代的な経営理念が備えられている	4.02	4.25	*	4.15	4.13	
規模が大きい	3.60	3.64		3.70	3.85	
知名度が高い	3.60	3.65		3.60	3.95	**
趣味を生かせる	4.27	4.13		4.16	4.23	
専門領域を生かせる	4.01	3.69		3.81	3.94	
能力や個性が発揮できる	4.35	4.22		4.20	4.09	
職員の機会が平等である	4.39	4.41		4.39	4.07	**
国内出張が多い	3.06	3.28		3.16	3.65	**
国外出張が多い	3.95	4.02		3.96	3.92	
昇進機会が多い	4.05	4.13		4.11	3.98	
社会人としての能力が身につけられる	4.15	4.25		4.24	4.13	
技術を身につけられる	4.16	4.12		4.15	3.98	
多様な職種を体験できる	3.78	3.93		3.83	3.89	
社会地位が高い	3.85	3.71		3.67	3.72	
国への奉仕ができる	3.62	3.69		3.56	3.76	
他人の役に立てる	3.89	3.74		3.68	3.93	*

文系の比較において、大学生の職業の選択基準におけるＺ大学とＹ大学の違いは限定的なものであった。

「経営的に安定している」において、Y 大学は 4.11 に対して、Y 大学は 4.36 であり、Z 大学の文科生は就職先の安定性を重視していることがわかる。それは大学ランクが低いため、Z 大学の学生が就職に不利な立場にいるためだと考えられる。また、Z 大学の学生に農村戸籍者が多いことも、原因の 1 つだと考えられる。

また、「現代的な経営理念が備えられている」において、Y 大学は 4.25 に対して、Z 大学は 4.02 であった。その原因として、Z 大学の 7 割超を占める農村戸籍者のほか、大学の立地の違いも考えられる。つまり、農村に囲まれる小都市にある Z 大学に対して、Y 大学は外資企業の多い沿岸部にある。Y 大学の学生が現代的な経営理念を重視するのは、グローバル化の進む地域にキャンパスがあることによる影響かもしれない。

文系の場合に職業の選択基準と大学との関連が限定的であるのに対して、理系である Z 大学と X 大学の違いは、部分的ではあるが、文系より顕著に示されている。X 大学の学生は高い大手志向や大都市志向、また安楽志向を示しているのに対して、Z 大学の学生は大手志向や大都市志向などより、職場の安定性と機会の平等を重視している。

「職場が大都市にある」において、Z 大学の理科生は 3.36 であるのに対して、X 大学の学生は 3.68 であり、ランクの高い大学生は大都市での就職を志望していることがわかる。また、「職場の知名度が高い」において、Z 大学の学生は 3.60 に対して、X 大学の学生は 3.95 であった。大学ランクが高い理科生ほど、大都市志向、大手志向が高いように見受けられる。

一方で、「保険制度が整っている」において、Z 大学の理科生は 4.44 であるのに対し、X 大学の理科生は 4.15 であり、Z 大学と比べてランクの高い X 大学の大学生は保険制度の完備を重視していないようにうかがえる。また、「住宅手当がある」において、X 大学は 4.03 であるのに対し、Z 大学の理科生は 4.27 であった。Z 大学と比べて、X 大学の理科生は福利厚生をそれほど重視していないことがわかる。そのほかに、「職場の人間関係がいい」「能力や個性が発揮できる」「職員の機会が平等である」においても、X 大学の理科生は Z 大学より重視しないことがわかった。

以上の結果より、ランクの高い大学生は大都市や大手などを重視するが、福利厚生や職場の安定性などをそれほど重視しないように考えられる。それも、Z 大学における膨大な農村戸籍者に原因があると考えられよう。家庭背景による格差は、大学ランクを通じて大学生の就職意識に影響を及ぼしている可能性が推測できよう。

３　就職に対する考え方および取り組みに対する大学の影響

本節では、大学生の就職に対する考え方および取り組みが大学・専攻とどのような関連を持っているかを検討する。

表４－５は大学生の就職に対する考え方を大学・専攻で比較したものである。X 大学の理科生は適職へのこだわりを持ちながら、「給料さえ高ければよい」など軽率な態度を示している。

表４－５　大学・専攻でみる大学生の就職に対する考え方（%）

	文系			理系		
	Ｚ大学	Ｙ大学		Ｚ大学	Ｘ大学	
とりあえず就職して、後で転職する	3.71	3.60		3.68	3.93	
大学院に進学することは就職に有利だ	3.41	3.30		3.51	3.74	
自分が就職意識に問題があると思う	3.06	2.98		2.95	3.47	**
給料さえ高ければよい	2.86	2.78		2.81	3.42	**
農村で就職してもいい	2.61	2.66		2.67	3.35	**
農村での就職はキャリアに不利だと思う	3.05	2.95		3.15	3.40	
体面であることを重視する	3.60	3.35	*	3.57	3.51	
高卒で就職すればよかった	1.99	2.18		2.27	2.85	**
機会があれば起業したい	3.45	3.49		3.35	3.71	*
仕事さえ見つければよい	2.62	2.60		2.67	3.27	**
国の需要に応えるべきである	3.70	3.34	**	3.58	3.92	**
初職を重視する	4.29	4.08	*	4.13	4.15	
適職ではないとすぐに転職する	3.30	3.50		3.29	3.80	**
就職において専攻をいかさなくてもよい	3.62	3.82		3.56	3.82	*

文系の比較では、職業の選択基準における Z 大学と Y 大学の違いは限定的でしかなかった。

「メンツを重視する」ことでは、Y 大学は 3.35 に対し Z 大学は 3.60 であり、Z 大学の文科生は就職の際に「メンツ」を重視している。それは Z 大学に農村戸籍者が多いことが原因だと考えられる。また、「初職を重視する」において、Y 大学は 4.08 に対して、Z 大学は 4.29 であった。そのような違いも Z 大学における 7 割超の農村戸籍者によるものだと考えられる。中国の労働市場の移動は戸籍制度などに制限されているため、農村戸籍者はできるだけ初職で自由度の高い労働市場に参入することを志望する。

職業の選択基準における文系の違いは限定的であるのに対して、理系である Z 大学と X 大学の違いは、部分的ではあるが、文系より顕著である。

「適職ではなかったらすぐに転職する」では、Z 大学の理科生は 3.29 であるのに対し、X 大学は 3.80 であった。X 大学の学生は適職へのこだわりと高い転職志向を示している。

一方で、X 大学の理科生には適職へのこだわりが見られながら、就職に対する軽率な態度もみられる。「給料が高ければよい」では、Z 大学の理科生は 2.81 であるのに対して、X 大学は 3.42 であり、ランクの高い X 大学の学生は就職する際に、給料を最優先に考えているようにうかがえる。また、「仕事さえあればよい」

においても、X 大学の理科生の値（3.27）は Z 大学（2.67）より高い。ランクが高いために、就職に有利だと考えられる X 大学の学生は、就職に対して軽率または消極的な態度を示している。X 大学の学生に見られたこのような軽率な就職態度は、後に述べるような就職意識に対する家庭背景の影響からわかるように、X 大学に家庭背景とりわけ「縁故」に恵まれた大学生が多いことに原因がある。

では、大学生を取り巻く就職状況および就職に対する大学生の取り組みは、大学によってどう異なるのか。表４－６は大学生の就職状況を大学・専攻別に示したものである。そこから、X 大学の学生は就職に自信を持ち、就職の準備に積極的に取り組んでいることが明らかである。

表４－６　大学・専攻でみる大学生の就職状況（%）

	文系			理系		
	Z 大学	Y 大学		Z 大学	X 大学	
期待にプレッシャーを感じている	3.84	3.86		3.82	4.13	**
周囲の目線が気になる	3.68	3.53		3.59	3.85	*
就職について相談相手がいる	3.45	3.19		3.24	3.69	**
（就職に）有力な家庭背景を持っている	2.14	1.97		2.06	3.03	**
はっきりとした進路希望を持っている	2.41	2.39		2.62	1.80	**
情報収集に困惑を感じている	3.07	3.23		3.08	3.40	*
就職費用に困る	3.12	3.05		3.04	3.40	*
意識と現実とのギャップに心配である	3.53	3.51		3.44	3.64	
就職準備に困っている	3.03	2.75	*	2.65	3.55	**
就職後の生活についてイメージできる	3.14	2.91		2.97	3.53	**
就職に自信がある	3.19	2.97		3.23	3.74	**
就職支援を受けている	3.07	2.62	**	2.98	3.57	**
就職について調べている	3.20	2.91	*	3.00	3.65	**
就職について技術を磨いている	3.53	3.37		3.29	3.67	**
就職についていろいろ考えている	3.48	3.41		3.39	3.70	*

就職状況においても、文系より理系の２大学に大きな差が見られた。Y 大学と Z 大学に大学ランクの差があるが、その大学生の就職意識に大きな違いが見られないのは、2 大学がともに大学 100 位以降の中堅大学であるためだと考えられる。つまり、大学ランクの差より、「211 プロジェクト」などに編成されたいわゆる重点大学であるかどうかによって、大学生の就職意識に影響を与えていると考えられよう。

「就職に自信がある」において、Z 大学の理系は 3.23 であるのに対して、X 大学は 3.74 であり、X 大学の学生は就職に高い自信を持っている。

また、「家庭背景に恵まれている」において、Z 大学の理科生は 2.06 であるのに対し、X 大学は 3.03 であった。ここでいう「家庭背景」は、中国では家族や親族に政治的権力を持つものがいることを意味している。とくに就職状況を前提とするここの項目は、就職に生かす「コネ」や人脈があることを意味すると考えられる。大学の選抜性により、X 大学の学生に「縁故」に恵まれた大学生が多いと考えられる。

さらに、X 大学の学生は家庭背景や大学ランクに恵まれるだけでなく、ランク

の低い大学より積極的に就職準備に取り組んでいる。「就職について調べている」において、Z 大学の理科生は 3.00 であるのに対して、X 大学は 3.65 であり、X 大学の学生は就職について積極的に調べていることがわかる。そのほかに、X 大学の学生の就職に対する積極的な取り組みは、「就職について技術を磨いている」ことや「就職についていろいろ考えている」ことにもみられる。就職に対して軽率または消極的な態度を示す一方、X 大学の学生は就職準備に積極的であることが明らかになった。

X 大学の学生は就職準備に積極的であるのは、大学による就職支援との関連が考えられる。「就職支援を受けている」において、Z 大学の理科生は 2.98 であるのに対して、X 大学は 3.57 であり、X 大学の学生に就職支援を受けている者が多い。就職支援と大学生の就職意識、就職行動との関連について検討する必要がある。

表４－７は「どの就職ルートが有利だと思うか」における専攻・大学間の比較である。大学による説明会の開催について、大学ランクの低い大学生は評価していないことがわかる。

表４－７「どの就職ルートが有利だと思うか」における大学比較

	文系			理系		
	Z 大学	Y 大学		Z 大学	X 大学	
大学による企業説明会	3.76	4.02	*	3.74	4.34	**
政府による企業説明会	3.57	3.64		3.48	3.96	**
会社訪問	3.84	3.95		3.78	3.78	
家族や知人の紹介	4.16	4.21		4.19	3.93	*
インターネットの利用	3.19	3.28		3.12	3.70	**
大学の就職機関による紹介	3.63	3.84		3.73	3.87	

「大学による企業説明会」の就職ルートとしての機能は、文理系を問わずランクの低い Z 大学の学生による評価が低い。文系では、Y 大学は 4.02 に対して、Z 大学は 3.76 である。理系では、X 大学は 4.34 に対して、Z 大学は 3.74 であった。それは、大学が開催する企業説明会に参加する企業が、大学ランクによって大きく異なるためだと考えられる。

一方で、「家族や知人の紹介」は Z 大学の理科生に大きく評価されている。「家族や知人の紹介」において、X 大学の理科生は 3.93 であるのに対して、Z 大学は 4.19 であった。それに対して、文系の比較では、Z 大学と Y 大学の文科生はそれぞれ 4.16 と 4.21 であり、有意の差が見られなかった。それだけでなく、文系の２大学の値は Z 大学の理科生との差は大きなものではなかった。つまり、ランクの高い X 大学の学生はほかの大学生と比べて、「縁故」による就職をそれほど評価していない。就職に有利であるランクの高い大学の学生は、「縁故」に頼らない自信を持っていると考えられる。そのため、家族や知人の紹介という「縁故」より、X 大学の理科生はインターネットの利用や企業説明会の参加による就職を評

価している。

以上の検討から、大学生の就職意識における大学ランクや専攻、または大学の所在地の影響だけでなく、家庭背景による影響の可能性も示唆された。では、大学生の就職意識の規定要因にどういうものが考えられるのか。次節では、大学生の語りから就職意識の規定要因を探索的に検討したい。

第２節　「語り」からみる就職意識の規定要因

本節では、中国の地方における大学生の就職意識の規定要因を、大学生の語りから探り、分析の視点を探索する。

１　キャンパスライフとの関連

キャンパスにおける「能力のある」大学生は、就職にも強いことが、聞き取り調査の結果から示されている。ここでＪさんの語りを示す。

＊：就職についてどう考えているの？

Ｊ：やはり教員試験を受けるね。文学部って、就職口が多いとか言われるけど、そう、教師とか秘書とか、記者とか、編集者とかね。まあ、記者とかって確かになる人がいるよ。ん…Ｎさんみたいに、ほら、ずっと新聞社で実習していて…ああいう能力のある人って（記者などの職業）に就くね。自分のような何の能力もない人って、記者になんて…ほど遠いよ。「どうしようもない」でもなかったら、（記者などに）チャレンジしたくないというか…たぶんみんながそうなのだから、教員を志望するね。…（教員って）まだイメージできるから。安定しているかどうかじゃなくて、分からないけど…なんとなく記者ではなくて、どこかが教員を募集しているかなって（気になる）。たぶん、だから一般人は一般人だよね…いろいろ（な進路が）あるのに、普通の人はやはり女子は教師ね（と考える）。　（2013/2/20）

文学部の就職口が多いにもかかわらず、Ｊさんは教員になることしか就職のイメージができないと述べている。身近の職業しかイメージできず、それを就職希望にすることは、固定観念にとらわれた「普通の人」のやり方だとＪさんが考えている。それに対して、固定観念から抜け出せる者、つまり幅広い職業にチャレンジしようとする者は「能力のある」人のみだという。

Ｊさんは、そのような「能力のある」人として、大学での同級生のＮさんを例に挙げた。そこで、Ｎさんは大学時代から新聞社での実習に積極的に取り組み、記者などメディア関連の就職を希望し、就職活動に取り組んでいる。それに対して、Ｊさん自身は、サークルや実習に参加したいにもかかわらず、常にその情報を掴められず、そのうえに、女性は教員になるという「普通の人」の固定観念に

とらわれている。つまり、「能力のある」人は就職意識だけでなく、キャンパスライフにおいてもしっかりと取り組んでいるのに対して、「普通の人」はキャンパスライフと就職のいずれもうまくできないと語られている。

J さんの語りからみられたキャンパスライフと就職に対する大学生の「能力」の一貫性は、K さんなど、ほかの調査対象の語りにも見られた。K さんはそのクラスメートであるＳさんの事例を紹介した。学習や大学生活に対してそれほど熱心ではないにもかかわらず、S さんは成績がいいうえに、大学では教員と「仲」がよく、友だちも多いという「能力のある」人だと、K さんは述べている。さらに、S さんは能力があるだけでなく、「有力者」の親によって就職にも困らないとのことであった。

以上の語りより、大学生がとらえる「能力のある人」に２つのパターンが示されている。１つのパターンとして、キャンパスライフに積極的に取り組み、就職においてもしっかりした就職ビジョンを持っている、いわゆる「しっかりもの」の大学生である。もう１つは、キャンパスライフや就職に必ずしも積極的に取り組むとは限らないが、大学への適応が高く、就職に有利な大学生である。主体性はともかく、キャンパスにおける「人気者」は就職にも強いと、キャンパスライフと就職との関連は、大学生から捉えられている。それは、先行研究に指摘されてきたように、大学生の成績や社会経験などの業績要因の就職に対する影響なのか。また、大学生の就職にそのようなキャンパスライフはどのように影響を及ぼしているのかについて、検討する必要があろう。

２　家庭からの意識の継承

表３－１０から、大学生は就職する際に「メンツ」を重視することがわかる。つまり、大学生が職業の選択に世間の風評を重視する。そのような世間の風評を重視する傾向は、大学生に対する聞き取り調査からも顕著に見られる。

世間の風評を職業選択の基準とする大学生の姿を示すのは、K さんの例がある。農村部出身の K さんは、就職において親の「メンツ」を立てることを強く意識していることがわかる。小学教員の仕事を楽で楽しいと考えながら、K さんは高校教員を志望することにした。それは小学校の教員になるより、高校の教員になることは「聞こえがいい」からである。つまり、K さんは世間の風評を強く意識している。さらに、世間の風評に対する K さんの重視は、親の「メンツ」への配慮によるものだと考えられる。つまり、世間の価値観を重視することは、親の期待に応えることに等しい。「親に恩返しするために」就職するという大学生の価値観にみられた、大学生の就職意識に対する親の期待の大きな影響力はここにも示されている。

世間の風評ならびに親の期待は、大学生の就職意識に大きな影響を与えている

と考えられよう。下の語りはそのことを如実に示している。

K：高校の（教員になるの）がいい。教師をやるなら、給料が少なくてもいいけど、見栄っ張りだけど、高校の教師って聞こえがいいよ。メンツがあるしね。小学校はね、小学生はかわいいし、先生と仲いいし、楽といえば楽だけど、小学の教師って言われたら、なんか…（笑い）
J：よくあるね。農村でね、実家に帰ったらね、「卒業した？どんな仕事しているの？」って聞かれたら、小学校と高校って、響きがずいぶん違うね。それを言う親の顔も全然違う。だから、みんな気になるよね。
J：実はやせ我慢だとわかっているよ。小学生を教えるのって癒されるし、いいじゃないの。でも、聞こえがね、大卒で小学校に行くって…親のメンツがね…　（2013/2/20）

また、K さんの語りから、中国、とくに地方の農村部における仕事の格付けがわかる。同じく国有セクターに配属する教員でも、小学校より高校の教員になることは「メンツ」を保つことだと考えられている。それに対して、大卒で小学校の教員になることは「メンツ」をつぶすことだと考えられている。仕事に対するこのような格付けは、大学生の就職意識が問題視されてきた原因の１つだといえよう。

世間の風評または親の「メンツ」を重視する大学生の傾向は、M さんの語りにも示されている。

M：（就職で目指すもの）男なら自己成就のチャンスかな…
*：それは具体的にどうものを指すの？
M：大量のお札とか…（笑い）功利的だけどさ、実家に帰ったら、とくに田舎ではね、何が評価されるかというと、どんな仕事しているかや、どんな高い地位かより、どのくらい稼ぐかだ。　（2013/2/19）

功利的だと考えながらも、M さんは個人達成を「大量のお札」によって測られると考えている。それは、田舎にある M さんの実家では、仕事の内容や個人の社会地位よりも給与が評価されるためであった。

K さんと同様、M さんも実家の価値観を就職の基準としている。また２人とも、自らの継承した就職意識に問題があると考え、その問題に対する自明性を強調している。K さんは小学校の教員より高校の教員を志望することについて、「見栄っ張りだけど」と語っている。同様に、M さんも収入を重視することについて、「功利的だけど」と、自らの意識の問題を認識しているように語っている。そのように大学生が自らの就職意識を批判的にとらえるのは、大学生の就職意識の問題に対する国や世論の非難によるものだと考えられよう。しかし、公的な批判を意識しながらも、大学生は世間や家族の評価を重視し、家庭環境から継承した就職意

識を維持している。

以下の語りは、大学生が家庭から就職意識を継承するプロセスを表す一場面である。

K：いくら稼いでも、やっぱり安定した仕事がないと。保障さえあれば心強い。結婚する時も聞こえがいいって、母はすごく現実的に言うね、だから、今年の夏休みはすごくショックを受けて、絶対安定した仕事に就くって。…

*：もともとはそうじゃなかったの？

K：もともとも教員になろうと思っていたけど、ならなくても大丈夫だと思っていた。でも、今は絶対なると。…それで、安定した仕事についてね、また自分で起業しようと、ずっと自分の塾を作りたかったの。絶対自分のやりたいことをやる。（2013/2/20）

Kさんは、兄の交際相手に対する親の期待を通して、国有セクターに参入することは将来の結婚に繋がると教わった。そのような経験は、Kさんの教員志望をさらに強固なものにした。

Kさんは教員志望であるが、それに対するこだわりがなく、国有セクターへの志望もそれほど強いものではなかった。しかし、兄の交際対手が国有セクターに配属されていないために親が２人の結婚を許さなかったことに、Kさんは衝撃を受けた。それを通して、Kさんは、国有セクターに就職することを決意したという。

しかし､親の価値観を継承し国有セクターに就職することを決意したKさんは、自らの夢である学習塾の創業を放棄したわけではない。むしろ、国有セクターでの安定した就職を保障に､「自分のやりたいことをやる」と考えている。Kさんの語りから、家族から継承した価値観と、自らのキャリア志向との両立を図ろうとする大学生の姿がうかがえる。

以上の検討から、大学生の就職意識はその家庭環境、とくに親の価値観から影響を受けていることがわかる。また、大学生は親から継承された就職の価値観を重視しながら、自らのキャリア志向との両立を図り、キャリアビジョンの再構成を行っていると考えられる。つまり、大学生の就職意識に対する出身背景と大学での経験の双方からの影響が考えられる。

３　家庭状況からの影響

上述した家庭環境からの価値観の継承のほか、家庭の経済状況や社会地位からの大学生の就職意識への影響も考えられる。それは農村出身のMさんと都市出身のIさんの語りの違いからうかがえる。

M：仕事なら…今のところはそんなにプレッシャーに思っていないから、

仕事に対してもそんなにこだわることもないしね…とりあえずいろいろ（なところを）まわって経験してみたい、まあ、少なくとも外で 2，3 年間見て回る余裕はあるかな…あっちこっちに。外で回っている間に、なんか掴めないかなって …個人成就の機会を…

*：どこに行くって考えていない？

M：あっちこっち、とくにはっきりした目標がないけど…

*：どう見て回るの？

M：できるだけ、ある仕事を見つけて、社会人になるように鍛えてもらうかな…まあ、余裕があるって言っても、いつか親に呼び戻されるかもしれないし…ちっちゃい妹もいるのだから…　（2013/2/19）

＊＊＊

I：司法試験に受からなかったらね、就職するかも。まあ、就職するならいいところに就きたいよ。急がないし…家からのプレッシャーがないから。

*：いいところってどんなところですか。

I：まあ、こう、人に尊敬されるような、地位の高い…国有企業とかね。…まあ、母が、ある仕事を確保してくれたっていうか…とにかくあれよりいいところをね。　（2013/2/21）

M さんと I さんはともに大都市での就職を志望している。またその理由について、２人とも家庭に経済的な余裕があるからと述べている。しかし、I さんと違い、M さんの余裕は期限付きのものでしかない。2，3 年間の余裕があると言いながらも、M さんはいずれ親に呼び戻されると述べている。それは、幼い妹を持つ M さんは、長男として実家を支えることが期待されているためであった。

また、I さんと M さんの違いははっきりした就職意識を持っているかどうかにもある。I さんははっきりした就職基準を持っているのに対して、M さんの都市進出の夢は曖昧なものであった。M さんは公務員試験を受けると言いながら、受からない場合「2，3 年間見てまわる」ことを考えている。また、仕事に対してもはっきりした志望がなく、漂流によって何かを「掴め」ることを考えている。

就職のイメージを掴めない M さんに対して、I さんは母親を通して就職先を確保したうえに、それを担保に、さらにいいポストを目標としている。I さんは経済的に恵まれ、余裕を持って就職活動に取り組むだけでなく、親の「縁故」を通してはっきりした就職ビジョンを形成していた。大学生の就職ビジョンの形成に対する「縁故」の影響がうかがえる。

そのほか、M さんと I さんの就職意識の違いは、就職に対するこだわりにもみられる。I さんが仕事の社会地位を重視するのに対して、M さんは仕事に対して「こだわることがない」と語っている。つまり、M さんは曖昧な就職希望による「漂流」を考えているのに対して、I さんは親の「縁故」によって最低限の就職先を確保でき、それを基準によりよいポストを希望し、社会地位の獲得を目標としている。家庭環境からの価値観の継承のほかに、「縁故」や経済資本などという

家庭背景が大学生の就職意識に対して影響を与えていることも考えられよう。

大学生に対する聞き取り調査では、大学生の就職意識に対する家庭背景の影響が示唆された。家庭環境や経済資本のほか、「コネ」という「縁故」の影響も多くの調査協力者に言及された。次節では、「縁故」を含む大学生の家庭背景が就職意識に与える影響について検討する。

第３節　家庭背景の影響

本節では中国の地方における大学生の就職意識の規定要因を、とくに家庭背景の視点から検討する。なお、本章では、「縁故」と区別するために、親の学歴や所得、職業、および戸籍という中国の研究の中で社会階層として一般的に用いられてきた資本を「社会階層」と呼ぶ。「縁故」と社会階層をそれぞれ異なる意味を示す変数として相対的に区別することによって、家庭背景における中国特有の側面を捉えることを試みる。

１　就職先を決める際に重視する項目に対する家庭背景の影響

まず、表４－８により就職先を決める際に重視する項目に対する家庭背景の影響について分析しよう。この表は「就職先を決める際に何を重視するか」を５段階で聞き、それを「とても重視している」を５、「全く重視していない」を１として算出した平均値を社会階層別に示したものである。紙幅の都合上、有意な関連が見られた項目のみを表に示した。この表から「就職先を決める際に何を重視するか」への社会階層の影響が部分的、限定的であることがわかる。

表４－８　社会階層と「就職先を決める際に何を重視するか」との関係

		職場が大都市にある	知名度が高い	保険制度が整っている	経営が安定である	機会が平等に与えられる	住宅手当がある	職場に知人いる	規模が大きい
母職業	管理･専門職	3.70**	3.94**	4.30*	4.07*	4.20*	4.13	4.00**	3.89**
	その他	3.30	3.61	4.46	4.25	4.38	4.33	3.72	3.62
父職業	管理・専門	3.61**	3.84*	4.35	4.11	4.24*	4.12	3.94*	3.80
	その他	3.29	3.61	4.47	4.25	4.38	4.24	3.72	3.63
母学歴	中卒以下	3.31**	3.63	4.48*	4.26	4.39*	4.25	3.76	3.62
	高卒	3.54	3.78	4.32	4.06	4.18	4.07	3.82	3.77
	大卒以上	3.76	3.91	4.26	4.14	4.34	4.11	4.05	3.93
父学歴	中卒以下	3.31	3.63*	4.48	4.27	4.42	4.30*	3.80	3.61
	高卒	3.49	3.67	4.37	4.16	4.26	4.13	3.80	3.73
	大卒以上	3.55	3.93	4.33	4.08	4.25	4.07	3.86	3.82
母収入	1000 以下	3.26*	3.62	4.46*	4.32**	4.39	4.22	3.74	3.62
	1000～3000	3.52	3.77	4.44	4.12	4.31	4.22	3.86	3.76
	3000～	3.61	3.93	4.17	3.96	4.15	3.97	3.96	3.86
父収入	1000 以下	3.18*	3.65	4.49	4.32	4.41	4.16	3.73	3.61
	1000～3000	3.46	3.71	4.42	4.18	4.30	4.23	3.82	3.71
	3000～	3.54	3.76	4.34	4.13	4.28	4.12	3.91	3.80
戸籍	都市	3.67**	3.91**	4.36	4.06	4.23	4.08	4.04**	3.85*
	農村	3.33	3.62	4.42	4.24	4.35	4.23	3.71	3.64

母親の職業が管理・専門職の大学生で、「保険制度が整っている」の値が 4.30 であるのに対し、そうでない大学生は 4.46 であり、母親の職業が管理・専門職ではない大学生のほうが福利厚生を重視することがわかる。また、母親の職業が管理・専門職の大学生で、「経営が安定である」「(昇進などの) 機会が平等に与えられる」の値はそれぞれ 4.07 と 4.20 であるのに対して、そうでない大学生は 4.25 と 4.38 と、より高い値を示している。社会階層の低い大学生は福利厚生や安定性、平等性の保障を求めるのは母職業以外の項目にも見られている。母親の職業が管理・専門職である大学生は「職場が大都市にある」と「規模が大きい」においてそれぞれ 3.70 と 3.89 であるのに対して、そうでない大学生は 3.30 と 3.62 とより低い値を示している。母親の職業が管理・専門職である大学生の大手志向と大都市志向が比較的に高いものだと言えよう。社会階層の高い大学が大手、大都市志向が高いのは母職業以外の項目においても多々見られている。

また、管理・専門職の親を持つ大学生は「職場に知人がいる」ことを重視しており、社会的ネットワークが利用可能な職場環境を求めているのに対して、そうでない大学生は「(昇進などの) 機会が平等に与えられる」を重視している。親の職業はその社会的権力に関連するため、「縁故」を強化する重要な要因となっている。それゆえ親の職業が職場での社会的ネットワークに対する態度を左右していると考えられる。

就職先を決める際に重視することにおいて、社会階層による影響は部分的に見られたが、全体的に見ると非常に限定的であり、先行研究と同様の結果を示した。それでは、本研究が着目する家庭背景の別の側面、すなわち「縁故」は大学生の就職意識とどのような関係にあるだろうか。

表４－９では、就職先を決める際に重視することにおける「縁故」の影響について検討した。「縁故」は社会階層より多くの項目で関連を示している。

「コネを持っている」「有力な家庭背景を持っている」大学生は「職場が大都市にある」と「規模が大きい」などという大手・大都市志向、また「職場に知人がいる」ことを重視していることがわかる。表４－８から母職業が管理・専門職など、社会階層の高い大学生は大手志向、大都市志向が高く、職場に知人がいることを重視する結果が得られた。「縁故」は社会階層と同様な結果を示している。ただし、「縁故」は「社会的地位が高い」「収入が高い」などにも関連を示し、社会階層より「大手志向」を顕著に示していると言えよう。

また、「コネを持っている」と考える大学生で、「仕事内容が楽」は 3.68 であるに対して、そうでない大学生は 3.41 だと低い値を示している。それ以外にも、かれらは「転勤がない」「実家に近い」「社会競争が激しくない」を重視し、「コネを持っている」大学生の安楽志向が比較的に高いものだとわかった。また、表からわかるように、「有力な家庭背景を持っている」にも「コネを持っている」と同様

に安楽志向が見られている。

表４－９　「縁故」と「就職先を決める際に何を重視するか」との関係

コネを持っている				有力な「家庭背景」を持っている			
	当てはまる	当てはまらない			当てはまる	当てはまらない	
転勤がない	3.65	3.35	**	転勤がない	4.25	3.28	**
仕事内容が楽	3.68	3.41	*	仕事内容が楽	4.04	3.38	**
職場に知人いる	4.02	3.66	**	職場に知人いる	3.98	3.70	**
職場が大都市にある	3.69	3.23	**	職場が大都市にある	3.84	3.27	**
規模が大きい	3.88	3.54	**	規模が大きい	4.03	3.58	**
知名度が高い	3.95	3.49	**	知名度が高い	4.04	3.57	**
国内出張が多い	3.50	3.10	**	国内出張が多い	3.81	3.10	**
社会的地位が高い	3.94	3.58	**	社会的地位が高い	3.98	3.64	*
国への奉仕ができる	3.77	3.54	*	国への奉仕ができる	3.91	3.60	*
戸籍転入の保障がある	3.96	3.70	*	実家に近い	3.99	3.42	**
収入が高い	4.29	4.12	*	社内競争が激しくない	3.69	3.32	**
現代的な経営理念	4.25	4.04	*	保険制度が整っている	4.19	4.50	**
国外出張が多い	4.10	3.88	*	職場は将来性がある	4.19	4.43	*
多様な職種を体験できる	3.97	3.75	*	専門領域を生かせる	4.08	3.82	*
				機会が平等である	4.19	4.40	*

※網掛け部分は両指標で同様な傾向を示す項目である

一方、「有力な家庭背景を持っている」と考えていない大学生は「保険制度が整っている」「（昇進などの）機会が平等に与えられる」など、表４－８で示した社会階層の低い大学生と同じように安定、平等を重視する結果が見られている。

また、職場の安定・平等だけではなく、かれらは「職場は将来性がある」ことを重視していることも見られた。「有力な家庭背景を持っている」大学生で、「職場は将来性がある」の値は 4.19 であるのに対して、そうでない大学生は 4.43 であった。出身家庭が社会的権力を持っていないと考えている大学生は、自らのキャリア形成を職場の将来性によって実現しようと考えているようにみえる。

以上の分析結果でわかるように、コネを持っているという大学生は大手志向だけでなく、安楽志向や奉仕志向も高い。また、「有力な家庭背景を持っている」と考えていない大学生は就職先の安定、平等や福利厚生の充実のほか、職場の将来性も重視している。

「縁故」を持つ大学生のさまざまな就職条件に対する志望から、かれらは「個人」の精神的満足感を求めるために、就職を手段化しているようにみえる。それに対して、「縁故」を持たない大学生は個人のキャリアを職場の環境や将来性に依託する姿勢がうかがえる。それは職場、とくに国有機関であるかどうかが個人の社会的地位を大きく規定する（園田，2001）ことに原因があると考えられる。出身家庭から「縁故」を相続できない大学生たちは、個人を平等に扱い、安定しており将来性のある職場に参入することによって、社会的地位を達成しようとしている。

２　就職先に対する志望における家庭背景の影響

上述した分析から、「縁故」の有無は大学生が就職先を決める際に重視することに大きな影響を与えていることがわかった。では、その影響は大学生の就職先の志望にも見られるだろうか。表４－１０によりどこに就職したいかへの家庭背景の影響を検討しよう。

表４－１０　「卒業後、どこに就職したいか」における家庭背景の影響（％）

		父親の職業			コネを持っている			有力な家庭背景を持っている		
		管理・専門職	その他		当てはまる	当てはまらない		当てはまる	当てはまらない	
事業単位	はい	60.3	69.6		58.1	72.2	**	50.4	70.4	**
	いいえ	39.7	30.4		41.9	27.8		49.6	29.6	
	合計	100.0(292)	100.0(405)		100.0(265)	100.0(385)		100.0(119)	100.0 (443)	
政府	はい	42.5	41.9		43.4	43.6		34.5	45.4	
	いいえ	57.5	58.0		56.6	56.4		65.6	54.6	
	合計	100.0(292)	100.0(405)		100.0(265)	100.0 (385)		100.0(119)	100.0 (443)	

社会階層の各項目はいずれも就職先に対する希望と有意な関連が見られなかったため、ここで父親の職業だけを表に示した。「縁故」、すなわち「コネを持っている」と「有力な家庭背景を持っている」において、「事業単位」で有意な差が見られたが、就職先の希望のほかの項目との関連が見られなかった。就職先に対する志望に家庭背景の影響が限定的なのは、王（2005）の研究も同じである。それは、中国における私有と国有という産業構造の分断化に原因があると考えられる。中国では国有セクターは就職先として絶対な優勢を持っているのに対して、私有企業の雇用システムの未熟さが指摘される（馬　1998，李　2011 など）。そのため、国有セクターでの就職に対する志望、また私有企業での就職に対する無関心は家庭背景と関係なく、大学生の共通なものになっていると考えられる。事業単位に有意な差が見られたのは、階層の低い大学生が多く所属する Z 大学[1]が師範大学であるため多くの学生が教員志望であったことに原因があると考えられる。

ただし、国有セクターという多くの大学生に共通する希望の職業に就職できる者はごく限られている。そのような希望する就職先に就けない場合の大学生の対応に、家庭背景はどのように影響しているのだろうか。次に表４－１１により希望する職業に就けない場合の進路志望への家庭背景の影響を分析し、就職先の志望についてさらに分析しよう。

社会階層のうち、父親の職業による影響が最も強く見られた。ほかに影響が見られた指標はそれとほぼ同じ結果を示しているため、父親の職業だけを表に示した。

希望する職業に就けない場合、父親の職業が「専門・管理職」の大学生で、「起業する」の値が 3.26 に対して、そうでない大学生は 2.97 であった。また、「進学する」においても、父親の職業が「専門・管理職」の大学生のほうが志望していることがわかった。さらに父親の職業が「専門・管理職」の大学生は、希望する

職業に就けなかったら、「ニートになる」と考えている者も比較的に多く見られている。

表４－１１　家庭背景と「希望する職業に就けない場合の進路志望」との関連

	父親の職業			コネを持っている			有力な家庭背景を持っている		
	管理・専門職	その他		あてはまる	あてはまらない		あてはまる	あてはまらない	
ニートになる	2.04	1.54	**	1.95	1.57	**	2.87	1.43	**
とりあえず就職する	3.58	3.77	*	3.7	3.66		3.75	3.73	
就職基準を下げる	3.62	3.76		3.73	3.69		3.78	3.74	
進学する	3.81	3.59	*	3.77	3.61	**	4.05	3.58	
起業する	3.26	2.97	**	3.39	2.85	**	3.59	2.92	**
貧困地区の支援活動をする	2.95	3.05		3.15	2.88	*	3.38	2.92	**
就活方法を変える	3.47	3.32		3.57	3.23	**	3.77	3.29	**

また、父親の職業が「管理・専門職」の大学生で、「とりあえず就職する」の値が 3.58 であるのに対して、そうでない大学生は 3.77 であり、父親の職業が「管理・専門職」の大学生の「大胆さ」に対して、現状を甘んじるという「穏当」な姿勢を見せている。

「コネを持っている」または「有力な家庭背景を持っている」と考えている大学生は「起業する」「ニートになる」を志望することで父職業と同じ結果を示している。それ以外にも、「縁故」を持つ大学生が「貧困地区の支援活動をする」を志望するなど、さらに多くの項目との関連を示している。

希望する職業に就けない場合の進路希望において、「縁故」による影響は父職業よりわずかながら顕著に見られるが、両者はほぼ同じ傾向を示していることがわかる。それは父職業がその「縁故」の所有と大きく関わっていることに原因があると考えられる。

３　キャリアに対する考え方における家庭背景の影響

では、上述した就職に対する志望の背景にはどのような考え方があるのだろうか。次に表４－１２によりキャリアに対する考え方における家庭背景の影響について検討を行う。

表４－１２　「縁故」と「卒業後のキャリアについていかに考えているか」との関係

	コネを持っている			有力な家庭背景を持っている		
	当てはまる	当てはまらない		当てはまる	当てはまらない	
大学院に進学することは就職に有利だと思う	3.63	3.35	**	3.89	3.34	**
給料さえ高ければよい	3.10	2.81	*	3.55	2.77	**
農村に就職してもいい	2.90	2.69	*	3.46	2.70	**
農村で就職するのはキャリアに不利だと思う	3.22	3.02		3.60	2.96	**
機会があれば、起業したい	3.69	3.34	**	3.80	3.43	*
仕事さえ見つければいい	2.87	2.62	*	3.37	2.60	**
適職ではないとすぐに転職する	3.62	3.35	**	4.03	3.33	*

「卒業後のキャリアについていかに考えているか」において、社会階層による

影響は全く見られなかった。その一方で、「縁故」との関連は顕著に観察された。「農村で就職するのはキャリアに不利だ」では「有力な家庭背景を持っている」と考える大学生の値が 3.60 であるのに対して、そう考えていない大学生は 2.96 であり、「有力な家庭背景を持っている」と考える大学生のほうが農村での就職が自らのキャリアに不利だと考えている。しかし、一方では、「有力な家庭背景を持っている」と考える大学生で、「農村で就職してもいい」の値が 3.46 であるのに対して、そう考えていない大学生は 2.70 であった。「縁故」を持つ大学生はリスクを認識しながらもそれほど強く回避しようとはしない姿勢が窺える。

また、「仕事さえ見つければいい」や「給料さえ高ければいい」においても、「有力な家庭背景を持っている」と考える大学生が示す値はそうでない大学生より高い。「縁故」を持つ大学生は就職することを大胆かつ軽率に捉えているようにうかがえる。

一方で、「適職ではなかったらすぐに転職する」において、「有力な家庭背景を持っている」大学生は 3.89 であるに対して、そう考えていない大学生は 3.34 であった。「縁故」を持つ大学生は就職することを軽率に捉え、高い転職志向を示しながらも、適職にこだわりを持っている。それは表 7 で見られた就職を個人の精神的満足のための手段とした傾向を裏付けるものだと言えよう。また、就職に対する軽率な態度は希望する職業に就けない場合の対応に見られた「大胆さ」とも一致しているように見受けられる。

そのような「大胆さ」は、労働市場を自由に移動する特権に原因があると考えられる。中国では労働市場が都市と農村、また国有と私有によって分断化され、市場移動に膨大なコストを要する（賴　1996）。そのような未熟な市場構造は「縁故」が機能する土壌を提供した（鄧　2004）反面、「縁故」はそのような労働市場を自由に移動する「便宜」を提供している。つまり、「縁故」を持つ大学生の「大胆さ」と「縁故」を持たない大学生の「穏当さ」という就職に臨む姿勢の違いは、労働市場を自由に移動するための資本の有無によって生じたものだと考えられる。

4　キャリア志向における家庭背景の影響

最後に、大学生のキャリア志向における「縁故」の影響を分析する。

回帰分析に用いる説明変数は表４－１３で示す。おもに個人属性と家庭背景および就職意識を示す変数を説明変数として設定した。そのうち、家庭背景として戸籍、父親の職業や月収、学歴および「縁故」を投入する。また、父親の職業や月収、学歴をダミー変数として扱い、「縁故」は前述の通り「コネを持っている」と「有力な家庭背景を持っている」の合成変数を用いる。また、中国の大学は専門性教育を主としているため、大学での学びと強い関連性が考えられる「専門領域を就職に生かせる」（5 段階）の項目を、就職意識を示す変数として投入する。

なお、このモデルは５章の大学生活の規定要因に対する回帰分析にも適用する。

表４－１３　独立変数の説明

属性	X 大学ダミー（X 大学＝1，他大学＝0） Y 大学ダミー（Y 大学＝1，他大学＝0） 性別（男性＝1，女性＝0） 文理系（文系＝1，理系＝0） 学年（4 年生＝1，3 年生＝0）
家庭背景	戸籍（都市＝1，農村＝0） 父親の職業ダミー（専門・管理職＝1，専門・管理職ではない＝0） 父親の月収ダミー（1000 元超＝1，1000 元以下＝0） 父親の学歴ダミー（高卒以上＝1，中卒以下＝0） 「コネを持っている」４段階 「家庭背景に恵まれている」５段階
就職意識	「コネは就職に重要である」４段階

表４－１４はキャリア志向を示す項目に対した因子分析の結果を示している。因子の解釈について、第１因子は地位や家族名誉などという出世志向を示す項目に構成されているため、「出世」と称することとした。第２因子は、家族の扶養や経済の自立の質問から構成されており、また経済的自立は家族の扶養に直結するため、まとめて「自立と家族への貢献」とみなした。第３因子は人間として成長することや人生の充実、また社会への貢献を示す項目から構成されているため、「個人の成長と社会貢献」と名付けた。これらを従属変数として回帰分析を行う。

表４－１４　キャリア志向変数の因子分析

	出世	自立と家族への貢献	個人の成長と社会貢献
地位名声のため	.700	-.072	.027
家族名誉のため	.617	.011	-.068
金持ちになるため	.542	.006	-.009
親に恩返しのため	.044	1.001	-.023
経済自立のため	-.085	.479	.053
人間として成長するため	-.020	-.010	.612
人生を充実するため	-.068	.035	.558
社会に貢献するため	.254	.034	.340

因子抽出法: 最尤法　回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法

表４－１５から表４－１７は大学生のキャリア志向の規定要因を示している。大学生のキャリア志向における「縁故」の影響が大きいことがわかる。

「出世」志向において、自らを「コネを持っている」ほうだと考える大学生ほど、就職に「出世」を志望する。また、戸籍による影響も見られた。都市出身者は「出世」を志望している。「縁故」だけでなく、家庭環境も大学生の出世志向を助長する一要因である。

表４－１５　「出世」因子の規定要因（基準＝Z大学）

	モデル１		モデル２		モデル３		モデル４		モデル５	
	B	β	B	β	B	β	B	β	B	β
(定数)	-.203	+	-.093		-.370	*	-.410	*	-.657	*
X 大学ダミー	-.064	-.033	-.055	-.029	-.073	-.038	-.091	-.048	-.082	-.043
Y 大学ダミー	-.058	-.031	-.047	-.026	-.062	-.034	-.054	-.029	-.051	-.028
男性ダミー	.178	.105+	.189	.112+	.156	.092	.155	.092	.159	.094
文系ダミー	.134	.081	.144	.087	.153	.093	.156	.095	.150	.091
4 年生ダミー	.062	.037	.061	.037	.080	.049	.085	.051	.088	.053
都市戸籍ダミー	.205	.112*	.266	.146*	.245	.135*	.230	.126*	.230	.126*
父親の職業ダミー			-.059	-.035	-.092	-.055	-.113	-.068	-.115	-.069
父親の学歴ダミー			.009	.006	.011	.007	.009	.005	.010	.006
父親の月収ダミー			-.156	-.078	-.177	-.088+	-.183	-.091+	-.182	-.091+
コネを持っている					.133	.137*	.122	.125*	.117	.120*
有力な家庭背景を持っている							.038	.053	.044	.061
コネは就職に重要である									.068	.048
調整済みＲ２	0.015		0.018		0.033		0.034		0.034	
F	2.635		2.312		3.208		3.023		2.893	
N	640		640		640		640		640	

注：ｐ＜0.05 は+，ｐ＜0.01 は*，ｐ＜0.001 は**として示す。以下同様。

「自立と家族への貢献」因子において、「縁故」および父親の職業と大学の影響が同時にみられた。「有力な家庭背景を持っている」ことは「自立と家族への貢献」にマイナスな影響を与えており、「縁故」を持つ大学生は自立のための就職、または家族扶養など家庭を配慮した就職を考えていないことがわかる。そのような傾向は父親の職業にもみられた。それは、家庭背景が恵まれた大学生は家庭の負担を配慮する必要がないためだと考えられる。

表４－１６　「家族貢献と自立」因子の規定要因

	モデル１		モデル２		モデル３		モデル４		モデル５	
	B	β	B	β	B	β	B	β	B	β
(定数)	.409	**	.467	**	.577	**	.780	**	.868	*
X 大学ダミー	-.524	-.232**	-.463	-.205**	-.456	-.201**	-.365	-.161*	-.369	-.163*
Y 大学ダミー	-.115	-.053	-.122	-.056	-.117	-.054	-.156	-.072	-.157	-.072
男性ダミー	-.077	-.038	-.077	-.039	-.064	-.032	-.058	-.029	-.060	-.030
文系ダミー	-.057	-.029	-.017	-.009	-.020	-.010	-.038	-.019	-.036	-.018
4 年生ダミー	-.032	-.016	-.064	-.033	-.072	-.037	-.095	-.048	-.096	-.049
都市戸籍ダミー	-.482	-.224**	-.218	-.101 +	-.210	-.097+	-.132	-.061	-.132	-.061
父親の職業ダミー			-.483	-.244**	-.470	-.238**	-.363	-.184**	-.362	-.183**
父親の学歴ダミー			-.049	-.025	-.050	-.025	-.039	-.020	-.040	-.020
父親の月収ダミー			.105	.044	.113	.048	.143	.060	.143	.060
コネを持っている					-.053	-.046	.006	.006	.008	.007
有力な家庭背景を持っている							-.196	-.228**	-.198	-.230**
コネは就職に重要である									-.024	-.014
調整済みＲ２	0.113		0.151		0.151		0.183		0.182	
F	14.530		13.628		12.411		14.062		12.885	
N	640		640		640		640		640	

また、大学が X 大学であることによる「自立と家族への貢献」への負の影響もうかがえた。ランクの高い大学に進学することで、大学生のキャリア志向は経済的な自立や家族の扶養だけという生活上の需給では満足できなくなったことに原

因があると考えられる。

表４－17　「個人の成長と社会貢献」因子の規定要因

	モデル１		モデル２		モデル３		モデル４		モデル５	
	B	β	B	β	B	β	B	β	B	β
(定数)	-.007		.082		.046		.145		.165	
X大学ダミー	.010	.006	.014	.008	.011	.007	.055	.032	.055	.032
Y大学ダミー	-.019	-.012	-.016	-.010	-.018	-.011	-.037	-.022	-.038	-.023
男性ダミー	-.056	-.036	-.043	-.028	-.047	-.031	-.044	-.029	-.045	-.029
文系ダミー	.154	.103	.162	.108	.163	.109	.154	.103	.155	.104
4年生ダミー	.008	.005	.012	.008	.014	.009	.003	.002	.003	.002
都市戸籍ダミー	-.121	-.074	-.058	-.036	-.061	-.037	-.024	-.014	-.024	-.014
父親の職業ダミー			-.020	-.013	-.024	-.016	.027	.018	.027	.018
父親の学歴ダミー			-.084	-.056	-.084	-.056	-.079	-.052	-.079	-.053
父親の月収ダミー			-.080	-.044	-.082	-.045	-.068	-.037	-.068	-.037
コネを持っている					.017	.020	.046	.052	.046	.053
有力な家庭背景を持っている							-.095	-.145*	-.095	-.145*
コネは就職に重要である									-.006	-.004
調整済みＲ２	0.010		0.011		0.010		0.022		0.020	
F	2.064		1.795		1.635		2.293		2.100	
N	640		640		640		640		640	

さらに、「個人の成長と社会貢献」においても「縁故」の影響がみられた。「有力な家庭背景を持っている」と考える大学生は個人の成長や社会への貢献のために就職すると考えていないことがわかった。「縁故」に恵まれる大学生は高い地位や収入という個人の出世に精神的な満足を求めるのに対して、個人としての成長または出世した後の社会への貢献を重視していない。つまり、「縁故」に恵まれる大学生に功利的なキャリア志向が考えられる。

第４節　まとめと考察

中国の地方都市における大学生の就職意識とそれに対する家庭背景の影響に関して、本研究で得られた主な知見は下記のとおりである。

第一に、大学生の就職意識に大学ランクの影響が反映されている。ランクの高い大学の学生が卒業後すぐに就職することを志望し、高い就職期待と就職自信を示しているのに対して、そうでない学生は卒業後すぐに就職するより、ランクの高い大学への大学院進学を通して敗者復活を図っている。また、大学ランクのほか、労働市場が大学の立地や専攻に対する需給も、大学生の就職意識に反映されている。

第二に、聞き取り調査の結果、キャンパスライフと就職意識との関連が大学生に意識されていることが明らかになり、また、就職意識に対する家庭背景の影響が大きいことが示唆されている。キャンパスライフでの「人気者」は就職にも強いことは、大学生の語りからうかがえた。また、親の「メンツ」や世間の風評を重視する大学生がそのような家庭環境により就職意識を継承することや、大学生の就職意識がその出身家庭の経済状況や社会地位、とりわけ「コネ」から影響を

受けていることは、示唆されている。そのうち、「コネ」を持つ大学生はある程度はっきりした就職ビジョンを持っているのに対して、そうでない大学生は就職ビジョンが曖昧のまま卒業していく。

第三に、家庭背景の指標として、社会階層による影響は先行研究と同様、部分的、限定的でしかなかった。それに対して、「縁故」による影響は顕著に見られた。この点で、本研究は先行研究とは異なる知見を得た。

第四に、「縁故」を持つという大学生は就職に精神的満足を求め、市場移動におけるリスクを回避せずに、さまざまな進路を考えに入れた上で、転職を通して適職を求めるという大胆かつ自由な就職態度を示している。その一方、「縁故」を持たないと考えている大学生は自らの将来性を職場に依託する傾向が見られ、キャリアにおいて穏当な態度を示している。

以上の知見を受けて、中国の地方における大学生の就職意識の規定要因について考察を行いたい。

まず、、大学生の就職意識は労働市場の特性を反映していることが示唆できる。大学ランクや専攻などが労働市場で与える効果は、大学生の就職意識に反映されている。ランクの高い大学の学生は卒業後すぐに就職することを志望し、高い就職期待を示している。その一方で、ランクの低い大学の学生は卒業後すぐに就職するより、ランクの高い大学院への進学をめざし、いわば敗者復活を図っている。このような就職意識の違いは、求人側が採用の際、学歴を重視していることを反映していると考えられる。

次に、大学生の就職意識を考える際に、家庭背景との関連を見逃してはいけない。大学の比較で見られた大学生の就職に対する考え方の差に、大学や専攻だけでは説明できないものがあった。それは大学の選抜性に隠された家庭背景の影響であった。また、大学生に対する聞き取り調査では、就職意識に対する親の期待による価値観の継承、および家庭背景の影響が目立った。就職意識の検討では、家庭背景は大きな視点を提示すると考えられる。

最後に、「縁故」を所有すると自覚することで、大学生の就職に臨む姿勢は大きく変化していたことが示唆されている。それは大学生の業績要因の影響を強調する先行研究の限界を示した。

親の学歴、所得および職業、戸籍のみを用いた先行研究の分析結果は、家庭背景と就職意識との関連が部分的にしか見られなかったのに対して、中国社会独自の文脈で「縁故」を取り入れることによって、家庭背景が就職意識に大きな影響を与えていた。

この結果は、「縁故」の有無によって大学生の就職環境が大きく変化することに原因があると考えられる。中国における労働市場は都市と農村、また国有と私有

という二重構造によって分断化され（馬　1998　など）、個人の自由な労働移動を大きく制限している。コネや権力者は、そのような社会的な制約を凌駕し、就職機会を豊富化する「縁故」として、大学生の就職および就職意識に強く影響をしていると考えられる。豊富な就職機会を持つと考えている大学生は、就職において高い志望を持ち、進路選択においても多様性と「大胆さ」が見られるが、労働移動の機会と範囲が制約されやすい大学生は「できる限り初職で流動の自由度の高い労働市場に参入しよう」（李　2011，p.82）とするのである。

こうした家庭背景による大学生の就職意識の違いは、中国の職業生涯教育の限界を示すとともに、今後の課題を提示している。家庭背景によって就職手段や各種資本が不均等に配分されている大学生に対して、従来大学生の就職意識を「大手志向」だと一元的にとらえ、それを「修正」しようとするキャリア・モデルは中国の就職現状に十分応えられないことになる。本研究の知見にもとづけば、異なる家庭背景を持つ大学生の多様な就職意識や、それぞれ抱えるキャリア形成上の問題や不安、あるいは展望に対応した就職指導を検討することが必要だろう。また、労働市場の分断によってキャリア形成上不利な状況に置かれている若者、とりわけ「縁故」に乏しい大学生が、より自由に労働市場を移動できるような労働市場の再編が求められよう。

＜注＞

１．学校による家庭背景の分布として、高いランクの大学生は母親の月収または学歴が高く、父親と母親の職業が管理・専門職である者が多い。また、高いランクの大学生ほど、「コネを持っている」「有力な家庭背景を持っている」と考えている。

第５章　就職意識が大学生活に与える影響

本章では、大学生活の実態を概観し、それに対する就職意識の影響について検討する。

大学生の就職意識と大学生活との関連が多くの研究者によって取り上げられてきた。その１つは曖昧なキャリアビジョンが大学生の消極的な学習態度をもたらしている（朱・黄　2006 など）という指摘である。大学生活に対するこのような指摘は社会的な大学生バッシングの一部を構成した。また、一方で、大学生の就職意識に対する大学生活の影響が指摘されている（王　2005 など）。とくに大学生活における成績やアルバイト経験などの「業績要因」は大学生の就職意識に強い影響をもたらしていることが指摘されている（李　2011）。

本章では、おもに大学生の就職意識が大学生活に与える影響に着目し、「曖昧なキャリアビジョンが大学生の消極的な学習態度をもたらしている」という指摘を検証する。さらに、大学生活の規定要因を分析することによって、大学生活と就職意識、および家庭背景との関連を明らかにする。

第１節　大学生活の概観

本節では、中国の地方における大学生の大学生活、すなわち大学生の大学での学習と正課外の生活を概観する。

１　大学と専攻の志望理由

まず、大学及び専攻の志望理由について概観する。

表５－１　大学の志望理由（%，複数選択）

	はい	いいえ	合計
実家に近い	29.1	70.9	100.0(693)
所在地魅力	30.6	69.4	100.0(693)
点数に見合う	56.2	43.8	100.0(693)
知り合いいる	3.0	97.0	100.0(693)
家と離れているから	4.7	95.3	100.0(693)
進路に有利だ	20.0	80.0	100.0(693)
進められた	19.6	80.4	100.0(693)
知名度高い	7.0	93.0	100.0(693)
よく知っている	4.5	95.5	100.0(693)
学びたい学科がある	12.7	87.3	100.0(693)
他の志望校に落ちた	26.8	73.2	100.0(693)
理由ない	0.8	99.2	100.0(693)

表５－１は大学の志望理由を示している。この表からわかるように、日本で問題視されている「輪切り」現象がみられた。

大学の志望理由として、56.2%の大学生は「(入試）点数に見合う」ためだと考えている。半数以上の大学生が入試の点数を大学の志望理由と挙げたことから、日本でいう「輪切り」現象は中国の地方にも発生していることが明らかである。

また、「他の志望校に落ちた」ために、現在の大学に入学したという大学生は、26. 8%と高い割合を示している。そのような大学生の多くはランクの低い大学の学生であることは、大学との関連からわかった。それに対して、「進路に有利だ」を理由とした大学生は 20%であるが、その大半はランクの高い X 大学の学生であった。大学ランクによって、大学志望における大学生の主体性が左右されると考えられよう。

一方、「学びたい学科がある」ため、大学を志望した大学生はわずか 12.7%で、低い値を示している。大学生が入試の点数や進路などを考慮したうえで、大学を志望することから、大学の進学動機は功利的だと言えよう。

大学志望にみられる功利性は、専攻の志望にも示されている。表５－２は専攻の志望理由を示している。大学の志望理由と同様、入試の点数は専攻を志望する大きな理由として挙げられている。

37.4%の大学生が入試の「点数に見合う」ため、現在の専攻を志望したという。大学選択にみられた功利性は専攻の志望にもうかがえる。大学生は自身の成績に見合った大学、専攻を志望し、かつて日本で問題とされた「輪切り」現象が中国でも生じていると推測される。

また、「進路に有利」であることを理由とした大学生は 23.3%であった。進路を考慮したうえで大学および専攻を志望することから、大学に進学する前に大学生は就職など進路を考え、それを重視することがわかる。

一方で、30.4%の大学生は「興味がある」ことを、専攻を志望する理由としている。また、自らの「能力に見合う」ために専攻を志望した大学生は 26.3%である。つまり、大学に入学できることを重視する一方、大学生の一部は専攻に興味と能力を生かそうとしている。

表５－２　専攻の志望理由（%，複数選択）

	はい	いいえ	合計
興味がある	30.4	69.6	100.0(693)
進路に有利だ	23.3	76.7	100.0(693)
点数に見合う	37.4	62.6	100.0(693)
周りに薦められた	13.2	86.8	100.0(693)
内容が簡単そうだ	6.9	93.1	100.0(693)
よく知っている	10.6	89.4	100.0(693)
能力に見合う	26.3	73.7	100.0(693)
知名度が高い	7.0	93.0	100.0(693)
知り合いがいる	3.0	97.0	100.0(693)
その他	15.4	84.6	100.0(693)

以上の分析から、中国の大学進学にも「輪切り」現象が発生していることが確認された。また、その一方で、専攻の志望に興味と能力を生かすことに対する大学生の重視がうかがえる。そのような傾向は大学生の学習生活にどのように反映されるのか。次節では、大学生の学習生活を概観する。

２　学習生活

先行研究の検討から、就職における大学教育の効用が非難され、「学習無用論」をもたらしていることが問題視されてきた（胡・黄　2010 など）。また、そのような大学教育が就職に対する「無用論」は大学生の就職意識にも浸透していることは、前章の分析から考えられる。大学生の就職意識を分析した結果、大学生の一部は大学教育の意義を否定的にとらえていることが明らかになった。また、大学生の多くは大学での成績より、学歴を就職において効用のあるものとしてを評価している。では、大学生の学習生活はどのようなものなのか。本節では、大学生の学習生活を概観し、「学習無用論」の影響を検証する。

表５－３は授業以外、大学生が 1 日に勉強する時間を示している。大学生の学習時間にばらつきが大きく、授業以外でも多くの時間をかけて勉強する大学生がいる一方、ほとんど勉強しない者もいる。

授業以外にも、1 日に「4 時間以上」勉強する大学生は 19.4%であり、また、「2-3 時間」以上勉強するのは合わせて 54.1%であり、中国の地方の大学生はまじめであることがわかる。中国における大学の多くは「後・高校教育（高校教育の延長）」だと言われるように、大学生は平日 1 日に 4 - 6 コマの授業を受けることになっている。19.4%の大学生はそれ以外にも「4 時間以上」勉強していることから、一部の大学生は非常にまじめであることが明らかである。また、「3-4 時間」勉強する大学生は 11.0%であり、「2-3 時間」は 23.7%である。半数以上の大学生が授業以外にも 2-3 時間以上勉強することから、中国の地方の大学生はまじめだと言えよう。

表５－３　授業以外の 1 日の学習時間（%）

0 時間	1 時間未満	1-2 時間	2-3 時間	3-4 時間	4 時間以上	合計
2.0	16.3	27.6	23.7	11.0	19.4	100.0(655)

しかし、その一方で、授業以外にあまり学習しない大学生もいる。自習時間が「1 時間未満」、「0 時間」と回答した大学生はあわせて 18.3%である。つまり、2 割近くの大学生は授業以外にほとんど勉強しない。授業以外の学習時間は大学生によって大きなばらつきを呈している。そのような学習時間のバラつきは大学生の就職意識とどのような関連を持つのかを、検討する必要がある。

表５－４は学習に対する大学生の取り組みを示している。この表からわかるように、地方の大学生はまじめに学習に取り組む一方、大学における学習の意味に疑問を持ち、授業への出席に苦痛を感じている。

表５－４　大学における学習生活（%）

	とてもあてはまる	少しあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
よく予習・復習する	12.5	28.8	21.8	31.3	5.6	100.0(697)
よく勉強について討論する	6.9	27.3	24.8	34.6	6.5	100.0(697)
専攻関連の本よく読む	11.1	37.8	23.9	23.6	3.6	100.0(694)
必要ない授業を受けないようにしている	6.2	25.0	23.1	35.1	10.7	100.0(693)
資格を取るために勉強することが多い	10.2	36.4	22.9	27.1	3.5	100.0(695)
授業の出席を苦痛に感じることが多い	6.5	23.0	24.7	35.4	10.4	100.0(695)
積極的に教養科目に出席する	12.0	41.2	27.1	17.0	2.7	100.0(694)
興味のある科目がある	21.8	49.3	19.3	8.5	1.1	100.0(696)
自分が成績のいいほうだと思う	9.1	33.6	29.6	23.7	4.0	100.0(693)
大学における勉強に意味が見出せない	12.6	30.0	27.4	22.8	7.0	100.0(696)

「積極的に教養科目に出席する」大学生は合わせて 53.2%であり、「専門関連の本をよく読む」は 48.9%であった。約半数の大学生は大学での学習に積極的に取り組んでいる。

一方で、大学での学習を否定的にとらえる大学生の姿もうかがえる。42.6%の大学生は「大学における勉強に意味が見出せない」と考えている。また、「必要ない授業を受けないようにしている」大学生は 31.2%であり、29.5%の大学生は「授業への出席を苦痛に感じることが多い」と答えている。中国の地方都市における大学生は大学での学習に積極的に取り組む一方、その多くは勉強の意味に疑問を感じ、功利的または辛抱しながら学習に取り組んでいる。

しかし、批判的にとらえながらも、大学生は大学での学習を全面的に否定しているわけではない。「興味のある科目がある」に「とてもあてはまる」「少しあてはまる」と回答した者は 71.1%を占めている。大学の授業を功利的にとらえ、苦痛を感じながら取り組むこともあるが、大学生は一部の授業に興味を示していることがうかがえる。

以上の分析から、大学生の学習に対する取り組みはまじめであることが明らかになった。それは大学生の「無気力」への指摘を否定したものだと考えられる。また、大学での学習の意味づけに迷うことから、「学習無用論」が大学生への浸透が考えられる。

３　正課外の大学生活

表５－５は正課外の大学生活を示している。その表から、地方の大学生は正課外の大学生活においてもまじめであることがわかる。

地方の大学生の正課外の大学生活は充実している。「アルバイトしたことがある」大学生は（「とてもあてはまる」と「少しあてはまる」を合わせて）67.9%であり、「サークルに参加したことがある」のは 59.6%であった。半数以上の大学生はアルバイトやサークル参加の経験を持っている。また、「よく社会のことを調べる」

大学生は 48.2%であり、社会に関心を持っていることがわかる。さらに、「興味や習い事に取り組むことが多い」と答える大学生は 48.6%で、「専門以外の知識を学ぶことが多い」大学生は 38.3%であった。趣味関心に基づく学習をする大学生が多い。以上の分析から、地方の大学生は正課外の生活においてもまじめであり、充実なキャンパスライフを営んでいると言えよう。

表５－５　大学生活について（%）

	とてもあてはまる	少しあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	合計
よくゲームする	5.2	16.1	17.4	28.6	32.8	100.0(694)
よく社会のことを調べる	8.0	40.2	25.1	23.6	3.0	100.0(696)
よくネットコミュニティを利用する	19.5	50.0	15.7	12.5	2.3	100.0(696)
カラオケによく行く	2.4	7.8	10.5	29.9	49.4	100.0(696)
よくお酒を飲む	7.1	8.2	7.7	24.2	52.8	100.0(743)
よくタバコを吸う	2.6	8.9	6.3	13.5	68.8	100.0(743)
よくトランプする	2.7	9.1	7.7	19.9	60.7	100.0(740)
よく旅行する	5.4	21.5	13.4	33.2	26.5	100.0(740)
小説・マンガをよく読む	10.3	34.7	15.8	23.1	16.1	100.0(740)
おしゃれに気を使う	4.7	24.7	30.0	29.9	10.7	100.0(740)
よくショッピングする	5.8	18.4	23.9	35.7	16.2	100.0(740)
芸術系の習い事をしている	7.4	24.9	25.6	34.2	7.8	100.0(739)
体育系の習い事をしている	8.5	25.8	22.7	32.6	10.4	100.0(740)
専門以外の知識を学ぶことが多い	8.0	30.3	26.5	30.9	4.3	100.0(742)
興味や習い事に取り組むことが多い	9.9	38.7	25.0	21.9	4.5	100.0(739)
大学の課外活動に参加する	8.8	32.3	25.9	27.0	6.0	100.0(737)
ボランティア活動に参加する	11.8	36.1	22.3	23.5	6.2	100.0(739)
アルバイトしたことがある	23.2	44.7	14.6	12.7	4.7	100.0(740)
サークルに参加したことがある	17.6	42.0	19.1	16.1	5.3	100.0(740)
社会経験が豊かのほうだ	7.7	25.2	27.1	31.8	8.1	100.0(740)
恋人と過ごす時間が多い	5.7	18.0	14.3	23.5	38.5	100.0(741)
暇なときに寝ることが多い	6.2	20.4	21.0	30.9	21.5	100.0(739)
よく友人と外食する	5.2	26.1	26.1	32.8	9.9	100.0(737)
社会人と接触することが多い	4.9	17.7	21.1	36.4	20.0	100.0(741)

一方で、飲酒、喫煙、トランプなどを「よくする」と答える大学生は、いずれも 1 割前後しかなかった。地方の大学生の生活は向学校的だと考えられよう。

そのほかに、地方の大学生のネットコミュニティの利用が目立った。正課外の大学生活において、最も挙げられたのは「よくネットコミュニティを利用する」であった。「よくネットコミュニティを利用する」に「とてもあてはまる」と「少しあてはまる」と答えた大学生は合わせて 69.5%である。つまり、地方の大学生の 7 割近くは、ネットコミュニティを通じたコミュニケーションをしている。それに対して、「よく友人と外食する」大学生は 31.3%で、「社会人と接触することが多い」大学生は 22.6%であった。他人とのリアルな接触より、ネットを通じてコミュニケーションする大学生が多いのである。

以上の検討から、地方の大学生は大学生活にまじめ、かつ積極的に取り組んでいることがうかがえる。そのような結果は、大学生の「無気力」に対する従来の指摘と異なる可能性を示唆している。

第２節　学習生活への影響

本節では、大学と専攻の視点から学習行動と就職意識との関連を検討する。

１　大学・専攻から見る学習生活

表５－６は、大学生の学習行動の平均値を大学・文理系別に比較した結果である。大学生の学習行動において、大学ランクだけでなく、文理系による影響も大きく見られた。

文科生の場合、「資格のために勉強する」以外に大学ランクの差が見られなかった。「資格のために勉強する」について、Y 大学は 2.81 であるのに対して、Z 大学は 3.37 であり、ランクの低い Z 大学の学生は資格のために勉強することがわかる。Z 大学の文科生は資格の獲得によって、就職における大学ランクの不利を補おうとしているのかもしれない。

表５－６　大学・文理系別に見た大学生の学習行動

	理系		文系	
	X 大学	Z 大学	Y 大学	Z 大学
よく予習復習する	3.75	3.12**	2.77	2.91
よく勉強について討論する	3.56	2.85**	2.63	2.77
専門関連の本を読む	3.50	2.77**	3.35	3.53
必要のない授業を履修しない	3.27	2.72**	2.58	2.73
資格のために勉強する	3.51	3.31	2.81	3.37**
授業の出席を苦痛に思う	3.39	2.89**	2.46	2.54
教養科目に出席する	3.68	3.27**	3.31	3.47
興味のある科目がある	3.73	3.60	3.92	4.01
成績がよいほうである	3.32	3.01*	3.31	3.15
大学における勉強に意味が見いだせない	3.36	3.17	3.11	3.11

注：$p < 0.01$ は*，$p < 0.001$ は**として示す。以下同様。

理系の比較では、ランクの高い X 大学の学生は大学での学習に積極的に取り組んでいることがわかる。「よく予習・復習する」において、X 大学の理科生は 3.75 であるのに対して、Z 大学の理科生は 3.12 であった。同じ傾向は「よく勉強について討論する」にも見られる。前章でみた表４－６の就職状況の大学間比較から、X 大学の学生は、ほかの２大学の学生より積極的に就職活動に取り組み、就職に対する自信も高いことが明らかになった。つまり、就職に高い自信と積極性を示す X 大学の学生は、大学での学習にも積極的であるといえる。それに対して、Y 大学と Z 大学の学生は就職に対する取り組みがそれほど積極的ではなく、大学での学習に対しても X 大学の学生と比べて消極的である。先行研究では、大学生の就職意識が大学での学習に影響を及ぼすとされている。さらに就職意識と学習行動の関連について検討する必要があろう。

一方で、学習に積極的に取り組みながら、X 大学の理科生は授業の出席に苦痛を感じている。Z 大学の理科生は「授業の出席を苦痛に思う」において 2.89 であ

るのに対して、X 大学は 3.39 であり、X 大学の学生は Z 大学より授業の出席に苦痛を感じていることがわかる。また、「必要のない授業を履修しない」において、Z 大学の理科生が 2.72 であるのに対して、X 大学生は 3.27 であり、X 大学生のほうが学習に功利的に取り組んでいる。X 大学の理科生は大学での学習に自主的に取り組む一方、学習を功利的にとらえる傾向が強く、授業の出席を苦痛に思っている。それに対し、同じ理科生である Z 大学の学生は学習に対してそれほどの積極的ではないが、授業の出席に苦痛を感じていない。

しかし、学習に対してそれほど積極的ではないが、Z 大学の理科生の学習時間は X 大学と比べて極めて長いことがわかる。

表５－７は授業以外の学習時間を X 大学と Z 大学の理系で比較したものである。授業以外に 4 時間以上学習する Z 大学の理科生は 36.3%のに対して、X 大学の理科生は 9.2%でしかなかった。また、「3－4 時間」学習する大学生においても、Z 大学の理科生は 14.0%であるのに対して、X 大学は 6.4%であった。一方で、授業以外に「2－3 時間」学習する大学生の割合は、Z 大学の理科生は 16.6%であるのに対して、X 大学は 36.2%である。また、授業以外に「1－2 時間」学習する大学生の割合は、Z 大学の理科生は 9.6%であるのに対して、X 大学は 27.7%であった。Z 大学の理科生は授業後の学習に長い時間をかけているのに対して、X 大学の学生の学習時間は短い。

表５－７　授業以外の学習時間における X と Z 大学の理科生の比較（p＜0.01）

	0 時間	1 時間未満	1-2 時間	2-3 時間	3-4 時間	4 時間以上	合計
X 大学（理系）	5.0%	15.6%	27.7%	36.2%	6.4%	9.2%	100.0%(141)
Z 大学（理系）	0.6%	9.6%	16.6%	22.9%	14.0%	36.3%	100.0%(157)

以上からわかるように、Z 大学の理科生は大学での学習に消極的であるが、授業外に長い時間をかけて学習している。それは、Z 大学の理科生の多くは「就職と進学の両方を志望する」ことが原因だと考えられる。つまり、ランクの低い Z 大学の理科生は、大学での学習ではなく、大学院進学のための勉強に取り組んでいると考えられる。学習時間と大学生の進路志向との関連を検討する必要がある。

また、表５－８は Y 大学と Z 大学の文科生の授業外の学習時間を比較したものである。その結果、２大学の文科生の間に授業外の学習時間に有意な差が見られなかった。

表５－８　授業外の学習時間における Y・Z 大学の文科生の比較（p＞0.05）

	0 時間	1 時間未満	1-2 時間	2-3 時間	3-4 時間	4 時間以上	合計
Z 大学（文系）	1.9%	20.4%	31.5%	16.0%	15.4%	14.8%	100.0%（162）
Y 大学（文系）	1.0%	19.0%	33.3%	21.5%	8.2%	16.9%	100.0%（195）

大学ランクに大きな差があるにかかわらず、文科生の学習生活に有意の差が見られなかったのは、先の表５－６も同じである。それは、Z 大学の比較対象である X 大学と Y 大学の大学ランクに格差が大きいことに原因がある。X 大学と Y 大学はいずれも Z 大学よりランクの高い大学であるが、理科の比較対象である X 大学は 100 位以内のエリート大学に対して、Y 大学はランクが高いが、その全国における順位は 100 位以降であり、前述した「211 プロジェクト」に指名されるようなエリート大学ではない。つまり、大学ランクによる学習行動の差も考えられるが、重点大学であるかどうかは、大学生の学習行動に違いを生じさせていると考えられる。

以上の分析で示されたように、X 大学の理科生は積極的に大学での学習に取り組んでいるが授業以外の学習時間が短い。それに対して、Z 大学の理科生は大学での学習に消極的であるが、授業以外の学習に多くの時間をかけている。それは大学生の進路志向との関連に原因があると考えられる。つまり、ランクの低い Z 大学の学生は大学での学習より、進路のための学習に取り組んでいる可能性がある。それを確かめるために、次節では、大学生の進路志向と学習行動との関連を検討する。

２　学習行動への影響

本節では、大学生の学習行動に対する就職意識の影響を検討する。その結果、大学生の学習行動と就職意識との関連は限定的であることがわかった。

（１）大学の比較からみる進路志向と学習行動との関連

表５－９は大学生の進路志向と授業外の学習時間の関連を示している。その結果、就職と進学を同時に志望する大学生は、授業以外にも学習に多くの時間をかけていることがわかる。

表５－９　授業外の学習時間における進路志向の比較（$p<0.01$）

	0 時間	1 時間未満	1-2 時間	2-3 時間	3-4 時間	4 時間以上	合計
就職のみ	1.6%	19.2%	29.2%	28.3%	9.1%	12.6%	100.0%（318）
就職と進学	1.8%	13.6%	26.1%	20.2%	12.5%	25.7%	100.0%（272）

「就職のみ」を志望する大学生で授業以外に４時間以上を学習するのは 12.6%でしかなかったのに対して、就職と進学を同時する大学生は 25.7%であった。前節では、Z 大学の理科生は大学での学習に消極的であるが、授業外の学習に長い時間をかけていることが明らかにされた。それは、Z 大学の学生の高い進学志向に原因があると言えよう。

以上の結果を踏まえて、以下では、大学生の進路志向と学習行動との関連を、

大学の比較によって分析する。

表５－１０は大学生が「就職するか進学するか」による学習行動の平均値の比較を、大学・文理系別に見た結果を示している。なお、「進学のみを志望する」大学生のサンプルは数人しかいなかったため、ここでは扱わないことにする。その表から、大学生の進路志向と学習行動との関連は限定的であることがわかる。

「就職するか進学するか」と大学生の学習行動の関連がもっとも顕著にみられたのは、X 大学である。X 大学の場合、「就職のみ」志望する大学生は大学での学習に積極的であるが、授業の出席に苦痛を感じている。一方で、大学院進学と就職を同時に志望する X 大学の学生は、大学での学習への取り組みはそれほど積極的ではないが、勉強に苦痛を感じることも少ない。

表５－１０　「就職するか進学するか」と学習行動との関連における大学比較

	X 大学（理系）			Y 大学（文系）			Z 大学（理系）			Z 大学（文系）		
	就職のみ	就職と進学		就職のみ	就職と進学		就職のみ	就職と進学		就職のみ	就職と進学	
よく予習復習する	3.92	3.36	*	2.80	2.74		3.22	2.94		2.96	2.87	
よく勉強について討論する	3.68	3.26		2.66	2.62		2.97	2.72		2.78	2.80	
専門関連の本を読む	3.66	3.08	*	3.38	3.37		2.68	2.73		3.51	3.54	
必要ない授業を履修しない	3.39	3.08		2.67	2.61		2.75	2.66		2.96	2.46	*
資格のために勉強する	3.63	3.31		2.87	2.77		3.46	3.28		3.40	3.36	
授業の出席を苦痛に思う	3.56	3.05	*	2.58	2.28		2.95	2.86		2.66	2.37	
教養科目に出席する	3.76	3.59		3.35	3.21		3.54	3.11	*	3.45	3.56	
興味ある科目がある	3.75	3.79		3.98	3.91		3.63	3.66		3.96	4.11	
成績がよいほうである	3.44	3.03		3.33	3.33		3.17	2.91		3.09	3.20	
勉強に意味が見いだせない	3.54	2.90	*	3.27	2.91	+	3.16	3.16		3.13	3.06	

注：$p < 0.05$ は+，$p < 0.01$ は*，$p < 0.001$ は**として示す。以下同様。

「よく予習・復習する」において、就職のみを志望する X 大学の学生は 3.92 であるのに対して、就職と進学の両方を志望する大学生は 3.36 である。就職のみ志望する大学生のほうが大学での学習または資格の取得に積極的に取り組んでいることがわかる。同じ傾向は「専門関連の本をよく読む」「成績がよいほうである」や「資格のために勉強する」にもうかがえる。

一方、就職のみを志望する大学生で、「授業の出席を苦痛に思う」のは 3.56 であるのに対して、就職と進学の両方を志望する X 大学の学生は 3.05 であり、就職のみ志望する X 大学の学生は授業の出席を苦痛に思っている。また、就職のみを志望する大学生で、「勉強に意味を見いだせない」のは 3.54 であるのに対して、就職と進学の両方を志望する大学生は 2.90 であった。大学での勉強や資格の取得に積極的に取り組んでいるが、就職のみを志望する X 大学の学生は授業の出席に苦痛を感じ、学習の意味を疑っている。

就職のみを志望する X 大学の学生が勉強または資格の取得に積極的に取り組むのは、それを卒業後の就職に生かそうとしているためだと考えられる。また、大学院進学を志望する大学生と比較して、就職のみを志望する大学生のほうは授業

に取り組む余裕があると考えられる。勉強または資格の取得に積極的に取り組む大学生が一方で、大学での学習に苦痛を感じ、学習の意味を疑うのは、専門教育を中心とする中国の大学教育に大学生の就職とのギャップが生じていることが原因だと考えられよう。卒業後すぐに就職することを志望するX大学の学生は、就職のために積極的に大学での学習に取り組む一方、大学での学習に就職とのギャップが生じているため、学習の意味に疑問を感じている。そのことも、X 大学の理科生が大学院への進学を志望しない原因かもしれない。

それに対して、進学と就職を同時に志望するX大学の学生は大学での学習にそれほど積極ではなかった。それは大学教育と大学院進学の試験内容との乖離に原因があると考えられる。しかし、就職か進学かを絞ることのできない大学生が消極的に大学での学習に取り組むことは、ある意味で、曖昧な進路志向による学習アスピレーションの低下という従来の指摘を反映していると考えられる。その指摘の妥当性について、学習行動の規定要因の分析からさらに検討する必要がある。

また、Y大学とZ大学の場合、大学生が「就職するか進学するか」と学習行動の関連はわずかしか見られなかった。

Y大学の場合、わずかながら、「勉強に意味を見いだせない」と進路志向との間に有意の関連が見られた。就職のみを志望する大学生のほうは、「勉強に意味を見いだせない」と考えている。また、就職のみを志望する Z 大学の文科生は、「必要のない授業を履修しない」と、大学での学習に功利的に取り組んでいる。つまり、就職のみを志望する文科生は、大学での学習の意味を疑い、功利的に取り組んでいることがわかる。就職のみを志望する大学生が大学での学習の意味を疑うのは、理系であるX大学の学生も同じである。大学での学習と就職との乖離が考えられよう。また、ランクの低いY大学とZ大学において、大学生の進路志向と学習行動の関連がわずかしか見られなかったことから、大学での学習と就職との乖離はランクの低い大学にさらに顕著にみられると考えられる。

以上から、中国の地方の大学、とりわけランクの低い大学において、大学生の進路と大学での学習との乖離がうかがえる。それは、ランクの低い大学に進学することが就職に不利となることに原因があると考えられる。そのため、ランクの低い大学に進学した学生は、大学での学習より、敗者復活の手段として大学院進学や資格の獲得に取り組んでいる。大学ランクの不利は、ランクの低い大学生の進路志向が大学院進学と就職の間に揺らいでいる1つの原因として考えられよう。一方で、大学での学習の意味はランクの高いX大学の大学生においても疑われている。大学生の進路に対して、大学教育はどのように位置づけられているのか。次節では、進路希望と大学生の学習行動との関連をさらに検討し、大学生の進路に対する大学教育の役割を考察する。

（２）進路希望の決定と学習行動との関連

本節では、進路希望の決定と大学生の学習行動との関連を分析することで、曖昧な進路志向が学習アスピレーションの低下をもたらすという先行研究の指摘を検証し、大学生の進路に対する大学教育の役割を考察する。

表５－１１は大学生の具体的な進路志向と学習行動との関連を示している。表５－１１で示したのは、表５－４中の「とてもあてはまる」を 5、「全然あてはまらない」を１として計算した平均値を進路志向別に比較したものである。その結果、まったく異なる性格を持つ国有セクター、私有セクターおよび進学の志望者が共に消極的に学習生活に取り組んでいることがわかった。

表５－１１　進路志向と学習行動との関連

	政府機関			外国企業			国内進学		
	志望している	志望していない		志望している	志望していない		志望している	志望していない	
よく予習・復習する	2.96	3.24	*	2.87	3.23	**	2.94	3.24	*
よく勉強について討論する	2.78	3.06	*	2.77	3.02	*	2.80	3.04	*
授業の出席に苦痛を感じることが多い	2.70	2.87		2.73	2.83		2.57	2.97	**

政府機関を志望する大学生で「よく予習・復習する」の値が 2.96 であるのに対し、志望していない者は 3.24 であり、政府機関を志望する大学生ほど予習・復習に熱心ではないことがわかる。また、政府機関を志望する学生で「よく勉強について討論する」の値が 2.77 であるのに対し、志望していない者は 3.23 であり、政府機関を志望する大学生ほどよく討論しないことになる。それと同じ傾向は外国企業、進学の進路志向を持つ大学生にも見られた。それは大学での学習が大学生の希望する進路の達成に機能しないことに原因があると考えられる。政府機関での就職、つまり公務員試験は知識量と臨機応変の対応力、外国企業は実践や思考能力が求められる。また、進学においても、受験のためには専門知識より「政治」と「英語」の試験を主とする全国の統一試験が重視される。就職や大学院進学の達成に求められる能力や知識は大学での学習とのギャップが大きい。そのため、進路志向が明確になるほど、大学生は大学での学習より、進路達成に取り組むようになった。

上述した結果に対応するように、希望する進路が曖昧な大学生が学習に積極的に取り組んでいることは表５－１２から明らかになった。

表５－１２は進路希望の決定と学習行動との関連を示している。「よく予習・復習する」において、「はっきりとした進路希望を持っている」と考える大学生は 2.94 であるのに対して、そうでない大学生は 3.22 であった。明確な進路希望を持っていない大学生が「よく予習・復習」することになる。このような希望する進路が曖昧なほど学習に積極的に取り組んでいるという大学生の傾向は、「よく勉強について討論する」や「専門関連の本をよく読む」などの項目にもみられる。

表５－１２　進路希望の決定と学習行動との関連

はっきりとした進路希望を持っている	あてはまる	あてはまらない	
よく予習・復習する	2.94	3.22	*
よく勉強について討論する	2.78	3.04	*
専攻関連の本よく読む	3.17	3.46	*
必要ない授業を受けないようにしている	2.57	3.16	**
資格を取るために勉強することが多い	3.09	3.46	**
授業の出席を苦痛に感じることが多い	2.53	3.11	**
積極的に教養科目に出席する	3.32	3.54	
興味のある科目がある	3.88	3.85	
自分が成績のいいほうだと思う	3.14	3.30	
大学における勉強に意味が見出せない	3.00	3.50	**
授業以外の学習時間	4.03	3.68	*

しかし、「授業以外の学習時間」において、「はっきりとした進路希望を持っている」と考えていない大学生は 3.68 であるのに対して、「はっきりとした進路希望を持っている」と考える大学生は 4.03 であった。進路希望がはっきりしている大学生は学習に消極的である一方、授業以外の学習時間が長いことがわかる。それは、明確な進路希望を持つ大学生は就職や進学のための学習に多くの時間を費やすためだと考えられる。つまり、希望する進路が明確な大学生は就職や進学の準備に応じた学習をし、大学での学習を軽視することが考えられる。

以上の分析から、大学生の進路志向がはっきりとするにつれて、大学での学習アスピレーションは向上するどころか、むしろ低下したことがわかる。曖昧な進路志向が学習アスピレーションの低下をもたらすという先行研究の指摘は否定されたのである。また、大学教育は大学生の進路に機能していないことも指摘されよう。

第３節　大学生活の規定要因

本節では、大学生の大学生活の規定要因の分析から、それと就職意識との関連を検討する。大学生の就職意識の規定要因からわかるように、家庭背景とりわけ「縁故」は就職意識に大きな影響を与えている。また、前節の分析から、大学生の進路決定はその学習への積極性を促すどころか、負の影響を与えている可能性が示唆された。しかし、一方で、高い就職アスピレーションを持つ X 大学の学生は、学習に積極的であることも明らかにされた。では、大学生活はいかに規定され、それにおける就職意識はどのように機能しているのか。本節では、大学生活の規定要因を分析することによって、大学生活に対する就職意識の影響を検討する。なお、「縁故」と区別するために、本章では引き続き、親の学歴、収入および職業を「社会階層」と呼ぶ。

１　大学・専攻志望理由における家庭背景の影響

大学生活の規定要因として、家庭背景の影響が考えられる。それは、大学・専

攻の志望理由に対する家庭背景、とりわけ「縁故」の影響から考えられる。

表５－１３は大学および専攻の志望理由と「縁故」の関連を示している。ここで用いられる「縁故」の得点は、「コネを持っている」と「有力な家庭背景を持っている」の得点を足し合わせた合成変数である。

表５－１３　大学・専攻志望理由における「縁故」の分布

大学志望理由	大学所在地*		点数に見合う*		知り合いがいる*		
「縁故」の平均値得点	重視する	重視しない	重視する	重視しない	重視する	重視しない	
	5.33	4.88	4.86	5.32	6.26	4.99	
専攻志望理由	就職に有利だ**		簡単そうだ*		よく知っている**		知り合いがいる*
「縁故」の平均値得点	重視する	重視しない	重視する	重視しない	重視する	重視しない	重視する　重視しない
	5.71	4.78	5.76	4.97	6.08	4.89	6.43　4.98

この表からわかるように、大学または専攻の志望理由と「縁故」の関連が大きいことが確認された。大学の志望理由として、「点数に見合う」ことを重視する大学生の「縁故」の平均値得点は 4.86 であるのに対して、重視しない大学生は 5.32 であった。大学の志望に「点数に見合う」ことを重視する大学生に、「縁故」の乏しい者が多いことがわかる。日本で言う「輪切り現象」は、「縁故」に恵まれない大学生に発生していると考えられよう。大学志望における「輪切り現象」を作り出したのは、「縁故」の欠如が１つの原因として考えられる。

それに対して、大学または専攻の選択に、その関連領域に「知り合いがいる」ことを重視する大学生は、「縁故」に恵まれる者が多い。大学の志望に「(大学に) 知り合いがいる」を重視する大学生の「縁故」の値は 6.26 であるのに対して、重視しない大学生は 4.99 であった。また、専攻の志望に「(専攻と関連する領域に) 知り合いがいる」ことを重視する大学生は、「縁故」の値は 6.43 であるのに対して、そうでない大学生は 4.98 である。表４－９から、就職先の志望において、「縁故」を持つ大学生は「(職場に) 知り合いがいる」ことを重視することが明らかにされた。「縁故」に恵まれる大学生は、「縁故」が利用できる環境への移動を図ろうとしている。それは、「縁故」による利益を最大限に実現するためだと考えられる。

また、専攻の志望に「就職に有利」であることを重視する大学生に、「縁故」に恵まれる者が多いことがわかった。専攻が「就職に有利」であることを重視する大学生の「縁故」の値は 5.71 であるのに対して、そうでない大学生は 4.78 であった。将来のキャリアを意識したうえで、大学・専攻を志望している大学生に、「縁故」に恵まれる者が多いことがわかる。

さらに、表に挙げていないが、大学または専攻別にみた結果、大学の志望理由である「大学所在地」と「縁故」との関連が有意でなくなったが、「点数に見合う」や「知り合いがいる」「就職に有利だ」が「縁故」との間には有意の関連が確認された。

以上の結果から、分析の結果、大学または専攻の選択に将来のキャリアを重視

する大学生は、「縁故」に恵まれていることがわかった。一方で、「点数に見合う」ことを大学の志望理由に挙げる大学生は、「縁故」の所持が乏しい。また、大学および専攻の志望理由が「縁故」との関連が確認されたのに対して、親の学歴や収入、職業という「社会階層」との間に有意の関連が見られなかった。家庭背景のうち、大学および専攻の志望理由に対する「縁故」の影響が大きいと考えられる。では、その影響は大学生活にも反映されているのか。次は大学生の学習態度における「縁故」の影響について検討する。

２　大学生の学習生活の規定要因

本節は大学生の学習生活における「縁故」の影響を、回帰分析によって検討する。

まず、大学生の学習生活を示す項目に対して因子分析を行い、変数を集約することにした。その結果を表５－１４に示す。因子の解釈について、第 1 因子は大学生が積極的かつ趣味を持って学習に取り組んでいることを示しているため、「積極的学習」と称することとした。第 2 因子は大学生が大学での学習の意義を否定的に捉える質問から構成されているため、「学習への否定」と命名した。また、表に挙げていないが、2 因子の間に一定の正の相関が見られている。つまり、大学での学習に積極的に取り組む大学生は同時に、学習を否定的に捉えている傾向にある。

表５－１４　学習生活変数の因子分析

	積極的学習	学習への否定
よく授業に関して討論する	.822	.152
よく予習復習する	.777	.154
専門本を読む	.688	-.050
成績がよいほうである	.614	-.071
教養科目を出席する	.541	-.121
趣味ある科目がある	.447	-.372
出席を苦痛に思う	-.029	.749
必要ない授業を履修しない	.081	.583
勉強に意味が見いだせない	-.096	.470
回転後の負荷量平方和	2.662	1.409
分散のパーセント	29.822	13.871

因子抽出法: 最尤法　回転法: Kaiser の正規化を伴うﾌﾟﾛﾏｯｸｽ法　以下同様。

回帰分析に用いる説明変数は表５－１５に示した。説明変数として、おもに個人の属性と家庭背景、就職意識を示す変数を設定した。そのうち、家庭背景として戸籍、父親の職業や月収、学歴および「縁故」を投入する。また、父親の職業や月収、学歴をダミー変数として扱い、「縁故」は「コネを持っている」と「有力な家庭背景を持っている」という２つの変数を用いる。また、中国の大学は専門性教育を主とするため、大学での学習と強い関連が考えられる「専門領域を就職に生かせる」(5 段階) の項目を、就職意識を示す変数として投入する。そのほか、

進路希望と学習行動との関連を検証するために、「はっきりとした進路希望を持っている」の項目を投入することにした。なお、このモデルは以下の回帰分析にも適用する。

表５－１５　独立変数の説明

属性	X 大学ダミー（X 大学＝1，他大学＝0） Y 大学ダミー（Y 大学＝1，他大学＝0） 性別（男性＝1，女性＝0） 文理系（文系＝1，理系＝0） 学年（4 年生＝1，3 年生＝0）
家庭背景	戸籍（都市＝1，農村＝0） 父親の職業ダミー（専門・管理職＝1，専門・管理職ではない＝0） 父親の月収ダミー（1000 元超＝1，1000 元以下＝0） 父親の学歴ダミー（高卒以上＝1，中卒以下＝0） 「コネを持っている」（４段階） 「家庭背景に恵まれている」（５段階）
就職意識	専門領域を就職に生かせる（５段階） はっきりとした進路希望を持っている（５段階） コネは就職に重要である（５段階）

表５－１６は「積極的学習」の規定要因を検討するものである。学習生活に対する「縁故」の影響が極めて大きいのに対して、就職意識との関連は限定的であった。

表５－１６「積極的学習」因子の規定要因　（基準＝Ｚ大学）

	モデル１	モデル２	モデル３	モデル４	モデル５	モデル６	モデル７
	B	B	B	B	B	B	B
(定数)	-.163	-.248 +	-.177	-.719**	-.797**	-1.808**	-1.190**
X 大学ダミー	.618**	.598**	.581**	.544**	.481**	.436**	.408**
Y 大学ダミー	-.099	-.099	-.079	-.114	-.077	.012	.010
男性ダミー	.048	.040	.049	-.021	-.024	.013	.013
文系ダミー	.133	.126	.117	.138	.158	.089	.105
4 年生ダミー	-.173 +	-.155 +	-.156 +	-.111	-.117	-.105	-.118
都市戸籍ダミー	.133	.135	.010	-.046	-.129	-.091	-.095
はっきりとした進路希望を持っている		-.033	-.025	-.031	.007	.006	.009
父親の職業ダミー			.178	.116	.042	.038	.044
父親の学歴ダミー			.202 +	.200 +	.187 +	.198 *	.200 *
父親の月収ダミー			-.261 *	-.303 *	-.322**	-.293 *	-.299 *
コネを持っている				.255**	.200**	.162**	.176**
有力な家庭背景を持っている					.172**	.159**	.143**
「専門領域を就職に生かせる」を重視						.282**	.294**
コネは就職に重要である							-.181 *
調整済み R2	0.085	0.085	0.105	0.151	0.176	0.239	0.251
F	10.326	8.988	8.052	10.693	11.632	15.496	15.300
N	599	599	599	599	599	599	599

「積極的学習」の規定要因として、「はっきりとした進路希望を持っている」の有意な影響は確認されなかった。明確な進路希望を持つことは、大学生の学習生活にほとんど影響を与えていないことが考えられる。曖昧なキャリアビジョンが消極的な学習態度をもたらすという従来の指摘は否定されたと言えよう。

それに対して、「専門領域を就職に生かせる」を重視することは、「積極的学習」に正の影響を与えている。つまり、「専門領域を就職に生かせる」ことを重視する

大学生は、学習に積極的に取り組んでいることがわかった。専門領域を就職に生かすことを重視する大学生が積極的に学習に取り組むことは、大学での学習に対する就職意識の影響を示す一方、専門教育の限界を示していると考えられる。専門領域を就職に生かす場面しか、大学教育は大学生の就職に機能しないことが指摘されよう。

さらに、「積極的学習」の規定要因として、「縁故」の影響が目立った。自らが「縁故」に恵まれると考える大学生は、大学での学習に積極的に取り組んでいることがわかった。「コネを持たない」大学生の大学における「意欲の喪失」という登坂（2007）の指摘を実証したものではないが、「コネ」を持つ大学生のほうは学習に熱心に取り組んでいることが明らかになった。

一方で、「コネは就職に重要である」と考える大学生は、学習に消極的に取り組むことがわかった。上述の結果から、曖昧な就職意識が「無気力」な学習行動をもたらすという従来の指摘は否定された。それに対して、就職競争における不平等を強く認識することは、大学生の学習に対する意欲の喪失に繋がるということを示唆できる。

また、ランクの最も高いX大学の学生は学習に積極的に取り組んでいる。それは学習生活を大学･専攻別に比較した結果と一致している。家庭背景と独立して、所属する大学は大学生の学習生活に影響を与えていることがわかる。大学の選抜性のほか、ランクの高い大学がより整った学習環境を備えていることも、X大学の学生が学習に熱心である原因だと考えられる。

「縁故」以外の家庭背景の影響は、限定的であった。父親の月収が高い大学生は、学習に対する積極性ではないことが示されている。貧しい家庭出身の大学生が学習に「まじめ」である。しかし、一方で、父親の学歴の高い大学生は学習に積極的に取り組むことも明らかになった。「文化資本」の豊かな大学生は学習に積極的である。社会階層による影響が見られたが、その影響は限定的なものであった。また、親の学歴による正の影響に対して、親の収入は「積極的学習」に負の影響を与えていることから、社会階層の非一貫性がうかがえる。

以上の分析は学習生活の規定要因を、大学生全体を対象に分析を行った。なお、本研究で取り扱うサンプルは独立変数として専攻の偏りが考えられるため、回帰分析で分析する際の配慮が必要だと考えられる。そのため、以下では「積極的学習」行動の規定要因を大学・専攻別に分析を行う。その結果は表５－１７に示される。

表５－１７から、大学および専攻によって、「積極的学習」行動の規定要因に異なる傾向が示されていることがわかる。

表５－１７　「積極的学習」行動の規定要因（大学・専攻別）

	Z 大学（文）		Y 大学（文）		Z 大学（理）		X 大学（理）	
	B	β	B	β	B	β	B	β
(定数)	.775		-1.109	+	-1.637	+	-1.085	
男性ダミー	.115	.063	.209	.089	.121	.058	-.250	-.088
4 年生ダミー	-.108	-.071	-.013	-.007	-.171	-.093	-.177	-.094
都市戸籍ダミー	-.237	-.135	.169	.078	-.399	-.174	-.184	-.095
はっきりとした進路希望を持っている	.151	.221+	.038	.047	-.023	-.026	-.117	-.138
父親の職業ダミー	-.219	-.141	.170	.090	.212	.105	-.036	-.019
父親の学歴ダミー	.150	.097	.198	.106	.092	.051	.307	.154
父親の月収ダミー	-.283	-.156	-.398	-.159 +	-.211	-.106	-.222	-.090
コネを持っている	.073	.077	.233	.219 *	.156	.134	.239	.209*
有力な家庭背景を持っている	.129	.173	.122	.129	.089	.089	.161	.218+
「専門領域を就職に生かせる」を重視	.040	.040	.319	.328**	.351	.314**	.407	.342**
コネは就職に重要である	-.200	-.131	-.239	-.142 +	-.090	-.063	-.346	-.230*
調整済み R2	.043		.235		.122		.421	
F	1.591		5.806		2.839		9.798	
N	158		184		154		147	

「専門領域を就職に生かせる」に対する重視による「積極的学習」への影響は、X 大学、Y 大学と Z 大学の理系にみられた。X 大学、Y 大学の大学生また Z 大学の理科生は、「専門領域を就職に生かせる」ことを重視するほど、学習に高い積極性を示している。それに対して、Z 大学の文科生に両者の関連が見られなかった。

また、「積極的学習」に対する「縁故」の影響も、大学・専攻によって異なる。「縁故」の影響は X 大学と Y 大学にみられたのに対して、Z 大学の文理系に確認されなかった。X 大学と Y 大学の場合、「縁故」に恵まれると考える大学生は大学での学習に積極的に取り組むことがわかった。それに対して、Z 大学の文理系に、「縁故」による有意の影響が見られなかった。大学ランクの不利は、「縁故」の効果を抑えたことが原因だと考えられる。

以上の分析からわかるように、「縁故」が大学生の学習行動に大きな影響を与えているのに対して、就職意識からの影響は部分的かつ限定的であった。また、大学生の学習行動に対する「縁故」の影響は、大学ランクの低下によって制限されることがわかった。では、授業の学習以外の大学生活に対する就職意識の影響はどのようなものなのか。次は大学生活の規定要因の分析によって、就職意識の影響を検討する。

３　正課外の大学生活の規定要因

本節では、正課外の大学生活の規定要因から、就職意識の影響について検討する。

表５－１８は大学生の正課外の大学生活に対する因子分析の結果を示している。因子の解釈について、第 1 因子はカラオケやゲームなど大学生の日頃の遊びを示す項目に構成されているため、「日常の遊び」と称することとした。第 2 因子は、大学生が趣味や習い事に取り組み、専門外の知識や社会について学ぶという項目

から構成されており、「趣味・社会学習」と名付けた。第 3 因子の質問はアルバイトやサークル、ボランティアなどという社会を体験する活動への参加という項目によって構成されているため、「社会参画」と命名した。3 因子の間に正の相関が見られている。

表５－１８　正課外の大学生活変数の因子分析

	日常の遊び	趣味・社会学習	社会参画	4	5	6
よくたばこを吸う	**1.027**	0.031	0.009	-0.016	-0.078	-0.145
よくトランプをする	**0.939**	-0.043	0.046	0.025	0.004	-0.085
よくお酒を飲む	**0.903**	0.057	-0.025	-0.003	-0.040	-0.046
カラオケによく行く	**0.562**	-0.037	-0.087	0.093	0.001	0.241
恋人と過ごす時間が多い	**0.418**	-0.067	0.051	0.026	-0.106	0.279
よくパソコンでゲームする	**0.360**	0.029	-0.232	-0.212	0.317	0.311
暇なときに寝ることが多い	**0.331**	-0.135	0.037	0.060	0.230	0.197
趣味や特長に取り組むことが多い	-0.082	**0.921**	-0.053	-0.016	0.058	-0.134
専門以外の知識を学ぶことが多い	-0.024	**0.835**	-0.049	-0.027	-0.014	-0.062
体育系の習い事をしている	0.041	**0.627**	-0.059	0.020	-0.034	0.088
芸術系の習い事をしている	-0.002	**0.568**	-0.032	0.188	-0.014	0.091
大学の課外活動に参加する	-0.002	**0.414**	0.297	-0.061	-0.053	0.201
社会の出来事を調査することが多い	0.071	**0.368**	0.070	-0.089	0.229	-0.054
アルバイトしたことがある	-0.036	-0.101	**0.772**	0.037	0.073	-0.212
サークルに参加したことがある	-0.074	0.042	**0.675**	-0.015	0.094	0.054
社会経験が豊かのほうだ	0.153	0.095	**0.464**	-0.087	-0.059	0.246
ボランティア活動に参加する	0.041	0.204	**0.375**	-0.036	-0.023	0.119
よくショッピングする	0.060	0.001	-0.091	**0.749**	0.006	0.129
おしゃれに気を使う	-0.022	-0.036	0.026	**0.694**	0.080	0.120
よく旅行する	0.271	0.147	0.062	**0.307**	0.017	-0.025
よく小説や漫画を読む	0.115	0.045	0.108	0.252	0.240	-0.148
よく映画やドラマをみる	0.027	-0.005	0.091	0.054	0.665	-0.024
ネットコミュニティをよく利用する	-0.156	0.071	0.054	0.115	0.319	0.096
よく友人と外食する	0.046	-0.018	-0.044	0.164	0.062	0.584
社会人と接触することが多い	0.266	0.115	0.012	-0.001	-0.073	0.481
回転後の負荷量平方和	5.595	4.659	2.728	2.770	1.525	4.256
分散のパーセント	25.372	10.840	4.808	3.231	2.468	2.079

表５－１９は正課外の大学生活の規定要因を示している。学習生活と同様、大学生活の規定要因として「縁故」の影響が顕著であるのに対して、就職意識の影響は限定的であった。

日常の遊び、趣味・社会学習および社会参画の 3 因子のいずれにも、「縁故」が大きく影響していることがわかる。それに対して、3 因子の規定要因として、社会階層による有意な影響が全く見られなかった。社会背景を示す変数として、「縁故」は大学生の正課外の大学生活に決定的な影響を与えていると言えよう。

日常の遊びにおいて、「縁故」が豊かだと考える大学生は遊び志向が高いことがわかった。また、「縁故」が豊かだと考える大学生は趣味・社会学習に取り組み、社会参画にも積極的である。そのうち、趣味・社会学習や社会参画はキャリアの向上に繋がると考えられる。高い遊び志向を持ちながらも、「縁故」が豊かだと考える大学生は正課外の大学生活に充実に取り組んでいると考えられる。「縁故」は、大学への適応を促すことに効果があると推測できる。

表５－１９　正課外の大学生活の規定要因（基準＝Z 大学）

	日常の遊び		趣味・社会学習		社会参画	
	B	β	B	β	B	β
(定数)	-.903	*	-1.333		-.937	
X 大学ダミー	.623	.273**	.349	.157	.258	.123+
Y 大学ダミー	.198	.094+	-.014	-.007	.048	.025
男性ダミー	.192	.097+	.317	.165**	-.132	-.073
文系ダミー	-.057	-.029	.119	.064	.143	.081
4 年生ダミー	.065	.034	-.230	-.124	-.157	-.089+
都市戸籍ダミー	-.026	-.012	.051	.025	.036	.018
「専門領域を就職に生かせる」を重視	.070	.062	.145	.134**	.128	.124
はっきりとした進路希望を持っている	-.073	-.088+	.038	.047	.055	.073
父親の職業ダミー	.124	.064	.041	.022	-.014	-.008
父親の学歴ダミー	.021	.011	.053	.029	-.024	-.014
父親の月収ダミー	-.026	-.011	-.079	-.035	-.225	-.105
コネを持っている	.048	.042	.206	.186**	.248	.236**
有力な家庭背景を持っている	.274	.325**	.175	.214**	.052	.067
コネは就職に重要である	-.174	-.106*	-.041	-.026	.016	.011
調整済み R2	0.398		0.281		0.105	
F	28.291		17.150		5.863	
N	579		579		579	

「縁故」による影響が大きいのに対して、就職意識の影響は確認されたものの、限定的なものでしかなかった。就職意識を示す項目のうち、「専門領域を就職に生かせる」を重視することだけが、正課外の大学生活に対する有意な影響が見られた。「専門領域を就職に生かせる」ことを重視する大学生は、「趣味・社会学習」または「社会参画」に積極的に取り組む。「専門領域を就職に生かせる」ことを重視することは、大学での経験を卒業後のキャリアと生かそうとすることを意味する。つまり、大学での経験を大学卒業後のキャリアに生かすことを重視する大学生は、キャリアの向上に繋がるように大学生活に取り組んでいると考えられよう。

以上の分析では、「縁故」が豊かだと考えることは大学生の学習および正課外の大学生活に正の影響を与えていることがわかった。「縁故」は大学生の社会化を促しているとうかがえる。

一方で、「縁故」による強い影響に対して、就職意識による影響は限定的でしかなかった。とくに、「はっきりとした進路希望を持っている」ことによる有意な影響は確認されなかった。明確な進路希望を持つことは、大学生の学習と生活にほとんど影響を与えていないとうかがえる。曖昧なキャリアビジョンが消極的な学習態度をもたらすという従来の指摘は否定されたと言えよう。

第４節　まとめと考察

以上の分析により、大きく次のような３点の知見が得られた。

第一に、大学生の進路志向と学習行動との関連は限定的であった。とくに大学ランクの低い大学生には、進路志向と学習行動との関連がほとんど見られなかった。

第二に、進路志向と学習行動の関連として、まったく異なる性格を持つ国有セクター、私有セクターまたは進学を志望する大学生は、いずれも消極的な学習行動を示していた。それに対して、進路決定が曖昧な大学生は大学での学習に積極的である一方、授業以外の学習時間が短いことがわかった。

第三に、「縁故」に恵まれると考える大学生は大学・専攻の選択では将来性を重視し、大学での学習や生活に対して積極的であった。一方で、就職意識による影響は限定的でしかなかった。とくに、「はっきりとした進路希望を持っている」ことによる有意な影響は確認されなかった。

大学生の就職意識の問題として、就職ビジョンの曖昧さによる学習への消極的な取り組みが指摘されてきた。そのような大学生の意識が不足している問題は就職意識の問題の１つとして、中国における大学生バッシングの一部を構成している。しかし、本章での検討はそれを否定する結果を示した。大学生の進路志向と学習行動との関連は限定的でしかなかった。さらに、進路志向をはっきりさせたことで、大学での学習アスピレーションは向上するどころか、むしろ低下させられたことが考えられる。それは中国の大学における専門教育が大学生の進路志向の達成に機能していないためだと考えられる。大学生は希望する進路が明確な大学生は就職や進学の準備に応じた学習をし、大学での学習を軽視することが考えられる。さらに、大学生活の規定要因として、就職意識による影響は限定的でしかなかった。とくに、「はっきりとした進路希望を持っている」ことによる有意な影響は確認されなかった。曖昧な就職ビジョンが学習アスピレーションの低下をもたらすという先行研究の指摘は、必ずしも見られなかった。

一方で、中国の地方における大学生像は大学生の家庭背景、とりわけ「縁故」によって規定されていることがあきらかになった。

就職意識と同様、地方の大学生の大学生活に対する「縁故」の影響も大きなものであった。前述したように、中国では大学への進学を果たしても、家庭背景に恵まれない大学生は不利益な状況から脱出するのに困難が多い。にもかかわらず、中国の大学生のキャリアには、大学生の学歴や成績などアカデミックな業績要因の影響が家庭背景による影響にまさると、多くの研究者によって主張されてきた（岳・文・丁　2004，張　2008 など）。つまり、キャリア達成または社会化過程における階層差は個人の努力によって補えることだとされてきたのである。

しかし、本研究の結果から、「縁故」は独立した変数として、親の学歴や収入、職業にまさる影響を与えていることがわかった。それは大学生活を通じて、大学生の社会化過程を大きく規定している。それは結果的に、中国社会の階層差は「縁故」によって生み出されていることを示唆している。

中国、また中国の地方では、「縁故」は大学生の大学・専攻の志望理由、学習や

大学生活への取り組み、およびキャリア志向という大学生活に一貫した影響を与え、その社会化過程に格差をもたらしている。さらに、社会化過程を通じて大学生の業績要因が規定され、結果的に大学生の就職などのキャリア達成を、「縁故」が間接的に左右していることになる。つまり、直接的な「縁故就職」をたとえ禁じても、「縁故」は陰に陽にキャリア達成を左右する要因として機能する。中国の場合、文化資本による階層の再生産より、「縁故」が階層の再生産を担う中心的役割を果たしているとも考えられよう。

また、大学生の大学生活への取り組みから、ミクロレベルにおける「縁故」の再生産過程がうかがえる。本研究の結果から、高い「縁故」を持つ大学生が社会参画などに積極的に取り組んでいることがわかった。「縁故」の豊かな大学生が積極的に社会参画することは、社会経験を豊かにするほかに、自らのネットワークを広げていく過程でもあると考えられる。このような「縁故」の再生産は、社会化を促すと同時に、階層の再生産を導くものとして捉えられる。

さらに、曖昧な就職意識が「無気力」な学習行動をもたらすという従来の指摘は否定された一方、就職競争の不平等に対する認識は、大学生の学習に対する意欲の喪失に繋がることが示唆されている。「縁故」が就職において重要だと考える大学生は、学習に消極的であるとが明らかになった。就職の不平等は大学生の学習アスピレーションに負の影響を与えていると指摘できよう。

大学生の就職意識および大学生活の規定要因に対する分析から、「縁故」が大学生活という学校経験を通じて大学生の社会化に対する影響を検証した。さらにその結果に基づき、中国における階層の再生産が「縁故」を中心として行われていることを示唆したことに本研究の意義の１つとして考えられよう。これによって、今までの大学生バッシングをとらえ直し、大学生像を捉えなおしたと言えよう。次章では、今まで明らかにされた中国の地方における大学生の実態と照らし合わせながら、中国の地方大学における就職指導である職業生涯教育の現状と実態を明らかにし、その課題を提示する。

第６章　地方大学における職業生涯教育

本章の目的は、中国の大学におけるキャリア教育である「職業生涯教育」[1]に着目し、その導入および実施状況をインタビューにより明らかにすることで、「職業生涯教育」が抱える問題の構造と実態を検討することである。

前述したように、「計画経済時代」の中国では、大卒者は「統一分配制度」によって各職場へ配置された。そのため、大学による就職指導はほとんど見られず、就職に対する大学のかかわりは、戸籍の転出など手続きを行うことに留まっていた。そのような状況は、1990 年代まで続いた。

計画経済時代から市場経済時代へと転換する 1980 年代を経て、大学生の就職は「自由就職制度」への転換を遂げ、就職における大学生の主体性が強調されるようになった。それと同時に、市場経済時代の要請に応じて大学入試の募集定員が大幅に拡大され、大卒者の就職難を促すことになった。それを背景に、大学による就職指導が要請されるようになった。

就職指導に対する社会の関心は、大学生のキャリア形成にもある。それは、就職戦争の激化を促す原因として、旧式の大学教育が生み出す画一的な人材は多様化を求める労働市場との間に大きなギャップを生じさせていることが指摘されている（蘇　2000 など）からである。それを背景に、今まで専門性の育成を強調し、エリート教育を行ってきた大学には、学生のキャリア形成への支援が求められた。とくに、大学生の就職意識の問題が大卒者の就職難をもたらす一要因だと指摘される中、「正しい職業観」の育成が大学教育の課題とされ、職業生涯教育の大学への導入が促された。このように、就職指導の台頭により職業生涯教育が提起され、職業生涯教育は中国の大学における就職指導の核心となった。

大学生の就職意識の修正という問題意識のもとで、職業生涯教育は全国的に拡大されていった。これまで大学生の就職を入学者募集、入学手続きと一括に取り扱ってきた大学の「入学・就職室（「招生就业办公室」）から、「就職指導室（就业指导办公室）」が独立して設置され、さらに間もなくして「キャリアセンター（生涯规划指导中心）」へ衣替えした（孫　2008）。職業生涯教育に関わるこれらの変化は、大学改革または就職難対策の華々しい成果として政府や大学によって宣伝されている。なかでも、大卒者の就職難の原因とされる大学生の意識問題に対する取り組みが強調されてきた。

一方、大学における職業生涯教育の抱える問題が指摘されてきた（孫　2008，王　2011 など）。具体的には、「アメリカの模倣でしかない」という理論上の不備や、専門性のある教職員や資金の欠如などである。つまり、職業生涯教育の限界が露呈してきたことがうかがえよう。

しかし、これらの研究は問題の提示にとどまり、職業生涯教育の実態と構造を

実証的な資料を挙げて検討していない。ましてや中国の大学における職業生涯教育はどのようなもので、どのように実施されているかなど具体的な検討もほとんどなされてこなかった。

では、それらの問題はどのように生成され、どのように教育現場に反映されているのか。また、大学生や就職指導係はそれをどのようにとらえているのか。職業生涯教育の実態および構造を整理し検討することで、中国の大学における就職指導に示唆を与えられるであろう。

以上の問題意識を踏まえて、本研究では、中国の大学における職業生涯教育の現状と課題を、大学生に対するアンケート調査、および大学教員と学生へのインタビューを用いて検討する。

第１節　職業生涯教育の導入

職業生涯教育の大学での展開を検討するまえに、まず、政策関連文書などから「職業生涯教育」という枠組みの基本的な性格について考察しよう。

１　急速な拡大

職業生涯教育は中国の大学で急速な拡大を遂げた。本節では、職業生涯教育の導入プロセスから、その急速な導入・拡大を促すメカニズムを考察する。

職業生涯教育が中国の大学において初めて登場したのは、2000 年に北京大学などの一流大学によって主催された「大学生職業生涯設計」巡回講演であった。それを限られた一流大学から全国レベルに拡大させたのは、中国教育部が 2006 年に主催した「中国大学生職業生涯設計コンクール」であった。その背景となったのは、大学の入学者募集定員の拡大が政策的に促された 2000 年に加え、2004 以降の大卒者の就職難の発生と深刻化であった（裴　2011）。

「中国大学生職業生涯設計コンクール」は、政府の「大学卒業生の“基層（農村や貧困地区など）”への就職を誘導、奨励するための意見」（2005）に応えるために計画されたもので、大学生が自らのキャリアを考え、それを論文にまとめて報告するスピーチコンクールである。コンクールの開催にあたって、中国政府は地方政府を通して、各地方の大学の就職指導係に就職指導に関する講習を義務付け、大学生に「職業生涯設計」の指導を行うことを要請した。さらに、各地方の全国代表の選出を要請したことで、大学代表から地方代表へと、地方レベルの予選が繰り返され、全国の大学を動員することになった。コンクールに応募した大学生は 12 万人で、27 省における 700 超の大学が参加することになったという[2]。さらに、「中国大学生職業生涯設計コンクール」は開催する度に応募者の増加が見られた。2012 年に 1403 大学 100 万人の大学生が参加するに至り[3]、職業生涯教育は全国の大学に一挙に普及したのである。

「中国大学生職業生涯設計コンクール」の盛況の背後に、政府が強力に推進したことがある。とくに、コンクールの積極的な参加または受賞は、地方政府の業績、大学の業績の評価と直結するように仕組まれ、政府による統制が強いものだと考えられる。

職業生涯教育拡大の後を追うように、中国教育部はそれを正課にするよう要請した。2007 年、中国教育部は就職指導を正課にする際、そこで職業生涯教育を取り入れるように提示した（「大学生职业发展与就业指导课程教学要求)）。さらに、2011 年、大学の就職指導に関する中国教育部の文書では、職業生涯教育のカリキュラムへの導入が義務化された。その具体的な内容は以下の通りである。

> カリキュラムとカウンセリングに関して：カリキュラムに就職指導を取り入れる。職業生涯教育や起業教育の教育システムを作成し、現状に基づいた特色のある指導によって就職指導の目的性、有効性を高める。
> （2011 教育部关于作好 2012 年全国普通高等学校毕业生就业工作的通知）

さらに、2013 年、教育部は職業生涯教育の実施に関わる大学の就職指導係、とりわけ学年チーフ（大学の各学部で学生支援や就職指導を実質的に担当する者）向けに実施される講習内容の要項において、キャリア設計に関する基礎知識の習得を強調した。

以上からわかるように､職業生涯教育は政府の推進により急速な拡大を遂げた。では、どのような目的のもとで職業生涯教育の急速な導入と拡大が要請されたのか。次節では、政府は職業生涯教育の目的について具体的に検討する。

２　統制される職業生涯教育と就職意識

職業生涯教育の役割に対する政府の要請を整理すると、大学生の就職意識に関する記述が多々見られた。

職業生涯教育の全国レベルの拡大を促した「中国大学生職業生涯設計コンクール」の目的として、大学生の農村や貧困地区などの「基層」とくに「基層」の中小企業へ就職すること、つまり「正しい就職意識」の育成を促すことが挙げられている[4]。そのような目的は後の職業生涯教育の実施にも大きく影響するものであった。

また、2009 年、中国教育部は職業生涯教育と「大学生の思想・政治教育」との融合を提唱し、職業生涯教育に国家利益を反映することを要請した。そこで、大学生の「理想、信念の育成」、また「就職の方向性」を提示することがその目標とされた。ここでいう「理想、信念の育成」、また「就職の方向性」とは、国の利益を優先すること、また「基層」などでの就職をビジョンに入れることだと解釈で

きる。

さらに、同年、就職支援の事例として職業生涯設計への支援が挙げられた。以下はその実施目的を記述している。

> 湖南省は多様な職業生涯設計や就職教育などを通して、大学生の就職意識と就職志向の調整を促すように取り組んだ。（2009　教育部办公厅关于印发部分地区积极促进高校毕业生就业工作举措有关材料的通知）

さらに、2013 年大学の就職指導の末端である学年チーフにも、就職意識に対する働きかけを講習内容として取り上げている。その目的に関しては以下のように記述されている。

> 学年チーフの講習内容：職業生涯設計に関する教育。職業生涯設計の基礎知識、理論および方法論の教学を実施する。大学生の職業生涯設計（キャリアデザイン）を援助できるように能力を高め、学生の正しい職業観、就職観などの育成、または社会への適応を促進する。（2013　普通高等学校辅导员培训规划（2013-2017））

以上の記述では、中国の大学における職業生涯教育の目的として、大学生の就職意識の修正が強調されている。それは大学生の「高望み」な就職意識「問題」に由来したと考えられる。つまり、農村部や貧困地区への就職を嫌がる大学生の就職意識を修正するための道具、また大卒者の就職難への対応が求められる政府の「アリバイ作り」として職業生涯教育が導入された。

第２節　大学による職業生涯教育の実態

では、中国における職業生涯教育は実際どのように取り組まれ、どのように評価されているのか。また、それはどのように機能しているのか。本節では、中国の地方における大学の職業生涯教育の実態と課題について検討する。

１　データの概要

中国の大学における職業生涯教育の実態を明らかにするために、就職指導係および大学３年生と４年生にそれぞれ半構造化インタビュー調査とアンケート調査を行った。

インタビュー調査は 2010 年 6 月と 2013 年 3 月と２回に行った。第１次調査はパイロッドスタディとして、山東省の総合大学３校（X、Y、Z 大学）の就職指導係３名（A 先生，B 先生，D 先生）を対象に行った。調査の２回ともに就職指導、

または職業生涯教育の実施内容と実施状況、大学生の就職事情について質問した。なお、A 先生と B 先生はそれぞれ X 大学と Y 大学の職業生涯教育全般の運営、管理に携わるリーダー役であるのに対して、D 先生は Z 大学の一学部の学年チーフとして職業生涯教育の実施に携わっている。主調査である第２次調査の概要は本研究の第３章に示している。

質問紙調査も２回にわたって行った。２回とも X、Y、Z の３大学を対象としたものである。第１次調査の調査対象の構造として、青島大学 32%、曲阜師範大学 33%、山東大学 35%である。また、そのなかの 59%は男性で、41%は女性であった。第１次調査の結果にもとづき、2011 年 9 月、３大学の大学生 1000 人に、アンケート調査を行った。その概要については第３章に示している。アンケートには職業生涯教育の現状だけでなく、大学生の就職意識や進路選択・就職活動の現状について質問を設けた。

ここで地方をフィールドとすることは、以下のような意義を持つと考えられる。

第１に、政府が職業生涯教育を推奨する際に北京や上海など大都市の大学を「モデル大学」として多く紹介してきたのに対して、地方の大学における実態はほとんど把握されてこなかった。

第２に、政府からの資金的、技術的サポートに恵まれ、注目を浴びる大都市の大学と比べて、全国に多く散在する地方の大学は職業生涯教育という新たな教育スタイルの実施において抱える問題が大きいと考えられる。

第３に、職業生涯教育の課題を提示した大学生の就職意識の問題などの大学生研究は、北京や上海などという大都市、または上位大学を調査対象としたことが多く、それを土台とした職業生涯教育は地方の大学生のリアリティに応えられていない可能性がある。そのため、地方の大学における職業生涯教育の実施を検討することは中国の就職指導を問い直す大きな鍵となる。

本節では大学の就職指導係に対するインタビューを分析し、職業生涯教育の実施状況を把握したうえで、アンケート調査の結果を用いて、大学生の職業生涯教育に対する認識、利用と評価を明らかにする。最後に、大学生の職業生涯教育の利用がその就職意識にどのように関連するのかについて分析し、大学における職業生涯教育の効果を検討する。

２　データの分析

（１）　多様な職業生涯教育

まず、大学の就職指導係に対するインタビューを通して、大学における職業生涯教育はどのようなものがあるかについて明らかにする。その分析から、地方の大学は政府の要請に対応する職業生涯教育を実施していることがわかる。

インタビューは、職業生涯教育として取り組まれたカリキュラムが多様である

ことを提示している。おもに「職業生涯企画」いわゆる「キャリアデザイン」をカリキュラムへの追加、起業教育やボランティアなどの社会体験活動などの開催、資格や専門知識講座、キャリア意識に対する指導などが挙げられている。

職業生涯教育としてまず挙げられたのは「職業生涯企画」の授業であった。「職業生涯企画」は Career Design の訳語である。大学生が自己認識・社会認識を深めることで、自らのキャリアライフを考えるように指導することを目的とする。また、大学生の就職意識の修正を要請する政府に応えるように、「職業生涯企画」による「高望み」の問題の修正は大いに期待されている。

A 先生：まずは教養科目だね…「職業生涯企画」を、カリキュラムに組んだ。（2010 年 6 月 28 日）

D 先生：今の学生はみんな授業を受けているね。「職業生涯の企画と発展」という（授業）。（2010 年 6 月 25 日）

また、大学生の社会認識を促す指導として、社会活動の開催が挙げられている。それについて、B 先生は農村におけるボランティア活動や、地方の役所での職場体験などを挙げている。その語りは以下のように示す。社会活動のフィールドを農村または地方に設置したのは、大学生の「基層」への就職を促すためであり、政策への対応がうかがえる。

B 先生：夏休みに…農村に行って、ボランティア活動を行う。…地元の市役所にいって、資料整理を手伝う。（2010 年 6 月 7 日）

さらに、大学による職業生涯教育の一環として、政府の要請に応える起業教育の実施も挙げられている（B 先生）。就職意識の問題として指摘される大学生の消極的な就職態度に対処するために、大卒者による起業が政府によって提唱されてきた。その起業教育も地方大学における職業生涯教育に見られた。

B 先生：うちの大学は起業指導センターと協力し、かれらの育成基地である。それでこの関連の講座も多い。（2010 年 6 月 7 日）

そのほかにも、学生支援を担当する各学年の就職指導係による日ごろの意識指導や、職業に結び付くような専門職コースの開設など、職業生涯教育のさまざまな形式が語られている。それに関する語りは下記のように示す。

D 先生：社会の需要、どんな人材がほしいかに合わせて、各学科が自分の専攻の性格に沿って専門講座を作るの。たとえば、文学部は今、

アナウンサーと秘書という２つのコースを作った。…資格を持ったほうが就職しやすいね。あと…目的意識をはっきりするように指導するね。…今までは規模が大きいサークル（活動に参加すること）を勧めてきたが、今は趣味や能力を伸ばすなど、キャリアを意識した指導を行うように心がけている。　（2010 年 6 月 25 日）

以上の聞き取り調査の結果は、中国の大学における職業生涯教育の多様な形式を呈している。また、その取り組みに大学生の就職意識の問題の「修正」、つまり、政府の要請への対応が見られた。では、これらの職業生涯教育について、大学生はどのように受け止め、取り組んでいるのか。次節では、職業生涯教育に対する大学生の考え方と取り組みを検討する。

（２）　職業生涯教育に対する大学生の考え方と取り組み

本節では、中国の地方都市における大学生が職業生涯教育に対する考え方と取り組みについて、アンケート調査の結果を通して検討する。ここで、第１次聞き取り調査の結果を踏まえて、職業生涯教育を「就職ノウハウ講座」「進路相談」「社会経験講座」「インターンシップの支援」「就職情報の提供」「社会体験活動の開催」「資格や専門性講座」「職業生涯企画」「起業教育」「就職意識の指導」という１０項目からとらえる。

表６－１は大学生が職業生涯教育についてどのくらい大学に期待しているのかを示している。この表から、大学生の職業生涯教育に対する期待がうかがえる。

表６－１　職業生涯教育をどのくらい大学に期待しているのか（%）

	とても期待している	期待している	あまり期待していない	まったく期待していない	合計
就職ノウハウ講座の開催	34.1	43.6	18.9	3.4	100.0(730)
進路相談	23.9	47.2	24.3	4.6	100.0(723)
社会経験講座の開催	44.2	38.0	14.1	3.7	100.0(724)
インターンシップの支援	41.5	43.7	12.4	2.3	100.0(725)
就職情報の提供	48.7	40.2	8.5	2.6	100.0(727)
社会体験活動の開催	44.5	40.5	11.3	3.7	100.0(726)
資格や専門講座の開催	31.0	42.7	22.5	3.8	100.0(729)
職業生涯企画	44.2	40.2	12.0	3.6	100.0(728)
起業教育	48.1	37.7	11.4	2.8	100.0(727)
就職意識の指導	40.3	37.2	18.2	4.3	100.0(725)

職業生涯教育を示すすべての項目に、7 割以上の大学生が期待している（「とても期待する」+「期待する」）と答えている。その中、とくに「就職情報の提供」（88.9%）「起業教育」（85.8%）「インターンシップの支援」（85.2%）「社会体験活動の開催」（85.0%）への期待が高い。大学生が就職情報の提供、または社会体験型の職業生涯教育を期待していると考えられる。

では、大学生はこれらの項目の提供をどのくらい認識できているのか。表６－２は「以下のような職業生涯教育の形式は大学によって提供されているか」について尋ねた結果を示している。そこから、職業生涯教育の提供は大学生によってそれほど認識されていないことがわかる。

以上で挙げた各形式の職業生涯教育が対象大学に提供されていることは、上述したインタビュー調査に加え､調査フィールドの下見調査で明らかにされている。にもかかわらず、もっとも認識されているのは「進路相談」であり、大学３，４生の 81.8%にしか認識されていなかった。さらに、インタビュー調査の結果から最初に挙げられた「職業生涯企画」について、その実施を認識しているのは 51.6%でしかなかった。大学による職業生涯教育の実施は大学生に行き届いていないように見受けられる。

表６－２　職業生涯教育は大学によって提供されているか (%)

	提供している	提供していない	合計
就職ノウハウ講座の開催	69.7	30.3	100.0(644)
進路相談	81.8	18.2	100.0(632)
社会経験講座の開催	59.5	40.5	100.0(627)
インターンシップの支援	62.1	37.9	100.0(618)
就職情報の提供	73.3	26.7	100.0(621)
社会体験活動の開催	66.0	34.0	100.0(618)
資格や専門講座の開催	60.0	40.0	100.0(618)
職業生涯企画	51.6	48.4	100.0(614)
起業教育	76.3	23.7	100.0(617)
就職意識の指導	58.6	41.4	100.0(619)

表６－３は職業生涯教育に対する大学生の利用を示している。各項目の利用状況に大きな差がみられなかった。

表６－３　職業生涯教育をどのくらい利用しているか（%）

	よく利用する	たまに利用する	あまり利用しない	全然利用しない	合計
就職ノウハウ講座の開催	11.2	55.6	28.3	4.8	100.0(498)
進路相談	12.5	47.2	33.4	6.8	100.0(574)
社会経験講座の開催	12.7	53.4	28.1	5.9	100.0(442)
インターンシップの支援	15.0	47.7	30.7	6.5	100.0(459)
就職情報の提供	16.3	46.9	31.0	5.7	100.0(522)
社会体験活動の開催	14.3	49.5	28.1	8.1	100.0(481)
資格や専門講座の開催	19.3	47.0	27.5	6.1	100.0(440)
職業生涯企画	15.9	49.1	26.7	8.3	100.0(397)
起業教育	12.5	49.6	27.9	9.9	100.0(544)
就職意識の指導	12.6	46.6	30.7	10.1	100.0(436)

各形式の職業生涯教育を利用する（「より利用する」＋「たまに利用する」）大学生は５～６割であり、ある程度利用されているようにみえる。しかし、その利用度を全サンプルにおける割合が非常に低く、職業生涯教育がそれほど利用されていないことがわかる。

アンケートでは、さらに大学に提供された職業生涯教育に対する大学生の評価について質問した。その結果は表６－４に示した。職業生涯教育に対する評価においても、各項目の間に大きな差が見られなかった。

表６－４　職業生涯教育はどのくらい役に立っていると思うか（%）

	とても役立つ	役立つ	あまり役立たない	全然役立たない	合計
就職ノウハウ講座の開催	15.8	47.4	35.5	1.3	100.0(468)
進路相談	12.0	46.7	39.3	2.1	100.0(527)
社会経験講座の開催	16.8	54.4	28.0	0.7	100.0(410)
インターンシップの支援	19.4	53.6	26.1	1.0	100.0(418)
就職情報の提供	22.1	51.0	25.0	1.9	100.0(484)
社会体験活動の開催	18.2	52.5	26.7	2.5	100.0(434)
資格や専門講座の開催	19.2	53.0	25.6	2.2	100.0(406)
職業生涯企画	20.3	52.9	24.5	2.2	100.0(359)
起業教育	20.5	53.8	24.2	1.4	100.0(483)
就職意識の指導	21.3	47.8	29.1	1.8	100.0(385)

全体として、利用経験のある大学生の５~７割は職業生涯教育の各項目に対して役に立っている（「とても役立つ」+「役立つ」）と考えている。職業生涯教育の効果は比較的に肯定的に捉えられているが、否定する大学生の割合も 3～４割ほどみられている。職業生涯教育に対して、それを利用した大学生の評価は賛否両論である。

そのうち、「進路相談」（58.7%）と「就職ノウハウ講座の開催」（63.2%）が最も低く、就職ノウハウ講座と進路相談の利用者の多くはその効果を否定的にとらえていることがわかる。それに対して、「起業教育」（74.3%）「キャリアデザイン」（73.2%）「インターンシップに対する支援」（73.0%）などを評価する大学生は利用者の７割を占め、比較的に肯定的にとらえられていることがわかる。各項目に対する評価はそれに対する大学生の期待度と一致している。大学生の需要に応えた項目ほど、高い評価を得ている。

以上の結果からわかるように、大学生は職業生涯教育、とくに就職情報の提供や社会体験型の活動に大きく期待している。しかし、職業生涯教育がある程度普及しているものの、それほど大学生に知られていない。大学による職業生涯教育の実施は大学生に行き届いていないと考えられよう。また、それを利用した大学生の評価は賛否両論であった。

さらに、各形式の職業生涯教育に対する大学生の考えと取り組みに大きな差が見られなかった。それは職業生涯教育の各形式が大学によって一本化されていることに原因があると考えられる。社会認識と自己認識を深める指導を主要内容とする「職業生涯企画」の教科に、それに関わる「就職ノウハウ講座」や「就職意識の指導」などのカリキュラムが凝縮されたと考えられる。職業生涯教育の実態を教育現場から捉えなおす必要がある。

では、どのような大学生が職業生涯教育に取り組み、職業生涯教育に取り組む

ことは大学生の就職・進路状況にどう影響するのか。次節では、職業生涯教育と大学生の就職・進路との関連について検討する。

（３）　職業生涯教育と大学生の就職・進路との関連

本節では、大学生の職業生涯教育の利用とその就職・進路状況との関連について検討を行う。

表６－５は表６－３の大学生の職業生涯教育に対する利用を「よく利用する」を４、「全然利用しない」を１として算出した平均値を、就職・進路状況別に比較したものである。

表６－５　職業生涯教育の利用と就職･進路状況との関連

	就職か進学かを決められない			就職情報の収集に困っている			就職のために何をすればいいかがわからない			キャリアビジョンがしっかりしている			就職に自信を持っている		
	はい	いいえ		はい	いいえ		はい	いいえ		はい	いいえ		はい	いいえ	
就職ノウハウ講座の開催	2.89	2.62	**	2.79	2.71		2.87	2.62	*	2.84	2.69		2.83	2.59	*
進路相談	2.76	2.59		2.67	2.62		2.77	2.55	*	2.75	2.53	*	2.75	2.51	*
社会経験講座の開催	2.79	2.7		2.71	2.81		2.87	2.61	*	2.86	2.6	*	2.79	2.64	
インターンシップの支援	2.72	2.71		2.66	2.83		2.82	2.62		2.88	2.51	**	2.8	2.54	*
就職情報の提供	2.8	2.71		2.7	2.88		2.89	2.58	**	2.91	2.6	**	2.85	2.57	*
社会体験活動の開催	2.72	2.66		2.65	2.79		2.82	2.53	*	2.78	2.6		2.82	2.56	*
資格や専門講座の開催	2.89	2.75		2.81	2.81		2.85	2.69		2.92	2.6	*	2.88	2.67	
職業生涯企画	2.82	2.63		2.73	2.8		2.8	2.57		2.81	2.54		2.82	2.53	*
起業教育	2.72	2.58		2.61	2.73		2.81	2.49	**	2.78	2.43	**	2.75	2.46	*
就職意識の指導	2.69	2.58		2.57	2.71		2.74	2.44	*	2.72	2.53		2.75	2.38	**

注：ｐ＜0.01 は*，ｐ＜0.001 は**として示す。以下同様。

職業生涯教育をうけることで、大学生の就職への自信が高くなった。「就職に自信を持っている」大学生が「就職ノウハウ講座」を利用するのは 2.83 であるのに対して、そうでない大学生は 2.59 である。「就職に自信を持っている」という大学生はそのほかにも、「進路相談」「就職情報提供」「起業指導」「社会体験活動」「就職意識指導」などを利用している。

また､職業生涯教育の利用は大学生に就職における自信を持たせただけでなく、しっかりしたキャリアビジョンの養成にも機能しているようにうかがえる｡「就職のために何をしたらいいかが分からない」に対して、職業生涯教育を利用した大学生は否定的な意見を示している。職業生涯教育を利用した大学生は、就職ノウハウを認識できていると考えられる。また、職業生涯教育を利用した大学生は、自らが「キャリアビジョンがしっかりしているほうだ」と考えている。

しかし、大学別に職業生涯教育の利用と大学生の就職・進路状況との関連を検討した結果、両者の関連性がほとんど見られなくなった。また、進路志向、とりわけ「就職するか進学するか」を限定した場合にも、両者の関連はほとんど有意でなくなった。職業生涯教育の利用と大学生の就職・進路状況との関連は限定的だと考えられる。

表６－６は、表６－５で用いた職業生涯教育に対する利用度の平均値を大学・文理系別に比較したものである。ほかの大学と比べて、ランクの高いＸ大学の学生は職業生涯教育を利用している。また、第４章の分析では、Ｘ大学の学生はほかの大学生より就職および自らのキャリアビジョンに自信を持っているだけでなく、就職を志望し、そのためか「就職のために何をしたらいいかが分からない」と考えていることが明らかになった。つまり、ここで見られた就職・進路状況と職業生涯教育の利用との関連は、大学およびそれと関連する大学生の進路志向の影響を介したものだと考えられる。

表６－６　大学･文理系別にみる大学生が職業生涯教育に対する認識と取り組み

	どのくらい利用しているか					どのくらい役に立っていると思うか				
	Ｘ大学	Ｙ大学	Ｚ大学（理系）	Ｚ大学（文系）		Ｘ大学	Ｙ大学	Ｚ大学（理系）	Ｚ大学（文系）	
就職ノウハウ講座の開催	2.98	2.67	2.58	2.68	**	3.18	2.66	2.53	2.71	**
進路相談	2.84	2.42	2.71	2.69	**	3.04	2.59	2.53	2.61	**
社会経験講座の開催	2.85	2.68	2.62	2.72		3.03	2.85	2.63	2.88	*
インターンシップの支援	2.8	2.55	2.63	2.84		3.06	2.84	2.81	2.92	
就職情報の提供	2.83	2.66	2.69	2.78		3.14	2.83	2.81	2.94	*
社会体験活動の開催	2.85	2.61	2.65	2.68		2.99	2.79	2.8	2.86	
資格や専門講座の開催	2.86	2.5	2.88	2.93	**	3.1	2.79	2.72	2.9	*
職業生涯企画	2.9	2.59	2.65	2.7		3.01	2.84	2.79	2.96	
起業教育	2.96	2.49	2.53	2.63	**	3.03	2.92	2.8	2.96	
就職意識の指導	2.86	2.45	2.55	2.59	*	3.12	2.82	2.62	2.86	**

しかし、職業生涯教育の利用は必ずしも大学生の就職・進路状況に機能していないとは言えない。Ｙ大学の場合、「インターンシップに対する支援」の利用、またＸ大学の場合「就職を見込んだ資格や専門知識講座」の利用は大学生のキャリアビジョンの決定と正の関連を示している。また、Ｘ大学の場合、「持つべき就職意識に対する指導」の利用は「就職に自信を持っている」との間にも正の関連が見られた。限定的でありながらも、ランクの高い大学における職業生涯教育は大学生のキャリア･ビジョンの決定､または就職に対する自信に繋がっていると考えられる。ランクの高い大学における職業生涯教育は、大学生の就職にある程度機能していると言ってよかろう。

（４）　まとめと考察

大学による職業生涯教育に関する分析から、本研究で得られた主な知見は下記のとおりである。

第１に、中国の大学における職業生涯教育は多様な形式を取っており、その多くは政府の要請に対応したものである。

第２に、大学による職業生涯教育は大学生によって期待されているが、大学による提供が知られておらず、利用度も決して高くない。また、利用したという大学生の一部に肯定的な態度が見られるが、その全体における割合は低い。

第３に、職業生涯教育の利用と大学生の就職・進路状況との関連は限定的なものであるが､ランクの高い大学における職業生涯教育は大学生のキャリア･ビジョンまたは就職に対する自信に機能している。

大学による職業生涯教育は近年導入されたものとして、その普及は速いものだといえよう。ただし、大学間における高い普及度と裏腹に、大学内部での普及が行き届いていないことが指摘される。それは、職業生涯教育が大学によってさまざまな形で行われているのに対して、大学生の多くはそれを知らないでいることからうかがえる。

また、実施内容の多様性が見られる一方、中国の大学における職業生涯教育は十分に機能できていないことが考えられる。職業生涯教育の利用と大学生の就職・進路状況との関連が限定的であった。大学生の就職または就職意識に対する考察が欠如するがゆえに、それを土台とした職業生涯教育と大学生の就職現状との間にギャップが生じ、その機能が制限されたと考えられよう。大学生の就職意識や現状を正確に把握した上での取り組みが促される。

本節では、中国の大学における職業生涯教育の現状を把握するものとして検討を行った。しかし、職業生涯教育の形式は多様であり、それを捉えるに限界がある。教育現場における就職指導係や大学生の主観的認識によって、職業生涯教育の実態と課題を検討する必要がある。

第３節　職業生涯教育に対する評価と課題

以上の調査に基づき、本節では大学の就職指導係および大学生の語りから中国の大学における職業生涯教育の実態に迫りたい。分析枠組みとして、まず、就職指導係の語りを用いて各大学における職業生涯教育の導入と実施の実態を明らかにする。次に、職業生涯教育に対する就職指導係の評価、および大学生の認識や評価を考察する。

１　職業生涯教育の導入と実施に対する評価

先に、中国の大学における職業生涯教育の拡大プロセスおよびそれに求められた課題を政策から読み取った。では、大学の現場では職業生涯教育はどのように展開されているのか。本節では、大学の就職指導係の語りから職業生涯教育の教育現場への導入と実施について分析する。

（１）　政策に忠実に応える大学

職業生涯教育に対する大学の就職指導係の理解から教育現場における職業生涯教育の位置づけを明らかにする。就職指導係の語りから、職業生涯教育の導入に

おける地方大学の受動性が指摘できる。その受動性は政策を鵜呑みにする大学の対応からうかがえた。

まず、「職業生涯教育ってどんなことをやっていますか」という筆者の質問に対して、多くの就職指導係は「授業科目の一つ」だと答えた。また、同じ質問に対して X 大学の A 先生は「職業生涯企画」の授業で使用する教科書を差し出した。就職指導係が職業生涯教育を授業科目の一つだと確信する様子は以下の場面から推測できる。

＊：職業生涯教育ってどんなことをやっていますか。
F 先生：あれは…授業科目の一つね…
＊：具体的に言うと…
F 先生：まあ、ある仕事にどういう能力、どういう素質の人材を求めるか…みたいな、目標をはっきりしないとね。これよ、（本を差し出して）政府が配っている、優秀な事例とか（が載っている）。
＊：これをモデルにやるのですか？
F 先生：そう、カリキュラムに組まれたからね。　（2013/2/15）

＊：職業生涯教育ってどんなふうに考えていますか。
A 先生：必要な技能をマスターしてもらって、就職してからの適応期間を短縮させるようにね。
＊：どんなことをやっていますか。
A 先生：あ、教科書があるよ、確か（教科書を探す）。
（2013/3/5）

政策に指摘された「特色のある」教育形式を求めながら、実際の職業生涯教育の実施に関してはカリキュラムに取り込むことが強調されるのみであった。就職指導係が職業生涯教育を多様で特色のあるものとしてではなく、科目の一つとしてとらえることから、職業生涯教育のカリキュラムへの導入という政府の要請に忠実かつ形式的に応える大学の姿勢がうかがえる。これらのケースでは、導入の条件が十分ではないにもかかわらず、政策に忠実に応えようとする地方大学の姿がうかがえる。

加えて、F 先生は職業生涯教育が取り組まれた背景について、「カリキュラムに組みこまれたから」と語っている。その語りは、政府から押し付けられた職業生涯教育を機械的に受け入れる大学側の受動性をさらに表したものである。また、就職指導係の職業生涯教育に対する理解がその正課化に留まることから、「正しい職業観」など就職意識の修正に基づいたキャリア設計をサポートすることには限

界があると考えられる。

さらに、職業生涯教育の概念に対する理解だけでなく、現場における就職指導係がとらえる職業生涯教育の意味づけも、政策を反映したものであった。

先に述べたように、職業生涯教育が推奨されるきっかけとして最も多く語られてきたのは大学生の就職意識の問題への対応であった。F 先生の以下の語りは、そのような政府の問題意識を忠実に受け止める就職指導係の姿を表している。

＊：職業生涯教育は何のために取り入れられたと思いますか。

F 先生：…就職意識の問題でしょう。意識を変えないといけないね、就職の。今は安定を求めるよね、大学生はみんな。…授業の時もいつも注意しているけど、一生に１つの仕事に終始するって考え方は捨てろって。（2013/2/15）

就職意識の問題としての「高望み」問題（張・劉　2006，趙　2010 など）は、ここでは、最も多くあげられてきた大手志向ではなく安定を求めることだと認識されている（F 先生など）。第３章で明らかにした地方の大学生の就職意識の特徴と一致している。つまり、地方の大学生の就職に日々携わってきた就職指導係は自らの経験に基づき、本来政府が提示した就職意識の問題を再構成したのである。

しかし、就職指導係は自らの経験に基づき、大学生の就職意識の問題を捉えなおしたものの、結果的にそれを就職意識の問題に対する批判に回帰した。F 先生は大学生の就職意識を、安定を求め、一生に１つの仕事に終始することだととらえている。それは地方の大学生の特徴に基づいた認識である。一方で、F 先生はそのような就職意識の修正が必要だと考え、そういう考え方を変えるように大学生に指導している。つまり、大学生が一つの仕事に一生勤めると考え、初職に安定性を志望することが、地方の「高望み」問題として認識されていた。就職意識に対する認識は変わっても、それが問題視されることは免れなかった。

以上の分析からわかるように、地方大学は政策に対して忠実に、かつ形式的に職業生涯教育を導入し、取り組んでいた。その背景に、就職難に対する対応が要請され、政府からの評価を常に意識する中国の大学の受動性が考えられる。これについて、E 先生は山東省の場合、大学の就職率が 80%を超えないといけないと、政府によって要請されていると語っていた。就職率にノルマを設けることによって、大学に対する政府のコントロールが一層強まることが考えられる。また、大学側が政府による評価を重視することは、C 先生の以下の語りからうかがえる。

C 先生：北京大学や精華大学などは、（うち）より取り組むのは遅いけど、取り入れた途端、影響力が大きかった…本にも載ったしね。（本を差し

出し）こういう、政府が認めた大学の（職業生涯教育の実施）事例が載った本。…実は向こう（の一流大学）は声が大きいし、看板も大きいから、きれいごとを言ったらすぐに「お見本」になる。こっちは職業生涯教育でどう頑張ろうとも注目されない…　　（2013/3/1）

以上の語りから、C 先生が職業生涯教育を実施するモデル大学のように、政府に認めてもらうことを非常に重視していることがわかる。

以上の分析からわかるように、政府の要請に忠実に応えることによって、大学は就職難への対応を示し、政府による評価の向上を希望している。職業生涯教育の急速な拡大の背後に、就職難への対応がノルマとして押し付けられた地方大学の姿がうかがえる。

（２）　形骸化する職業生涯教育

以上のように、中国の地方大学は政府の要請に応えるために受動的に職業生涯教育を導入していた。では、職業生涯教育は実際、どのように実施されているのか。本節では、職業生涯教育の実施状況を就職指導係の語りから分析する。

E 先生は職業生涯教育の根幹を成す「職業生涯企画」の授業を実際に担当している。彼は自らの仕事の「意味のなさ」について以下のように語り、職業生涯教育の形骸化を指摘した。

＊：（「職業生涯企画」とは）どんな授業ですか。

E 先生：それは…どんなって聞かれても、みんなが同じ内容教えているよね。（担任が）集まって、授業のやり方を習うね…あとは教えられたとおりにやるね。…そう、教材のままに、パワーポイントも作ってもらって、それに沿って教える。でも、そんなに意味があるとも言えないなあ…1 年生だしね…（授業の）時間帯も何回も調整したよ。…専門の先生は教育学部の先生で、かれらがモデル授業を私たちにみせてね…あとは同じように学生に教える。　　（2013/2/16）

E 先生は専門的な知識を持ち合わせておらず、「モデル授業を見せて」もらって「教えられたとおりに」授業を教えているという。つまり、「職業生涯企画」の授業を担当するのは専門の教員ではなく、学生支援に携わる学年チーフなのである。必然的に、かれらが担う職業生涯教育は模倣でしかなかった。さらに、授業の実施時間も保証されていなかったという。

以上の分析から、専門性のある教員など、職業生涯教育の実施に必要とされる条件が備えられていないまま、地方大学が職業生涯教育を取り入れなければなら

ない実態がうかがえる。

職業生涯教育の大学での導入および実施からわかるように、職業生涯教育は政府によって押し付けられたもので、その実施に形骸化した傾向が見られている。

では、このような職業生涯教育を、大学の就職指導係はどのように評価しているのだろうか。この点を次に分析しよう。

２　職業生涯教育の実施に対する就職指導係の評価

ここでは、大学の就職指導係が職業生涯教育をどのように評価しているかについて分析する。

（１）　職業生涯教育の支持者

まず、職業生涯教育の効用を高く評価する就職指導係がいた。それは、B 先生と D 先生の語りからわかる。

> B 先生：学生の反応は、全体的にいいね。やる必要があるって。先生たちもまじめにやっているし。
> ＊：具体的にどういう影響があると思いますか。
> B 先生:そうですね。キャリアデザインはできたはずだと思う。(2013/3/1)

> D 先生：（職業生涯教育）もっとも効果があるのはどこかというと、この授業をやるかやらないかで、学生の意識が違ってくる…私は何のためにここに来たか、何ができるか、私はそれを達成するために何をすべきなのか、どの能力が必要なのか（が分かってくる）。…どんな職業に向いているのかってすぐにチェックできる。このような職業にどんな技能を持ったほうがいいかってわかる。…2006 年の学生はこういう授業を受けてなかったから、とても困っていた。　（2013/2/16）

以上に示したように、一部の就職指導係は職業生涯教育によって、大学生が就職意識の転換を果たしたと評価した。その語りから、職業生涯教育は大学生に自らの適性を提示しただけでなく、その達成に必要な能力も提示する。つまり、職業生涯教育は大学生を適職に導くように機能していると、D 先生が主張している。その一方で、「職業生涯企画」の授業を受けていなかった大学生がとても困っていたと、職業生涯教育の取り入れは大きな意義があるように語られていた。形骸化が見られたにもかかわらず、職業生涯教育は大学生の就職意識の転換において効果的に機能することが主張されている。

（２）　悩まされる就職指導係

次に、職業生涯教育に対する懐疑的な意見もうかがえた。以下の語りは、就職指導係の一部が自らの仕事に無力感を覚えていることを示している。

E 先生：まあ、わたしもあんまりちゃんと（職業生涯企画）教えてないけど…なんでっていうと、就職指導ってもんはね、ふうう（ため息）、指導してためになるか？…　（2013/2/16）

B 先生：誰の影響が強いかというと、親だよ。大学生は親の話を聞くよね。去年卒業した４年生、大学院も合格したし、いいところの就職も決まったね。で、どっちにするか（について）その親から相談話を持ってきた。私は就職が難しいから断然に就職したほうがいいって言ったけど、結局彼の親は進学させたよね。だから、大学生はみんな親のいいなりになっているから、私たち（教員）はどう指導しようが、効果があんまり…　（2013/3/5）

以上の語りからわかるように、調査対象の中で最も経歴の浅い E 先生は職業生涯教育だけでなく、就職指導全体の意味を疑っている。また、８年間のキャリアを持つ B 先生も大学生が親のいいなりであるため、教員の指導に耳を貸さないと、大学による指導のインパクトのなさを嘆いている。経歴に関わらず、就職指導係は自らの仕事に対する無力感を共有している。そのなか、B 先生が語った進路指導の失敗経験は A 先生と B 先生の語りからもうかがえる。A 先生は大学生に薦めた「待遇のいい」ポストを「私営では不安定」などの理由で断られたという。また、B 先生は（就職ノウハウ）講座を開いても、受けるはずの大学生が来ないと語り、就職指導に対する大学生の無関心に悩まされる様子であった。

就職指導係が共有する進路指導の失敗経験は、大学側の大学生の就職・進路に対する価値判断と、大学生またその親の判断基準とのギャップに原因があると考えられる。「高望み」またはそれを前提とした大学院進学は大学生またはその親の利益を反映したものだと考えられる。それに対して、その問題の修正を目的とする職業生涯教育に取り組むことで、大学は大学生の利益の対立面に立つことになる。そのように、個人の利益を無視する職業生涯教育による就職意識指導は大学生に受け入れられず、就職指導係の無力感をもたらしたと考えられる。

同様に職業生涯教育に疑問を感じたのは、Y 大学のキャリアセンターのセンター長である C 先生であった。彼は中国の職業生涯教育に足りないものを以下のように客観的にとらえている。

C 先生:授業はただ理論上で支援するよね…個人の場合は自分で考えて、自分で解決してもらうしかない…職業生涯教育を本気でやろうと思ったら、その研究をしないといけないよね。…今はただ他人のまねをして、ほかの大学はどうやっているか、ほかの国はどうやっているのかを、そのまま持ってきて、同じように学生に授業して、講座を開いて、指導を行う。…今うちでやっているのは…学生に意識すべきだと言っているだけ…(効果とかは)テストで測れないものだから。(2013/3/1)

以上のように、C 先生は学生の意識喚起に留まる職業生涯教育の形骸化を批判した。また、職業生涯教育を確実に行うために、実施上の理論の欠如などの困難を乗り越えないといけないと、悩まされた様子であった。職業生涯教育の現状を納得できないが、その改善に困難を感じると苦悩する就職指導の担当者の姿がうかがえる。

以上の分析からわかるように、大学の就職指導係は大学生の意識を対象とした職業生涯教育に無力感を覚えている。その原因として、教員の指導が大学生に受け入れられないことが推測できよう。

しかし、職業生涯教育が大学生に受け入れられず、苦悩する大学の就職指導係がいる一方、一部の就職指導係は職業生涯教育が大学生から評価されると、その効果を肯定的に語っている。では、実際、大学生の職業生涯教育に対する反応はどのようなものなのだろうか。

3　職業生涯教育の実施に対する大学生の評価

最後に、職業生涯教育に対する大学生の捉え方について分析する。

1　期待する大学生

大学生の語りから、かれらは大学側のサポート、とくに進路相談などに期待していることがわかる。大学側によるサポートを期待する語りとして J さんのものがある。

J:ホームルームにね、年に 1, 2 回しか会えない担任が来て、なんか、本当に良いことを言っているというか、とても正しく聞こえるよ。
＊:どんなことをいうの？
J:生活で注意することとか、勉強とか、これからの進路やなど。経験者だから、いろいろ言えるの。…実はいろいろ相談したいよ、(大学が)何もかもすぐ学生のせいにするのじゃなかったらね。(2013/2/20)

Jさんの語りから、年に1，2回しか会えない学年チーフの指導を期待する大学生の姿がうかがえる。そのように学年チーフに対する親近感を示したのはKさんやGさんなどもいた。

先生側の語りでは、大学生が大学による進路指導に耳を貸さず、親のいいなりだと語られていた。しかし、ここでは大学側のサポートを期待する大学生の姿がうかがえた。そのギャップをもたらしたのは、職業生涯教育による意識指導の形骸化が考えられる。また、その形骸化の原因として、大学が「何もかも」学生の責任を追及するためだと、Jさんの語りから聞き取れる。つまり、大学生の就職意識の問題に対する一方的な批判は、大学への信頼を阻害している。就職意識の修正に位置づけられた職業生涯教育ではなく、素朴ではあるが親身になる経験談が期待されているようにうかがえる。

一方で、Jさんは学年チーフと会うのは年に1，2回しかないと語っている。Gさんからも担任1人が2つの学年で何百人の学生の面倒を見ているため、自分のことで相談に行きづらいと語った。にもかかわらず、大学生は「相談に行ったらきちんと相手にしてくれる」と学年チーフを信頼している様子が見受けられる。そのように学年チーフによる指導に大学生が期待していることから、大学側による就職指導に対する大学生の切実な要望がうかがえよう。

2　学生による批判

前述した分析から、中国の大学生は「何もかも」大学生のせいにする大学に反感を覚えている一方、大学側による就職指導を期待していることがわかった。では、既存の就職指導である職業生涯教育は、大学生の期待に応えることができているのか。本節では、大学生による職業生涯教育に対する評価について分析する。

「職業生涯教育を受けてどうだった」という質問に対して、一部の大学生は批判的な声を上げている。その批判は以下のような語りから読み取れる。

M:あー、職業生涯設計だね、めちゃくちゃだよ…人生とかいうけどね、でかい話ばっかりだったよ。…ウケるけどね。適職テストで自分の適職がサーカスの調教師だって（笑）、しかも（この結果が出たのは）自分だけじゃないみたい（笑）　（2013/2/19）

＊：職業生涯教育ってどんなもんがあった？どうだった？

J：あれはだめよ、全然役に立たん。聞こえがいいだけよ…誰も授業を教えてくれなかった。担任が適当に何回かやったことがあるけど、教科書を読んだり、心理テストしたり…心理テストの結果についても教えてくれなかった。テキトウよ。自分らのことをまったく分かっていな

いくせに。　　（2013/2/20）

職業生涯教育に対するMさんの「ウケ」た反応またJさんの「キレ」た反応が見られた。

そのなか、Mさんが「茶番」のように語った職業生涯教育による適職判定の事例は興味深いものであった。キャリア研究がなされないままに職業生涯教育の導入と拡大を遂げた中国の大学は、アメリカのCareer Educationの理論を都合よく取り入れ、それを「適職探し」のフレーズとして就職意識の修正に用いた。そのため、アメリカで発足した適職モデルはそのまま「職業生涯企画」の教科書に盛り付けられ、職業生涯教育の理論を偽る道具となった。中国の大学における職業生涯教育が中国社会のリアリティを反映できていないことから、その形骸化の深刻さがうかがえる。

また、就職指導係の授業への取り組みが「テキトウ」だと訴えたJさんの語りは、先述した「あまり（まじめに）やっていない」というE先生の語りと一致している。就職指導係の職業生涯教育に対する無力感は大学生に敏感に読み取られていることがわかる。

さらに、「自分らのことをまったく分かっていない」と、職業生涯教育による指導を批判したJさんの語りから、大学生の問題に応えられていない職業生涯教育に対する批判がうかがえる。それはE先生の語りにおける授業内容の形骸化に原因が考えられ、また、前節で取り上げたJさんの「何もかもすぐ学生のせいにする」こととの関連も考えられる。つまり、既存の職業生涯教育は大学生の期待に応えられておらず、むしろ大学生を強い大学不信に走らせていた。

このような大学生の職業生涯教育に対する批判は質問紙調査にも見られた。第１次質問紙調査では、「大学による職業生涯教育に対する意見や考え方」の自由回答を求めた。その結果は表６－７に示す。

表６－７は大学による職業生涯教育に対する大学生の意見や考え方を示している。そのうち、職業生涯教育の形骸化に対する大学生の指摘が目立った。職業生涯教育が形だけに留まっており、実際に取り組んでいないと、大学生が考えている。

また、職業生涯教育は大学生に行き届いていないことが再確認できた。回答者の8.9%（38人）は「聞いたことがない」「聞いたことがあるけど実際に受けたことがない」「よく分からない」と答えている。大学による就職支援が3年次後期においても疎遠に感じ取られていることが分かる。それは職業生涯教育の利用状況に関するアンケートの結果と一致しており、職業生涯教育は大学生に行き届いていないことが明らかである。

さらに、職業生涯教育の利用における不平等は一部の大学生に指摘されている

（4.9%）。職業生涯教育を利用できる機会は限られているため、多くの場合は「学生会」の幹部しか利用することができない。それは、職業生涯教育が大学生に行き届いていない理由の１つだと考えられよう。

ほかにも、職業生涯教育に関する大学生の意見や期待が述べられている。職業的訓練、社会需要に対する指導、アルバイトに対する支援、資格取得の支援及び起業支援などが挙げられている。大学生が大学による就職支援に期待を寄せていることがわかろう。大学生が職業生涯教育を批判的にとらえるのは、その期待が裏切られたからであろう。

表６－７　職業生涯教育に対する意見や考え方

1	形だけ作っていないで、実際に取り組んでほしい。（56 人，13.2%）
2	就職情報をもっと提供してほしい。（49 人，11.5%）
3	聞いたことがあるけど実際に受けたことがないので、意見は言えない Or 聞いたことがない。あるのが知らなかった。（38 人，8.9%）
4	もっと確実にフォローしてほしい。（33 人，7.8%）
5	インターンシップなど実践の場を提供してほしい。（32 人，7.5%）
6	社会人などを招いて、就職関連の講座を開いてほしい。（27 人，6.4%）
7	支援と言っても限られた学生しか受けられない。もっと機会を平等にしてほしい。（21 人，4.9%）
8	企業と連携を結び、就職ルートを確保してほしい。（20 人，4.7%）
9	4 年生だけではなく、低学年から支援してほしい。（19 人，4.5%）
10	就職テクニックなどのトレーニングを実際に行ってほしい。（11 人，2.6%）

上述した分析は、大学生が批判的に職業生涯教育を捉えていることを明らかにした。一方で、職業生涯教育に期待を裏切られ、怒りを感じた大学生もいれば、その存在すら忘れ去ろうとする大学生もいる。

X 大学の H さんは「職業生涯教育って知っているか」という筆者の質問に対して、「確かにあったような」と授業を受けたことをはっきりと覚えていないようであった。また、彼女にとってそれは「そんなに自分らと関係なかった」もので、進路については「自分で考えられる」と自信あふれる様子であった。H さんの冷めた反応も一部の大学生を代表したものである。職業生涯教育、または「職業生涯設計」はその形骸化された教学スタイルのように、形式だけ大学生の中に残ったのである。

職業生涯教育に対して大学生が怒りを感じたり、無関心であったりという態度の分岐はその属性に原因があると考えられ、大学生の多様性がうかがえる。K さんや J さんのように「怒り」を感じるのではなく、H さんは無関心な態度を取るのは、彼女がランクの高い X 大学の大学生であり、さらに経済学部という「就職に強い」専攻に所属していることに原因があると考えられる。H さんのような記憶が曖昧な様子は Y 大学の I さんなど、ほかの大学生にも見られている。そのな

かでＩさんの大学はランクがそれほど高くないが、法律学部という専門性の高い専攻に在籍している。また、大学側のサポートに期待を示したＫさんとＪさん、また職業生涯教育を「めちゃくちゃ」だと批判するＭさんは農村出身者であるのに対して、Ｈさんと Ｉさんはともに裕福な家庭の出身者である。職業生涯教育に対する期待または捉え方は大学生の所在大学や専攻、とくに家庭背景に影響を受けていることが考えられる。

以上の分析からわかるように、就職指導係に大学の指導に無関心だと指摘された大学生は、大学側の就職指導を期待している。また、既存の職業生涯教育に対して怒りを感じたり、無関心であったりする大学生が見られたが、どちらもその効果を否定している。職業生涯教育を高く評価するする就職指導係に対して、大学生がそれを批判的に捉えていることから、その間の認識のギャップが大きいことがわかる。つまり、就職指導に対する大学生の期待が裏切られ、その評価も書きかえられていた。政府の要請に対応するばかりで、大学生の要望を無視する大学の取り組みは、大学生の批判を招いているようにも見える。

第４節　まとめと考察

以上の職業生涯教育に対する分析をふまえれば、本章での知見は以下の４点にまとめられよう。

第一に、中国の大学における職業生涯教育は政策によって急速に導入され、拡大していった。また、その目的として、大学生の就職意識を修正することが強調されている。

第二に、職業生涯教育の利用は大学生の就職意識、または大学生活との関連がほとんど見られなかった。

第三に、中国の大学における職業生涯教育は政府の要請を受けて導入され、その実施においては形骸化の傾向が示唆された。

第四に、職業生涯教育に関して、大学生と大学の就職指導係の両方から否定的にとらえている。大学の就職指導係にその意味を疑い、無力感を覚える就職指導係の姿が目立った。また、大学生は大学によるキャリア支援を期待している一方、職業生涯教育に対しては否定的態度を見せた。

大卒者の就職難が深刻化する中、政府は大学生の就職意識の問題を就職難の要因として取り上げ、大学にそれを修正するように要請した。このように、職業生涯教育の導入は大卒者の就職難を大学生の自己責任化する道具であり、また大卒者の就職難への対応が求められる政府の「アリバイ作り」でもあった。このような道具化された職業生涯教育に形骸化が見られたのは必然だと言えよう。

しかし、政府による職業生涯教育の推進は、大卒者の就職難問題の責任を大学

生に押し付けただけではない。それは次のように、さらなる問題を招きかねない。

まず一つ目に挙げられるのは、職業生涯教育の導入は、就職難または大学生の就職意識に潜む問題を隠蔽し、就職に不利な者を排除してしまう恐れがある。前の分析から、大学生の就職意識に潜む問題は、大学生の就職意識における階層差にあると指摘された。職業生涯教育は、表面化された就職意識の問題に取り組むことで、就職意識のメカニズムに潜む階層問題から目を逸らし、不平等を助長しかねないと考えられる。さらに、待遇の良い初職にこだわり、転職志向が低いという問題視された就職意識は「自由に労働市場を移動できない」「縁故」を持たない大学生に顕著に見られている。職業生涯教育による就職意識転換の推奨は社会資本の低い大学生の就職における不利を自己責任化し、それを社会的配慮から排除することとなりかねない。

二つ目として、現在行われている職業生涯教育は大学不信を助長する可能性が考えられる。大卒者の就職難のため、「大学で勉強しても就職できない」という「学習無用論」が世論として広がり、強い大学不信がもたらされた。職業生涯教育の導入は、大学による就職難への対応を誇示する意図も考えられるが、その形骸化は本来の意図に背くものであった。本研究の分析から、職業生涯教育の大学への導入は、大学の就職指導係の自らの仕事に対する自己肯定感の低下、大学生の大学不信をもたらしていることがわかった。大学生の就職意識の修正を土台とする職業生涯教育は、大学生就職に潜む真の問題を隠蔽し、大学の就職支援システムの非合理化を促すだけでなく、大学人を翻弄し、大学生のみならず就職に携わる就職指導係の大学に対する不信感を強めたと考えられる。

しかし、形骸化した職業生涯教育を懐疑的に捉えているにもかかわらず、一部の大学生は大学側によるサポートを期待していることが分析からうかがえた。とくに農村出身の大学生が大学に対して抱く期待は顕著なものであった。それは、上述した就職意識における格差問題を反映したものだと考えられる。家庭背景によって大学生が就職に抱える難題が異なり、農村出身者など家庭背景に恵まれない大学生はとりわけ大学による支援を求めている。そのため、家庭背景による就職格差、就職意識格差などを含め、多様な大学生像を意識したうえでの就職指導が大学における就職支援の課題となる。

本研究は中国の地方大学を取り上げ、その職業生涯教育の抱える問題および問題を生み出すメカニズムを検討した。なお、大学または専攻の性格、立地によって職業生涯教育の様相に複雑さがあり、本研究の結果を一般化することには限界があると考えられる。しかし、地方の大学が認識の多様性を呈しながら、政策に「規範」論に振り回され、形骸化した就職指導に取り組む本研究の分析結果は、中国の大学における職業生涯教育の課題を探るための事例研究の蓄積に資することができたと言えよう。今後は、職業生涯教育の大学での発展を追跡しながら、

大学生の抱える問題に着目することで大学教育における就職指導のあり方について検討していきたい。

＜注＞

１．中国の先行研究や世論では「職業生涯企画（职业生涯规划）」や「職業企画（职业规划）」などの呼び方も一般的だが、ここでは日本語の文脈を考慮して「職業生涯教育」と称する。

２．「航天杯」中国大学生職業生涯設計コンクール・主催者サイト
http://ecjtu.fitoo.com/Help/Hp_mnote.aspx?Imh_id=20（2013年7月6日アクセス）

３．2009年、「中国大学生職業生涯設計コンクール」が「全国大学生職業生涯設計コンクール」と改名し、改めてスタートすることになったが、ここでは、触れないことにする。百度・全国大学生職業生涯設計コンクール
http://baike.baidu.com/view/5847883.htm（2013年7月6日アクセス）
http://www.jyb.cn/high/gdjyxw/201205/t2012052　4_494446.html（2013 年 7 月 6 日アクセス）

４．「航天杯」中国大学生職業生涯設計コンクール・開催要旨
http://www.gradjob.com.cn/News/news/200606/200606_282.htm（2013 年 7 月 6 日アクセス）

終章　地方大学における就職意識のゆくえ

本研究では、中国の地方都市における大学生の就職意識の構造、また大学生活との関連に対する検討を通して、就職意識の問題の指摘によって歪められた大学生像を捉えなおし､職業生涯教育という大学による就職指導の課題を提示できた。以下では、本研究の論議を総括し、考察と課題について提示する。

第１節　結果の要約

第１章では、中国の大学生の就職事情を整理し、就職意識の問題が提出された経緯を考察した。その上で、本研究の課題およびその背景を明らかにした。

大学生の就職意識の問題への指摘は中国の大学生バッシングとも言える現象を引き起こし、就職難問題を大学生の責任に帰した。就職意識の問題として、おもに大学生の就職に対する期待が高すぎることが指摘されている｡大学生が大手(おもに国有セクターなど）企業や大都市、高収入などにこだわり過ぎることが就職難をもたらしていると語られてきた（楊・郑　2003，朱・黄　2006 など)。また、そのような就職意識「問題」が生成した原因として、高等教育のエリート段階からマス段階への移行、いわゆる高等教育の大衆化に大学生が適応できていないことが指摘されている。つまり、大学生が「エリートから一般の労働者になった」にもかかわらず､「エリート意識」を捨てられないでいるとされる（朱・黄　2006 など)。そのため、大学生の高い就職期待は同時に「自己の過剰評価」として解釈され、大学生の自己認識の不足や曖昧なキャリアビジョンの問題に拡大されていった。さらに、キャリアビジョンが曖昧であることは大学での学習の動機づけを妨げ、大学生の学習に対する消極的態度をもたらしたと語られている（朱・黄 2006，冯・張・葛　2010 など)。つまり、大学生が学習しないのは、進路が明確になっていないためとされ、さらに学習しないことが、大卒者の就職難をさらに悪化させたと考えられている（冯・張・葛　2010)。このように、中国の大卒者の就職難は大学生の責任に帰され、大学生の就職意識の問題の修正が求められるようになった。しかし、大学生の就職意識に対する以上の先行研究では、実証的な資料を挙げた検討がほとんどなされていない。そのため、大学生の就職意識の問題、およびそれが学習行動への影響について、実証的な分析による再検討が必要である。

第２章では、地方における大学生の就職意識の問題について考察したうえで、本研究の調査地である山東省の概要を検討した。

大学生の就職意識の問題において、先行研究ではとりわけ地方の大学生が取り上げられている。つまり、大都市での就職へのこだわりなどの「問題」は「地方」出身の大学生に多く見られることが指摘されてきた（黄・夏　2005 など)。しか

し、先行研究の多くは大都市に進学した学生に対する調査であり、問題とされてきたのは大都市の大学に在学する地方出身者であった。一方、地方大学の学生と大都市の地方出身の大学生の就職意識は大きく異なっていることが、いくつかの調査により指摘されている（李　2011，劉　2011）。したがって、地方の大学生に着目することで、これまで大都市の実態から語られ、構築されてきた学生像を修正することが可能となろう。さらに、そのことにより、多様な大学生像に配慮した大学教育の機能や学生支援に新たな示唆を与えることができるだろう。そこで、本研究では、地方である山東省の大学生を調査の対象とした。

続く第３章では、就職意識を分析する際の枠組みとそれに応じた調査の概要を提示し、地方における大学生の就職意識の実態を概観した。

地方の大学生の就職意識に対する単純集計から、従来指摘されてきた大学生の就職意識の問題と異なる結果が得られた。地方における大学生は大都市や大手への就職より、職場の福利厚生と将来性、職場環境を重視している。また、堅実な就職意識の一方、高い転職志向が指摘された。

第４章では、地方における大学生の就職意識の規定要因に関して考察を行った。その結果、大学生の就職意識の問題は「高望み」などのように短絡的、一元的に捉えられるものではないことが明らかにされた。つまり、もっとも影響を与えるのは「縁故」であり、それを持っていると考える大学生は就職期待が高く、リスクを恐れず就職しようとし、その一方で、「縁故」を持っていないと考えている大学生は安定した職場を志向していた。

中国における「縁故」について、園田は「中国の場合、個人のもつ政治的な動員力もさることながら、特定の人物との人間関係が、階層的な位置づけにとって決定的な要因となっている」（園田 2001， p.18）と述べ、その個人のキャリアに対する影響力が大きいことを示している。したがって、大学生の就職意識の検討において、「縁故」による影響が考慮されなければならない。本研究は園田（2001）の論述に基づき、中国における「縁故」を「特定の人物との人間関係」と「個人のもつ政治的動員力」という２つの形態から捉え、「（就職に有利な）コネを持っている」と「（就職において）有力な家庭背景を持っている」という２つの変数を用いて「縁故」を大学生の主観的判断によって測定することにした。

結果として、中国における「縁故」は就職意識に大きな影響を与えていることが明らかになった。「縁故」を持つと考える大学生は大手や大都市での就職を志向し、適職にこだわるなど高い就職期待を示しているだけでなく、転職や農村での就職などにも否定的ではない。それに対して、「縁故」を持たないと考える大学生は転職や農村での就職を望まず、大手に就職することよりも職場の安定性や機会の平等などを重視している。つまり、「縁故」を持つと考える大学生は就職におけるリスクを無理に回避せず、さまざまな進路を考えに入れた上で転職を通じて適

職を求めようとするという大胆かつ自由な就職態度を示しているのに対して、そうでない大学生は安定した職場を求めようとする穏当な態度を示している。このような違いは、「戸籍」などによって分断化された中国の労働市場では、「縁故」を持つ者は社会的な制約にそれほど縛られないために生じたと考えられる。つまり、就職機会を増加させる縁故は、大学生の就職意識に余裕を持たせているのである。なお、このような就職意識の違いは親の職業や収入、学歴などの指標では限定的にしか見られなかった。

また、「縁故」のほかに、大学ランクや専攻などが労働市場で与える効果も、大学生の就職意識に反映されている。ランクの高い大学の学生は卒業後すぐに就職することを志望し、高い就職期待を示している。その一方で、ランクの低い大学の学生は卒業後すぐに就職するよりもランクの高い大学院への進学をめざし、いわば敗者復活を図っている。このような就職意識の違いは、求人側が採用の際、学歴を重視していることを反映していると考えられる。

以上のように、大学ランクや「縁故」などは大学生の就職意識に違いをもたらしていることが明らかになった。とくに本研究では、「縁故」に着目したことで、親の職業、学歴および収入など、社会階層を示すほかの指標による分析の限界を指摘した。先行研究では社会階層の影響が弱いため、大卒者の就職における個人の能力の効果が強調されることもあった（王　2005 など）。しかし、本研究の結果が示すように、「縁故」の影響力は大きい。したがって、中国の大学生の就職意識を検討する際には、「縁故」の影響を重視する必要があろう。

第 5 章では、上述した大学生の就職意識が大学生活にどのような影響を与えているかについて分析を行った。その結果、大学生の明確な進路希望は必ずしも積極的な学習行動に結びついておらず、むしろ学習の軽視をもたらしていることが明らかにされた。

先に指摘したように、これまで進路希望が曖昧なことは大学生の学習を阻害するとされてきた。しかし、実際には希望する進路が決まっている大学生は、消極的に学習に取り組んでいた。つまり、曖昧な進路希望や就職意識は必ずしも大学生の学習に支障をきたしているわけではない。進路希望が明確な大学生は、就職や進学の準備に応じた学習をしているがゆえに、大学での学習を軽視するのだと考えられる。

その逆に、進路希望が曖昧な大学生は学習に積極的取り組んできた。しかし、こうした学生は学習に積極的であるものの、学習を苦痛だと考え、学習の意味を疑っている。つまり、自分に必要な知識や技術が明確でないがゆえに、大学から提供される学習を受け入れざるを得ない。したがって、こうした大学生の学習は自主的なものではなく、いわば強い「学校化」によるものだと考えられよう。

さらに、大学生活における就職意識の影響が限定的であるのに対して、「縁故」

の影響は大きいものであった。「縁故」に恵まれると考える大学生は大学・専攻の選択では将来性を重視するとともに、学習、大学生活への取り組みに対して積極的であった。また、大学生の消極的な学習行動は曖昧な就職意識ではなく、就職における「縁故」の効用を肯定することによって促されていることが明らかになった。

第6章では職業生涯教育の実態と、大学生の就職意識や大学生活との関連を検討し、大学における就職支援の課題を提示した。分析の結果、職業生涯教育は形骸化しており、大学生の就職意識、または大学生活に対し有効に機能していないことが指摘された。

インタビューの結果から、職業生涯教育の実施は形骸化しており、大学生と大学の就職指導係の両者がともに否定的にとらえていることが明らかになった。政策に応えるために、地方大学は専門性のある教員など、職業生涯教育の実施に必要とされる条件が備えられていないまま、それを取り入れなければならなかった。また、大学生たちは、就職難は大学生に責任があるという前提で計画、実施されている職業生涯教育に対して、否定的な態度を示している。就職指導係も、大学生の就職意識の「修正」を職業生涯教育の目的として捉えている一方、指導が大学生に受け入れられないことで自らの仕事に無力感を覚えている。

本章はこれまで大学生の就職意識の問題の対応策として評価されてきた職業生涯教育を、地方の事例をもとに批判的にとらえ直した。すなわち、大学生の就職意識を一方的に問題視することは、大学の就職指導の形骸化、あるいは無効化を助長していた。

以上の分析と検討から、本研究の結果は次のようにまとめられよう。

①地方の大学生の就職意識に対する調査は、従来指摘されてきた大学生の就職意識の問題と異なる結果を示した。地方における大学生は大都市や大手への就職より、福利厚生と将来性および職場環境を重視している。また、堅実な就職意識の一方、高い転職志向が指摘された。

②就職意識および大学生活の分析から、大学ランクのほか、「縁故」による影響も大きいと指摘された。就職意識と大学生活との関連が限定的であるのに対して、「縁故」に恵まれていると考える大学生は大胆かつ自由な就職態度を示し、大学生活に積極的に取り組んでいる。

③大学の職業生涯教育についての分析から、職業生涯教育の形骸化が指摘された。政府の要請に対応するために導入された職業生涯教育は、大学生の就職意識や大学生活の実態と乖離していることが指摘された。

第２節　考察と課題

以上のように、本研究では、中国の地方における大学生の就職意識の諸相を明らかにし、就職がいかに形成され、またいかに大学生活に影響を与えているのかを検討してきた。その結果、大学生を取り巻く就職問題を就職意識の問題のように短絡的、一元的に捉えることの限界が指摘され、大学生の家庭背景とりわけ「縁故」が就職意識および大学生活に対する影響が明らかにされた。以下では、本研究が得られた知見が中国の大学生就職および大学教育に対してどのような意味を持つのかを考察する。また、それを踏まえて、大学における就職指導および中国における大学生研究の在り方について示唆したい。

第一に、中国での大学生研究における「縁故」の重要性が指摘できる。大学生の就職意識を取り扱う先行研究の結果では、社会階層が大学生の進路志向への影響が確認されたが、就職志向への影響は限定的でしかなかった（王　2005，李 2011）。しかし、そこで取り上げられた社会階層の指標とは、親の学歴、所得と職業のみであり、「コネ」などに代表される中国の「縁故」は考慮されていなかった。本研究で明らかにしたように、「縁故社会」である中国では、「縁故」が大学生の就職機会に大きな影響を及ぼし、さらに大学生の就職意識に反映され、大学生活にも影響を与えている。大学生の就職意識および大学生活が「縁故」によって左右されていることから、中国での大学生研究や階層研究における、「縁故」の重要性が指摘できる。したがって、今後は、「縁故」を用いて中国の大学生を研究することが必要であろう。

第二に、本研究は中国の不平等な社会構造、とくに大学生を取り巻く不平等に検討を迫ることになる。

家庭背景が大学生の就職意識および大学生活に対する強い影響を明らかにしたことから、大学生研究における「縁故」の重要性を指摘できただけでなく、大卒者の就職を取り巻く不平等に検討を迫った。「縁故」に恵まれないと考える大学生が職場の安定性および機会の平等を重視するのは、「縁故」社会に不安であるからだと考えられる。縁故就職を容認する中国の社会構造は、大卒者の就職に不平等を生じさせただけでなく、就職意識にも格差をもたらしている。

さらに、「縁故」は大学生の就職意識だけでなく、その大学生活を分化させてもいる。大学生活の分析では、大学生の明確な進路希望は必ずしも積極的な学習行動に結びついておらず、むしろ学習の軽視をもたらしているという知見が得られた。それは大学の教育内容と就職との乖離を示している。一方で、大学生の大学生活に対する就職意識の影響が限定的であるのに対して、「縁故」の影響力が確認された。「縁故」に恵まれると考える大学生が大学での学習に積極的であるほか、社会経験を豊かにし、自らのネットワークを広げていく過程が明らかになった。つまり、中国、とくに中国の地方では、「縁故」は大学生の就職意識だけでなく、

その社会化過程をも規定していた。また、「縁故」に恵まれると考える大学生が大学生活において自らのネットワークを広げていくことから、「縁故」が大学生の社会化を促すと同時に、中国社会における階層の再生産を導くものとして捉えられる。

以上の結果から大学生の就職および大学生活に対する「縁故」などの影響を考慮した就職指導が必要だと考えられる。そのために、中国社会における「縁故」の文化的・社会的背景に対する検討が求められる。

第三に、本研究では、大学生の就職意識の問題に対する従来の指摘の限界を明らかにし、就職意識のメカニズムに潜む問題に検討を迫った。

就職意識の問題に対する従来の指摘の限界が指摘された。地方における大学生は大都市や大手への就職より、職場の福利厚生と将来性、職場環境を重視している。また、就職意識に対する大学ランクや家庭背景の影響が指摘された。つまり、就職意識の問題に対する従来の指摘と異なる傾向は、地方の大学生に指摘された。さらに、就職意識の規定要因の検討から、大学生の就職意識は労働市場を反映するものであり、その問題性を一方的にとらえ、非難することに限界があると指摘できる。

また、従来の先行研究で指摘されてきた就職意識の問題と大卒者の就職難との関連性が疑われる。本研究の結果から、大手志向や大都市志向など、従来問題とされてきた就職意識は、大学ランクが高く、自身が「縁故」に恵まれると考えている大学生に見られていることが明らかになった。それに対して、大学ランクの低い、または「縁故」に恵まれないと考える大学生には、大手志向や大都市志向などが見られず、堅実な就職意識を持っている。つまり、従来指摘されてきた「高望み」などという就職意識の問題の主体は、大学ランクが高く「縁故」に恵まれると考えている大学生である。その一方で、こうした大学生は就職に強いほうだと考えられ（張　2008, 李　2011 など）、就職難に直面しているとは考えにくい。つまり、就職意識の問題の主体となる大学生は必ずしも就職難に直面する大学生ではない可能性が示唆されている。大学生の就職意識の問題が就職難をもたらしたという従来の指摘を否定するものではないが、本研究の結果はそのような指摘の妥当性に疑問を投げつけた。どのような大学生が就職難に直面していて、また、大学生はどのように就職難に対処しているのかなど、中国の社会背景を踏まえたうえで大卒者の就職難問題を再検討が必要である。

第四に、大学生の就職意識に対する修正を主な目的とする就職指導に潜む問題が指摘された。さらに本研究の成果は現在の中国で実施されている就職指導に修正を迫るものでもある。

本研究では、「縁故」に代表される家庭背景による労働市場の不平等は大学生に強く認識され、就職意識に大きく影響しているが明らかにされた。しかし、先行

研究では、大学生の就職意識の問題を大学生自身の責任に帰した。さらに、政府および大学は自分を正しく評価し、就職期待を下げることを大学生に要請している。政府および大学のこのような対応は、大学ランクの低い、または「縁故」に恵まれないと考える大学生に、就職における不平等への妥協を強いることになる。大学生の就職意識に対する従来の指摘は就職意識のメカニズムに潜む階層問題を無視しただけでなく、就職における不平等を助長し、就職に不利な大学生を社会的に排除することになる可能性が考えられる。

また、「高望み」などという就職意識を指摘してきた先行研究の多くは、ランクの高い大学や、北京と上海のような大都市圏の学生を対象としていることの限界が指摘された。本研究の結果から、ランクの高い大学や大都市の大学の学生が「高望み」するのは、恵まれた家庭背景を持つ大学生が多いためだと考えられる。つまり、就職に不利な状況にあるランクの低い大学や地方の大学の学生は、これまでの就職研究または就職意識研究に見落とされてきたのである。大学生の就職難問題に対処するためには、むしろランクの低い大学や地方の大学の学生に焦点を当て、そこにいる「縁故」の持たない大学生をサポートする方法を考えなければならない。

以上の考察を踏まえると、大学生の就職意識のみを問題視する従来の見方は、就職意識のメカニズムに潜む中国特有の階層問題から目を逸らし、大学生像を歪め、その結果、大学の就職指導の形骸化ないし無効化を助長してきたと考えられる。今後の大学での就職指導を考えれば、これまで日本と中国で行われてきたような心理的なサポート中心ではなく、社会的背景を考慮した、多様な大学生像に対応する個別の指導が必要だと指摘できる。

以上のように、本研究は大学生を取り巻く就職問題の捉え方に修正を迫っただけでなく、就職指導の課題に示唆を与えた。しかし、本研究で得られたのは地方の大学生を対象とした結果であり、中国全体の大学生事情を一般化したものではない。今後、さらに他の地方の事例を分析するとともに、大都市と地方の比較などを通して、多様な大学生像を提示し、大学生の就職意識の形成過程、および大学の就職指導を検討していきたい。

引用参考文献

中国語文献と欧文献

陈成文・胡桂英，2008，「择业观念对大学毕业生就业的影响-基于 2007 届大学毕业生的实证研究」『高等教育研究』第 29 巻第 1 期，pp.46－52。

程明武・张永奇・黄士虎，2005，「青年就业的外部环境及其应对策略」『青年就业问题与对策研究报告』天津社会科学院出版 。

邓洁，2004，「家庭社会経済地位与大学生就業」『北京師範大学学報（社会科学版）』3 期， pp.111-118。

冯晨静・张丽敏・葛超，2010，「试论促进大学生就业意识构建的途径」 『河北农业大学学报』 vol.12，no.3，pp.333-334。

高桥・孙权，2006，『大学生就業指導』 清華大学出版社。

国家统计局人口和就业统计司 编，2012，『中国人口と就業統計年鑑 2011』中国统计出版社 。

韩晗，2010，「京沪穗三城蚁族阅读调查」『中国图书商报』。

郝登峰，2010，『大学生就业创业理论与方法』人民出版社。

郝明彦・王卫平・糜静，2006，「高校贫困大学生学习状况调查」『山西高等学校社会科学学报』第 18 巻第 5 期，pp.116-117。

胡伟莉・黄华文，「读书无用论的反思：基于大学生就业难的视角」『成人教育』第 2 期，2010 年，pp.76-77。

黄艳芹・夏丽洁，2005，「地方高校学生就业指导面临的问题及对策」 『邢台学院学报』 vol.20，no.2，pp.121-122。

赖德胜，1996，「论劳动力市场的制度性分割」『经济科学』第 6 期，pp.19-23。

赖德胜，1998「教育，劳动力市场与收入分配比例」『经济科学』第 5 期 pp.43-50。

赖德胜，2001「劳动力市场分割与大学生失业」『经济科学』 第 10 期 pp.69-76。

廉思，2009，『蚁族:大学毕业生聚居村实录』广西师范大学出版社。

李春玲，1997，「中国城镇社会流动」『社会科学文献出版社』。

李凰兰，a2008，「社会转型期大学生与社团状况的调查及对策研究」『中国電力教育』，pp.131-133。

刘建华・刘敏，2009，「高校学生社团调查研究及理论思考」
（http://www.xslx.com/Html/kjwh/201004/12944.html2010 年 12 月 17 日アクセス）。

刘晓筝，2011，「新时期大学生就业意识探析」『河南财政税务高等专科学校学报』vol.25，no.2，pp.72-73。

刘义，2012，「地方高校就业困难群体就业现状及应对策略」『中国报业』pp.24-25。

李远，b2008，「地方院校大学生就业面临的问题及其对策」『广东教育学院学报』vol.28，no.4，pp.21-24。

楼仁功・赵启泉，2002年，「大学生职业教育规划指导的探索与实践」『中国高教研究』

第6期, pp.87-88。
麦克思研究院　編，2008,『2008 年中国大学生就職報告』中国大学生就職研究課，社会科学文献出版社。
麦克思研究院　編，2009,『2009 年中国大学生就職報告』中国大学生就職研究課，社会科学文献出版社。
麦克思研究院　編，2011,『2011 年中国大学生就職報告』中国大学生就職研究課，社会科学文献出版社。
麦克思研究院　編，2012,『2012 年中国大学生就職報告』中国大学生就職研究課，社会科学文献出版社。
裴利华，『职业教育研究』，2011年，第9期，pp.7-10。
http://www.cqvip.com/Read/Read.aspx?id=39201275#（2013年7月7日アクセス）
藩晨光，2009,『2009 中国人才发展报告』社会科学文献出版社。
瞿国忠・于壮强・蔡丽莎，2004,「大学生就业意向实证分析」『北京科技大学学报』，vol.20，no.4，pp.88-92。
山东省人事厅，2008,『新编大学生职业发展与就业指导教程』山东大学出版社
山东统计局 編，2012,『山东统计年鉴 2012』中国统计出版社 。
孙长缨，2008,『当代大学生就业研究』高等教育出版社。
谭雪晴，2009,「贫困大学生学习倦怠的调查分析」『淮北煤炭师范学院学报（哲学社会科学版）』第 30 卷第 1 期，pp.165-166。
邬强, 2010,「地方高校大学毕业生就业难问题研究」『教育探索』vol.228, pp.145-147。
肖秋芳，2010,「地方高校贫困生就业存在的问题及对策」『教育探索』vol.8，pp.142-143。
杨绍文・郑杰，2003,「关于降低大学生就业期望值的思考」『北京教育』 pp.51-53。
杨颂，2004,「地方院校毕业生就业难的原因及对策」『潍坊学院学报』vol.4，no.3，pp.160-161。
王海明，2011,「浅谈大学毕业生的就业及职业规划问题」『河北企业』第 7 期，p.67。
韦耀阳・杨邓红，2008,「贫困大学生学校适应问题表现，原因及对策」『长春工业大学学报（高教研究版）』第 29 卷第 4 期，pp.99-101。
于泳红，2010,『价值冲突-转型时期大学生的职业选择』中国社会出版社。
袁晓华, 2007,「地方高校毕业生就业状况分析与对策」『集美大学学报』vol.8, no.1，pp.70-74。
袁新文，2009,「感受「春之声」—解读国务院加强高校毕业生就业 7 项举措—」『中国学生就业』
（http://zazhi.ncss.org.cn/zzwz/10006196.shtml　2014 年 1 月 23 日アクセス）。
岳昌君・文东茅・丁小浩，2004,「求职与起薪:高校毕业生就业竞争力的实证分析」『管理世界』第 11 期，pp.53-61。

张义明・刘志侃，2006,「大学生现代就业意识－高校就业指导的逻辑起点」,『贵州工业大学学报社会科学版』，pp.92-94。
张小紅，2006,「当代大学生学习动机现状与原因分析」『成都信息工程学院学报』第 5 期，pp.755-758。
张福明・刘法力，2005,「山东省大学毕业生就业状况的调查分析」,『聊城大学学报（社会科学版）』，pp.73-77。
张芙蓉，2008,「基于社会资本视角下的大学生就业问题研究」西南大学修士論文。
张清，2011,『中国大学的社会信任基础研究—基于陇中二百户村的观察与阐释』合肥工业大学出版社。
赵海燕，2010,「大学生就业取向影响因素分析」，东北师范大学修士論文。
赵鹏飞，2007,「地方高校毕业生就业问题与对策研究」『湖北汽车工业学院学报』vol.21，no.3，pp.67-70。
赵燕鷹・张東生・白波・吉如河，2005,「大学新生学校适应与家庭环境关系研究」『中国学校卫生』pp.147-148。
中国人民共和国国家统计局，2008，2012『中国統計年鑑』中国統計出版社。
朱绵庆・黄金辉, 2006,「大学生就业现状与观念的转变」『河北师范大学学报』, vol.29, no.2，pp.11-13。
Piore， Michael J. 1975，“Notes for a Theory of Labor Market Segmentation”, Richard C Edward， Michael Reich，& David M. Gordon. Lexington (Eds.)， Labor Market Segmentation， A: D.C.Health.

日本語文献

東清和・安達智子　編，2003,『大学生の職業意識の発達—最近の調査データの分析から』学文社。
有本章ほか　編，2005,『高等教育概論』ミネルヴァ書房。
池本淳一，2007,「大卒青年の就業問題とアスピレーション」『日中社会学研究』第 15 号，pp.91-109。
伊田勝憲，2003,「教員養成課程学生における自律的な学習動機づけ像の検討—自己同一性、達成動機、職業レディネスと課題価値評定との関連から」『教育心理学研究』51（4），pp.367-377。
伊藤一雄，1998,『職業と人間形成の社会学』法律文化社。
上西充子，2007,『大学のキャリア支援—実践事例と省察—』経営書院。
王傑，2005,「学部生の進路志向における家庭的背景の影響—中国の 4 大学を事例として—」『教育社会学研究』No.76，pp．245-263。
王智新，2004,『現代中国の教育』明石書店。
王文亮，2008,『現代中国の社会と福祉』ミネルブァ書房。

大阪大学･大学院人間科学研究科教育技術開発学研究室, 2004,『大学生にとって、いま「大学」とは？』。
小方直幸，1998,『大卒者の就職と初期キャリアに関する実証的研究—大学教育の職業的レリバンス—』広島大学大学教育研究センター。
小方直幸，2011,『大学から社会へ—人材育成と知の還元』玉川大学出版部。
岡本英雄, 1979 年,「青年と職業」, 吉田など『現代青年の意識と行動』pp.136-138, 誠信書房。
何清漣　著，坂井臣之助・中川友訳，2002,『中国・現在化の落とし穴』草思社。
片桐新自，2009,『不安定社会の中の若者たち』世界思想社。
苅谷剛彦，1991,『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会。
苅谷剛彦，1995,『キャンパスは変わる』玉川大学出版部。
苅谷剛彦，2001,『階層化日本と教育危機 : 不平等再生産から意欲格差社会 (インセンティブ・ディバイド) へ』有信堂高文社。
川久保美智子，2002,『日本・中国・アメリカ　働く者の意識　3 カ国比較』　かんぽう。
韓美蘭，2007,「中国大学生就業行動の決定要因に関する考察:地方大学生のアンケート調査による分析」『関西学院経済学研究』第 38 巻，pp.143-167。
韓美蘭, 2009,「大学新卒者の就業行動およびその規定要因に関する実証分析」『経済学論究』第 63 巻第 2 号，pp.161-182。
葛城浩一, 2009,『大学全入時代における学生の学習行動—「ボーダーフリー大学」を中心にして—』博士学位請求論文。
グラノブェター，マーク、渡辺深　訳，1998,『転職—ネットワークとキャリアの研究』　ミネルヴァ書房。
Coleman，James S. 1988，Social Capital in the Creation of Human Capital，　American Journal of Sociology，　94:S95-S120.(=2006，金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編『リーディングス　ネットワーク論』, 勁草書房)。
小杉礼子　編, 2002,『自由の代償—/フリーター—現代若者の就業意識と行動—』日本労働研究機構。
小杉礼子，2007,『大学生の就職とキャリア—「普通」の就活・個別の支援』勁草書房。
厳善平，2010,「上海市における出稼ぎ労働市場の階層構造」『桃山学院大学総合研究所紀要』第 25 巻第 2 期，pp.1-19。
佐藤三郎，1991,『生涯学習時代の大学教育』東信堂。
徐亜文・来島浩，2007,「中国における新規大学生卒業者の就職難の実態—山東省の事例を中心に—」『研究論叢. 人文系学・社会科学』　56(1/2)，pp. 77-105。
仙崎武・藤田晃之，　2008 年,『キャリア教育の系譜と展開』雇用問題研究会。

蘇暁環，2002 年，『中国の教育—改革とイノベーション—』五洲伝播出版社。
蘇真，2000 ，「二十一世紀に臨む中国高等教育—制度と問題点—」『日本・中国　高等教育と入試』中島直忠，玉川大学出版部。
園田茂人，2001 年，『現代中国の階層変動』中央大学出版部。
高橋超ほか　編，2002，『生徒指導・進路指導』ミネルヴァ書房。
武内清，2003，『キャンパスライフの今』玉川大学出版部。
武内清，2005a，『大学とキャンパスライフ』上智大学出版。
武内清，2005b，『学生のキャンパスライフの実証的研究—21 大学・学生調査の分析—』平成 16～18 年度文部科学省研究補助金研究成果報告書。
武内清，2009，『キャンパスライフと大学の教育力—14 大学・学生調査の分析—』平成 19～21 年度　文部科学省研究補助金研究成果報告書。
谷内篤博，2005，『大学生の就職意識とキャリア教育』勁草書房。
張紀潯・夏占友，2010 年，「中国における教育市場の変化—現状、特徴と問題点—」『城西大学経営紀要』第 6 号，pp.25-52。
露口健司，2011，「教育」，稲葉等『ソーシャル・キャピタルのフロンティア』ミネルヴァ書房。
登坂学，2007，「中国における高等教育普及と就職難」『九州保健福祉大学研究紀要』（8）pp.35-44。
中島直忠，2000，『日本・中国　高等教育と入試』玉川大学出版部。
西本佳代，2008，「大学生の学習行動に及ぼす就職意識の影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第 57 号，pp.125-132。
日本キャリア教育学会　編，2008，『キャリア教育概説』東洋館出版社。
日本労働研究機構　編，2003，『学校から職場へ—高卒就職の現状と課題—』。
橋本満・深尾葉子，1990，『現代中国の底流』行路社。
秦政春，2005，『大学生にとって、いま「大学」とは？』平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金研究成果報告書。
樋口匡貴等，2008，「大学生の就職活動における情報収集が進路探索行動に及ぼす影響」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第三部第 57 号，pp.167-174。
平尾元彦・重松正徳，2006，「大学生の地元志向と就職意識」『大学教育』第 3 号，pp.161-168。
福地守作，1995，『キャリア教育の理論と実践』玉川大学出版部。
藤井泰・山田浩之編，2005，『地方都市における学生文化の形成過程』松山大学地域研究センター。
藤本佳奈，2009，「地方私立大学生の就職意識に関する調査」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第 3 部第 58 号，pp.117-124。
堀有喜衣，2003，「地方における就職希望者の進路選択—都市部との比較をもとに

—」日本労働研究機構『学校から職場へ—高卒就職の現状と課題』調査研究報告書 No.154，pp.65-78。
堀口正・大竹章友，2010,「中国・大学生就業活動中の社会的ネットワークの役割」『経済学論集』Vol.50，No.1・2，pp.129-146。
本田由紀，2005,『若者と仕事—「学校経由の就職」を超えて—』東京大学出版会。
本田由紀，2009,『教育の職業的意義』筑摩書房。
牧野篤，1995,『民は衣食足りて—アジアの成長センター・中国人の人づくりと教育—』総合行政出版。
馬志遠，1998,「現代中国の大卒者就職過程に関する実証的研究」　『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 38 巻，pp.135-144。
馬志遠，2002,「中国新規大卒者初任給の規定要因」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 42 巻，pp.235-243。
丸川知雄，2002,『労働市場の地殻変動』名古屋大学出版会。
溝上慎一，2002,『大学生論—戦後大学生論の系譜をふまえて』ナカニシヤ出版。
溝上慎一，2004,『現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風にゆれる』日本放送出版協会。
溝上慎一，2007,『学生の学びを支援する大学教育』東信堂。
溝上慎一，2009,「「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討：正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す」『京都大学高等教育研究』第 15 号，pp.107－118。
村上純一，2011 年,「今日におけるキャリア教育の高等教育への拡大とその課題」,『東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢』，第 30 号。
文部科学省　編，2005,『2004 年諸外国の教育の動き』国立印刷局。
山内乾史，2004,『現代大学教育論』東信堂。
山内乾史，2008,『教育から職業へのトランジション—若者の就労と進路職業選択の教育社会学』東信堂。
山口泰史など，2000,「地方圏における若年者の出身地残留傾向とその要因について」『経済地理学年報』第 46 巻第 1 号，pp.43-54。
山田浩之，2007,「大学生の学習行動」，山田・葛城編『現代大学生の学習行動』pp.11-24，広島大学高等教育研究センター。
山田浩之，　2010,「地方大学における学生の学習行動と学習意識－大学の学校化がもたらす学習の形骸化－」『比治山高等教育研究 (3) 』pp.37-48。
山田浩之・葛城浩一編，2007,『現代大学生の学習行動』広島大学高等教育研究センター。
湯川やよい，2011 年,「アカデミック・ハラスメントの形成過程—医療系女性大学院生のライフストーリーから—」『教育社会学研究』第 88 集，　pp.163-182。

吉岡一志，2011，「キャリア意識からみた大学生の授業へのまなざし」『山口県立大学学術情報』第 4 巻，pp.19-25。
吉本圭一，2000，「国立大学における学卒無業と就職指導体制」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 2 号，通巻 44 集。
吉本圭一，2001，「大学教育と職業への移行―日欧比較調査結果から―」『高等教育研究』第 4 集，pp.113-134。
吉本圭一，2010，「高等教育の職業キャリアへの有効性－ラーニングアウトカムをどう設定するのか－」『大学と学生』第 83 号，pp.6-12。
李敏，2011，『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題』広島大学出版会。
Lin, N. 2001, Social Capital: A Theory of Social Structure and Action, Cambridge University Press, (=2008，筒井ほか訳，『ソーシャル・キャピタル―社会構造と行為の理論―』ミネルヴァ書房)。

調査票　「大学生の就職意識に関する調査」

此调查问卷意在明确我国大学生就业意识，并探究其与个人属性，大学专业选择，大学学习生活之间的关联性。

此次调查结果为不记名调查，调查结果将统一处理，不会泄露您的个人信息。

因调查内容多样，题量较大。如给您造成了麻烦，请见谅。也诚心希望您能通过本问卷加深对自身的学习与就业把握。

广岛大学教育学研究科　高静

A　关于您自身

1	性别	1　男　　2　女
2	学校	（　　）大学
3	学部学科	（　　）系（　　）专业
4	出生地	1　本省沿海　　2　本省内陆 3　外省沿海　　4　外省内陆
5	户籍所在地	1　农村　　2　中小城市　　3　大城市
6	兄弟姐妹	1　独生子女　　2　有 1 名　　3　2 名或 2 名以上
7	现在的住所	1　和父母住　　2　学生宿舍　　3　在外租房住
8	是否长子	1　是长子　　2　不是长子
9	是否党员	1　是党员　　2　不是党员
10	是否班干部	1　是班干部　　2　不是班干部
11	您父亲的学历	1　初中学历或以下　　2　高中学历 3　大学学历　　4　硕士或博士
12	您父亲的职务	1　行政管理者　　2　企业经营者　　3　专业技术人员 4　办公室人员　　5　个体经营者　　6　服务业人员 7　工厂劳动者　　8　农业劳动者　　9　军人 10　自由业者　　11　无业，失业人员
13	您父亲的月收入	1　999 元以下　　2　1000~2999 元 3　3000~4999 元　　4　5000 元以上
14	您母亲的学历	1　初中学历或以下　　2　高中学历 3　大学学历　　4　硕士或博士

15	您母亲的职业	1 行政管理者 2 企业经营者 3 专业技术人员 4 办公室人员 5 个体经营者 6 商店从业员 7 工厂劳动者 8 农业劳动者 9 军人 10 自由业者 11 无业，失业人员
16	您母亲的月收入	1 999 元以下 2 1000~2999 元 3 3000~4999 元 4 5000 元以上

B 关于您对自身就业前景的期待和认识

1 关于下面选择工作过程中重视的条件,是否符合您的想法?

		非常重视	比较重视	不置可否	不太重视	完全不重视
1	没有工作调动	1	2	3	4	5
2	工作内容轻松	1	2	3	4	5
3	休假制度健全	1	2	3	4	5
4	工作地点离家近	1	2	3	4	5
5	职场人际关系良好	1	2	3	4	5
6	工作稳定无下岗	1	2	3	4	5
7	没有岗位竞争压力	1	2	3	4	5
8	能帮助解决住房问题或有住房补贴	1	2	3	4	5
9	保险制度健全	1	2	3	4	5
10	能帮忙解决户籍问题	1	2	3	4	5
11	同一单位或相关领域有熟人	1	2	3	4	5
12	工作单位在大城市	1	2	3	4	5
13	收入高	1	2	3	4	5
14	工作单位有发展潜力	1	2	3	4	5
15	具备现代化经营理念	1	2	3	4	5
16	规模大	1	2	3	4	5
17	知名度高	1	2	3	4	5
18	工作内容符合自己兴趣	1	2	3	4	5
19	能发挥专业知识	1	2	3	4	5

		非常重视	比较重视	不置可否	不太重视	完全不重视
20	能发挥自己的能力或个性	1	2	3	4	5
21	升职等各种机会平等 无歧视	1	2	3	4	5
22	出差机会较多	1	2	3	4	5
23	工作进修机会多	1	2	3	4	5
24	升职机会多	1	2	3	4	5
25	能提高社会能力	1	2	3	4	5
26	能学到专业技能	1	2	3	4	5
27	工作内容具有多样性	1	2	3	4	5
28	社会地位高	1	2	3	4	5
29	对社会有贡献	1	2	3	4	5
30	对他人有帮助	1	2	3	4	5

2 您毕业后准备在哪里就业?请将下面的答案中符合的项目全部圈出来.

1 家乡 2 沿海地区 3 内陆城市 4 西部地区
5 农村地区 6 内陆城市 7 没有特别要求

3 您毕业后准备做哪类工作? 请将下面的答案中符合的项目全部圈出来.

1 政府机关 2 事业单位 3 国有企业 4 外资企业
5 科研单位 6 国内私有企业 7 在国内考研 8 留学
9 创业 10 在国外就业 11 没有特别要求
12 不知道 13 其他意见( )

4 您理想的职位是什么? 请将下面的答案中符合的项目全部圈出来.

1 行政管理者 2 办公室人员 3 教师
4 专业技术人员 5 企业经营者 6 个体经营者
7 商店从业员 8 工厂劳动者 9 农业劳动者
10 自由业者 11 军人不清楚 12 无业，失业人员
13 其他意见( )

5　您希望第一份工作的工资是多少？请在下面答案中选出最符合您想法的一项。

1　999 元以下　　2　1000~1999　　3　2000~2999

4　3000~3999　　5　4000 元以上

6　如果您临近毕业还没有如期实现您的就业目标，您将如何打算？

		非常符合	比较符合	不置可否	不太符合	完全不符合
1	选择失业，靠别人养活	1	2	3	4	5
2	先找个活干，以后再慢慢换好的	1	2	3	4	5
3	放低要求，重新择职	1	2	3	4	5
4	继续求学深造	1	2	3	4	5
5	自主创业	1	2	3	4	5
6	响应支教，参军等国家引导政策	1	2	3	4	5
7	总结经验，坚持原择业标准继续求职	1	2	3	4	5

7　下面关于大学生就业的言论是否符合您的想法?

		非常符合	比较符合	不置可否	不太符合	完全不符合
1	我认为应先就业,后择业	1	2	3	4	5
2	我认为考研比毕业后立即工作更有利于就业	1	2	3	4	5
3	我认为自己的就业意识存在问题	1	2	3	4	5
4	只要工资可观工作的内容和地点都是次要的	1	2	3	4	5
5	我会考虑去农村地区就业	1	2	3	4	5
6	我认为在农村就业会影响到将来的前程	1	2	3	4	5
7	我会在意工作是否体面	1	2	3	4	5
8	我认为与其上大学不如高中毕业立即就业	1	2	3	4	5
9	如果有机会，我会积极创业	1	2	3	4	5
10	我认为只要能找到工作其他都是次要的	1	2	3	4	5
11	我认为应当响应支边支教等国家政策	1	2	3	4	5
12	我重视我的第一份工作	1	2	3	4	5
13	工作不适合自己就会果断跳槽	1	2	3	4	5
14	我会考虑跨专业就业	1	2	3	4	5

8　关于就业的动机，下面的哪些选项符合您的想法？请将下面的答案中符合的项目全部圈出来.

1　为了经济上独立　　2　为了充实人生　　3　为了自我完善

4　为了地位名声　　5　为了贡献社会　　6　为了赡养父母

7　为了发财　　8　为了家族荣誉　　9　不清楚　　10　其他意见

9　关于现在您在就业方面所处的情况，下面的提示是否符合您的想法？

		非常符合	比较符合	不置可否	不太符合	完全不符合
1	对父母等周围人的期待感到压力	1	2	3	4	5
2	我在就业上较重视周围人的眼光	1	2	3	4	5
3	还没有开始考虑就业的事情 我有就就业问题进行商议的对象	1	2	3	4	5
4	我有较有力的家庭背景	1	2	3	4	5
5	对毕业后的去向有明确的打算	1	2	3	4	5
6	不知应如何搜集就业信息	1	2	3	4	5
7	我担心找工作花销大	1	2	3	4	5
8	担心自己的就业意识与实际情况不符	1	2	3	4	5
9	我了解找工作的大体流程	1	2	3	4	5
10	对就业后生活有明确的规划	1	2	3	4	5
11	对自己的就业前景有信心	1	2	3	4	5
12	大学或老师对就业提供了指导和帮助	1	2	3	4	5
13	我积极搜索关于就业的信息	1	2	3	4	5
14	我会有目的性的训练就业能力或技巧	1	2	3	4	5
15	我经常为就业的事情考虑很多	1	2	3	4	5

10 您认为哪些因素能对大学生成功就业产生重要影响？您多大程度具备这些因素？

		对就业成功的重要性				在这些因素上您是否占据优势			
		重要	较重要	不太重要	不重要	有优势	比较优势	不太优势	没优势
1	资格证书	1	2	3	4	1	2	3	4
2	大学学历	1	2	3	4	1	2	3	4
3	大学排名	1	2	3	4	1	2	3	4
4	大学成绩	1	2	3	4	1	2	3	4
5	社会经验	1	2	3	4	1	2	3	4
6	人格素养	1	2	3	4	1	2	3	4
7	人脉关系	1	2	3	4	1	2	3	4
8	交流能力	1	2	3	4	1	2	3	4
9	工作热情	1	2	3	4	1	2	3	4
10	责任感	1	2	3	4	1	2	3	4
11	判断分析能力	1	2	3	4	1	2	3	4
12	户籍	1	2	3	4	1	2	3	4
13	所学专业	1	2	3	4	1	2	3	4
14	实际专业技能	1	2	3	4	1	2	3	4
15	兴趣特长	1	2	3	4	1	2	3	4
16	性别	1	2	3	4	1	2	3	4
17	党员	1	2	3	4	1	2	3	4

11 您认为以下就业途径多大程度上有利于找到工作？

		非常有利	比较有利	不置可否	不太有利	完全无利
1	校园招聘会	1	2	3	4	5
2	校外招聘会	1	2	3	4	5
3	直接到招聘单位拜访	1	2	3	4	5
4	熟人介绍	1	2	3	4	5
5	网络招聘	1	2	3	4	5
6	通过就业指导中心或所在院系介绍工作	1	2	3	4	5

12　您通常是如何获取就业信息的？请在下面答案中最符合您情况的**全部圈出**。

1　父母亲属　　2　老师　　3　学校的同学

4　社会上的朋友　　5　学校就业指导部门　　6　互联网

7　社会上的就业指导部门　8　报纸新闻杂志　　9　其他（　）

C 关于您的大学生活

1　关于您选择现所在大学的理由，请在下面答案中最符合您情况的**全部圈出**。

1　离家近　2　大学所在地很有魅力　3　与自己的高考成绩相符

4　有熟人　5　周围人的推荐　6　对考研或找工作有利

7　离家远　8　知名度高　9　对这里比较熟悉

10　在本校有感兴趣的专业　11　其他的志愿都落空了

12　其他理由(　　)

2　关于您选择现在所在专业的理由，请在下面答案中最符合您情况的**全部圈出**。

1　感兴趣　2　对考研或就业有利　3　与自己的高考成绩相符

4　周围人的推荐　5　专业内容较简单　6　因为对此专业较熟悉

7　符合自己的能力或个性　8　知名度高

9　同一领域有相应的人脉关系　10　其他意见（　　）

3　关于在大学的学习，下面的提示是否符合您的情况？

		非常符合	比较符合	不置可否	不太符合	完全不符合
1	经常预习和复习学校所学内容	1	2	3	4	5
2	经常就所学内容与老师或同学讨论	1	2	3	4	5
3	经常阅读与专业知识相关的书籍	1	2	3	4	5
4	不影响毕业的课程就尽量不去上	1	2	3	4	5
5	经常为了资格考试而学习	1	2	3	4	5
6	经常为上课感到很痛苦	1	2	3	4	5
7	积极学习公选课内容	1	2	3	4	5
8	大学有我感兴趣的课程	1	2	3	4	5
9	我认为自己学习成绩算是好的	1	2	3	4	5
10	对在大学学习的意义感到怀疑	1	2	3	4	5

4　在校期间，除了上课时间以外您平均每天有多少时间在学习？请在下面答案中选出最符合的一项。

1　0 小时　　2　1 小时以下　　3　超过 1 小时少于 2 小时

4　超过 2 小时少于 3 小时

5　超过 3 小时少于 4 小时　　6　4 小时以上

5　关于大学生活，下面的提示是否符合您的情况？

		非常符合	比较符合	不置可否	不太符合	完全不符合
1	经常看电影或电视剧	1	2	3	4	5
2	经常玩电脑或网络游戏	1	2	3	4	5
3	经常积极地去了解社会动态	1	2	3	4	5
4	经常使用网络交流工具(如 QQ 等)	1	2	3	4	5
5	经常去卡拉 ok 或酒吧	1	2	3	4	5
6	经常喝酒	1	2	3	4	5
7	经常抽烟	1	2	3	4	5
8	经常打扑克等	1	2	3	4	5
9	较多外出旅游	1	2	3	4	5
10	经常读小说或漫画	1	2	3	4	5
11	非常在乎衣着打扮	1	2	3	4	5
12	经常在外闲逛或购物	1	2	3	4	5
13	有擅长的艺术类活动或技能	1	2	3	4	5
14	有擅长的体育类活动或技能	1	2	3	4	5
15	经常学习除专业以外的知识	1	2	3	4	5
16	积极培养自身的兴趣特长	1	2	3	4	5
17	积极参加大学内组织的课外活动	1	2	3	4	5
18	认真地参加过志愿者活动	1	2	3	4	5
19	认真地打过工	1	2	3	4	5
20	认真参加过社团活动	1	2	3	4	5
21	在同学中社会经验较丰富	1	2	3	4	5

		非常符合	比较符合	不置可否	不太符合	完全不符合
22	和男(女)朋友在一起的时间较多	1	2	3	4	5
23	没事时在宿舍睡觉的时间较多	1	2	3	4	5
24	经常与朋友聚餐	1	2	3	4	5
25	与社会上的人接触机会较多	1	2	3	4	5

D　关于您所在大学的就业指导工作，您有什么期待？大学的就业指导多大程度发挥了其作用？

		您是否期待？				多大程度发挥了作用？			
		非常期待	较期待	不太期待	完全不期待	作用很大	作用较大	基本没作用	完全没作用
1	就业知识讲座	1	2	3	4	1	2	3	4
2	开展职业规划课程	1	2	3	4	1	2	3	4
3	邀请成功人士介绍社会经验	1	2	3	4	1	2	3	4
4	对社会实习进行指导和帮助	1	2	3	4	1	2	3	4
5	提供就业信息	1	2	3	4	1	2	3	4
6	组织社会实践活动	1	2	3	4	1	2	3	4
7	组织资格证书考试辅导	1	2	3	4	1	2	3	4
8	组织专业技能培训	1	2	3	4	1	2	3	4
9	举办招聘会等	1	2	3	4	1	2	3	4
10	指导创业	1	2	3	4	1	2	3	4

谢谢您的合作.

如果您对此次调查有什么意见或建议,请写在下面的留言板.

留言板